山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第20集

横畑遺跡
弥三郎遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

1987.3

山梨県教育委員会
関東農政局笛吹川農業水利事業所

横畑遺跡

弥二郎遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

1987.3

山梨県教育委員会
関東農政局笛吹川農業水利事業所

序

本報告書は、1985年度に実施した笛吹川農業水利事業国営幹線管水路敷設工事に伴う事前発掘調査の結果をまとめたもので、対象は山梨県東八代郡豊富村大鳥居字横畑に所在する横畑遺跡と、同村関原字弥二郎に所在する弥二郎遺跡の２遺跡であります。

これら両遺跡は、甲府盆地の南東辺、曽根丘陵上に位置しておりますが、曽根丘陵といえば、先土器時代に始まり、各時代の遺跡・遺物が濃厚に分布することで知られ、とくに本県古墳文化発祥の地として大小の古墳が集中する曽根丘陵古墳群を形成しております。両遺跡の周辺にも、王塚古墳をはじめ多数の古墳が残存するほか、各時代の遺跡が密集しておりますが、鎌倉時代には甲斐源氏の一族浅利氏の拠点であり、戦国時代には武田氏の部将三枝土佐守が館を置いたと伝えられ、中世の遺跡が豊富なことでも注目せられます。

両遺跡、とくに横畑遺跡からは、先土器時代のナイフ形石器に始まり、中・近世に至るまで、各時代の遺構・遺物が多数発見されましたが、特筆すべきものは、横畑遺跡の中・近世遺構と遺物群とであります。44基の方形を主体とする大小の竪穴状遺構と小ピット群が検出され、それに伴う遺物群としては、土師質土器の小皿や内耳土器・擂鉢などが出土いたしました。年代の決め手となる陶磁器はほとんどありませんが、調査者は、他遺跡の出土品との比較などから、上限を16世紀以後、すなわち戦国時代に置き、近世に入ってもそう新しいものではあるまいと推定しております。

両遺跡を含めて周辺には50余の遺跡が知られていますが、本報告書は、それらのうち、詳細な調査・研究の成果としては数少ないものであり、地域の歴史研究にとって重要な資料になるものと信じます。多くの方々にご活用いただければ幸甚です。

末筆ながら、ご協力を賜わった関係機関各位並びに直接調査に当たられた皆様方に厚く御礼申し上げます。

1987年３月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　磯貝正義

例　　言

1．本書は、山梨県東八代郡豊富村大鳥居字横畑に所在する横畑（ヨコバタケ）遺跡と、関原字弥二郎に所在する弥二郎（ヤジロウ）遺跡の調査報告書である。

2．本調査は、笛吹川農業水利事業の国営幹線管水路敷設工事に伴うもので、山梨県教育委員会が農林水産省関東農政局の委託と文化庁の国庫補助金を受けて実施したものである。

3．発掘調査および出土品の整理は、山梨県埋蔵文化財センターが行った。

4．本書の編集は保坂康夫が行った。執筆は、第５章を河西学（山梨文化財研究所）、それ以外を保坂が行った。遺物の写真撮影は、塚原明生（日本写真家協会会員）が行った。

5．出土品および図面、写真は、山梨県埋蔵文化財センターが保管している。

6．整理参加者は、下記の方々である。

中込秀夫、斎藤多喜子、江川勝子、芹沢はな代、渡辺はる美、出月多津子、出月美矢子、宇野文子、宇野和子、山口清子、石原花子、渡辺はるみ、桜井幸子、中橋睦、大芝智子、長田晶子、石原次代、林部貴子、岩瀬光男、池谷美恵子、若尾澄子、石川操、弦間千鶴、小笠原睦子、後藤良美、名取洋子、渡辺徹章。

7．発掘調査から報告書作成に至る過程で、次の方々から特に多大な御助力をいただいた。衷心より謝意を表する。（敬称略）

有泉知教（豊富村教育委員会）、岩切唯雄（関東農政局）、筒井司（関東農政局）、伊藤隆夫（関東農政局）、畑大介（甲府市教育委員会）。

目　　次

序

例言

第1章　調査経過と組織

第1節　調査経過 …… 1

第2節　調査組織 …… 1

第2章　遺跡の地理的・歴史的環境

第1節　遺跡の所在地と立地 …… 2

第2節　周辺の遺跡 …… 3

第3章　横畑遺跡の調査

第1節　調査の方法と経過 …… 4

第2節　層序 …… 4

第3節　遺構と遺物

1．先土器時代の遺物 …… 8

2．縄文時代の遺構と遺物 …… 8

3．弥生時代の遺構と遺物 …… 13

4．古墳時代の遺物 …… 20

5．奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 20

6．中・近世の遺構と遺物 …… 28

第4章　弥二郎遺跡の調査

第1節　調査の方法と経過 …… 58

第2節　層序 …… 58

第3節　遺構と遺物

1．先土器時代の遺物 …… 62

2．縄文時代の遺物 …… 62

3．弥生時代の遺構と遺物 …… 63

4．中・近世の遺物 …… 68

第5章　横畑遺跡周辺の地形と地質 …… 69

まとめ …… 71

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置および周辺遺跡分布図……２
第２図　遺跡周辺地形および遺構配置図
……５～６
第３図　横畑遺跡土層図……７
第４図　先土器時代石器……８
第５図　１号住居址……９
第６図　１号住居址出土遺物……10
第７図　第１小ピット群……11
第８図　Ｐ６出土土器……11
第９図　縄文時代遺物……12
第10図　縄文時代石器……13
第11図　２号住居址……14
第12図　２号住居址出土土器……15
第13図　３号住居址……16
第14図　３号住居址出土遺物……17
第15図　４号住居址……18
第16図　４号住居址出土土器……18
第17図　弥生・古墳時代遺物……19
第18図　５号住居址……21
第19図　５号住居址出土土器……21
第20図　６号住居址……22
第21図　６号住居址カマド……23
第22図　６号住居址出土土器……24
第23図　７号住居址……26
第24図　７号住居址出土土器……27
第25図　奈良・平安時代の土器……28
第26図　１号竪穴状遺構……29
第27図　１号竪穴状遺構出土土器……29
第28図　２号竪穴状遺構……29
第29図　２号竪穴状遺構出土土器……29
第30図　３号竪穴状遺構……30
第31図　３号竪穴状遺構出土土器……30
第32図　４号竪穴状遺構……30
第33図　５・６号竪穴状遺構……31
第34図　７・８・９号竪穴状遺構……31
第35図　７・９号竪穴状遺構出土土器……31
第36図　10・11・12・13号竪穴状遺構……32
第37図　10・11号竪穴状遺構出土土器……32
第38図　14・15号竪穴状遺構……34
第39図　14号竪穴状遺構出土遺物……35
第40図　15号竪穴状遺構出土土器……36
第41図　16・17号竪穴状遺構……36
第42図　18・19号竪穴状遺構……36
第43図　18号竪穴状遺構出土遺物……37
第44図　18号竪穴状遺構出土石器……38
第45図　20・21・22号竪穴状遺構……39
第46図　22号竪穴状遺構出土土器……39
第47図　23号竪穴状遺構……40
第48図　23号竪穴状遺構出土土器……40
第49図　24・25号竪穴状遺構……41
第50図　26・27号竪穴状遺構……41
第51図　25号竪穴状遺構出土土器……41
第52図　27号竪穴状遺構出土土器……41
第53図　26号竪穴状遺構出土土器……41
第54図　28～36号竪穴状遺構（1）……42
第55図　28～36号竪穴状遺構（2）……43
第56図　34・35号竪穴状遺構出土土器……44
第57図　37・38・39号竪穴状遺構……45
第58図　38号竪穴状遺構出土土器……45
第59図　40号竪穴状遺構……45
第60図　40号竪穴状遺構出土土器……45
第61図　41・42・43・44号竪穴状遺構と第４小ピット群……46
第62図　41・42・43・44号竪穴状遺構出土土器……46
第63図　第２小ピット群……47

第64図　第２小ピット群Ｐ２内出土土器……47
第65図　第３小ピット群 (1) ……48
第66図　第３小ピット群 (2) ……49
第67図　第３小ピット群出土土器 (1) ……50
第68図　第３小ピット群出土土器 (2) ……51
第69図　第３小ピット群出土石器……52
第70図　第５小ピット群……54
第71図　第５小ピット群出土遺物 (1) ……55
第72図　第５小ピット群出土遺物 (2) ……56
第73図　中・近世遺物……57
第74図　遺跡周辺地形および遺構配置図……59～60
第75図　弥二郎遺跡土層図……61
第76図　先土器時代石器……62
第77図　縄文時代土器……63
第78図　縄文時代石器 (1) ……63
第79図　縄文時代石器 (2) ……64
第80図　１号住居址……65
第81図　１号住居址出土遺物……65
第82図　２号住居址……66
第83図　２号住居址出土土器……66
第84図　３号住居址……67
第85図　弥生時代および中・近世遺物……68
第86図　土層柱状図作成地点位置図……69
第87図　土層柱状図……69

図 版 目 次

図版 1　横畑遺跡航空写真
横畑遺跡遠景
A区遺構配置状況
A区中央ローム層掘削状況
1号住居址
1号住居址埋甕
図版 2　2号住居址
2号住居址炉址断面
3号住居址
3号住居址遺物出土状態
4号住居址
5号住居址
図版 3　6号住居址
6号住居址カマド
7号住居址
7号住居址カマド
1号竪穴状遺構
2号竪穴状遺構
図版 4　3号竪穴状遺構
4号竪穴状遺構
9号竪穴状遺構
5～13号竪穴状遺構
14～17号竪穴状遺構
18・19号竪穴状遺構
図版 5　20～22号竪穴状遺構
23号竪穴状遺構硬い覆土の分布状態
23号竪穴状遺構掘り上げ状況
28～36号竪穴状遺構
ロームブロックを含む竪穴状遺構覆土と切り合い状況
掘削工具痕
図版 6　37～39号竪穴状遺構
40号竪穴状遺構
41号竪穴状遺構
42～44号竪穴状遺構
第3小ピット群
第5小ピット群と礫の分布
図版 7　弥二郎遺跡遠景
遺構配置状況
完掘状況
図版 8　1号住居址
1号住居址炉址
2号住居址
2号住居址台付甕形土器出土状態
3号住居址
3号住居址炉址
図版 9　1号住居址埋甕
図版10　3号住居址出土遺物
4号住居址出土遺物
図版11　6号住居址出土遺物
中・近世小皿
図版12　内耳土器
擂鉢
第3小ピット群出土石器
溶融物付着土器
弥二郎遺跡2号住居址出土土器

第Ⅰ章　調査経過と組織

第1節　調査経過

昭和60年10月15日　横畑遺跡、弥二郎遺跡の発掘通知を文化庁に提出。
昭和60年10月21日　弥二郎遺跡の発掘調査を開始。
昭和60年11月 2 日　横畑遺跡の発掘調査を開始。
昭和60年12月 2 日　弥二郎遺跡の発掘調査終了。
昭和60年12月26日　横畑遺跡の発掘調査終了。
昭和61年 1 月28日　両遺跡の遺物発見通知を南甲府警察署へ提出。

第2節　調査組織

調査主体　　山梨県教育委員会
調査機関　　山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者　保坂康夫
調　査　員　新津重子、日向千恵
作　業　員　中込　秀夫、石原　勝子、水上　国江、渡辺はるみ、芹沢はな代、渡辺はる美、
中楯　　睦、桜井　幸子、中楯　俊江、中込　治美、長田　春江、渡辺　雅子、
小沢　節子、斎藤多喜子、江川　勝子、宇野　文子、石原　花子、出月美矢子、
出月多津子、宇野　和子、山口　清子、高野せき子、飯室　次枝、土橋春代、
石原富美子、志村　文江、土橋　春枝、薬袋と久子、田中貴和子、相原ツネ子、
中沢　浦子、小池　一美、塚田　明子、原　　節郎、角田美代子、池谷美恵子、
高野　俊彦、石原　次代
協力機関　豊富村教育委員会

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

第１節　遺跡の所在地と立地

横畑遺跡は、山梨県東八代郡豊富村大鳥居字横畑に所在する。御坂山地から舌状に飛び出した台地上に広く立地するが、発掘地点は遺跡の最も奥部で山地と台地の平坦面の接する部分である。標高は、329mから320mである。弥二郎遺跡は、山梨県東八代郡豊富村関原字弥二郎に所在する。横畑遺跡とほぼ同一レベルの平坦面の台地上に立地するが、四方を開析され、長さ300m、幅100mほどの孤立した台地となっている。発掘地点は台地の最高地点からやや南へ下った部分である。標高は、324mから320mである。なお、文化庁が昭和56年に発行した全国遺跡地図山梨県によると、発掘地点は関原弥治郎遺跡という呼称である。これは山梨県教育委員会が、昭和52年に行った遺跡分布調査の結果に基づくものであるが、本地点の小字は、先述したとおり弥二郎となっており、関原字弥治郎は台地西側の斜面の小字のようである。今後は、遺跡名の

1．横畑遺跡　2．弥二郎遺跡
3～14、17～21、24．無名墳
15．伊勢塚古墳、16．王塚古墳
22．城原王塚古墳　23．金塚古墳
25.おさんごうじ古墳
26.久保田遺跡　27.川東遺跡
28.椚田遺跡　29．見間遺跡
30.久保遺跡　31.城原遺跡
32.(伝)浅利氏館跡
33.大鳥居宇山平遺跡
34.高部宇山平遺跡　35.中尾遺跡
36.上野原遺跡
37.(伝)三枝土佐守館跡
38.代中遺跡　39.駒平遺跡
40.高向遺跡　41.上三口西遺跡
42.上三口遺跡　43.東原遺跡
44.原遺跡　45.弥二郎遺跡
46.中原遺跡　47.付山南遺跡
48.付山北遺跡　49.浜井場遺跡
50.柿戸原遺跡　51.お御崎さん古墳
52.清水遺跡

第１図　遺跡位置および周辺遺跡分布図
（国土地理院発行1／25000地形図市川大門図幅使用）

混乱を避け、関原弥治郎遺跡（第1図2）と木原弥二郎遺跡（第1図45）とを、両者は近接しているので、弥二郎遺跡と総称することを提案したい。

第2節　周辺の遺跡

横畑、弥二郎遺跡の周辺には、第1図に示したとおり52カ所もの遺跡がある。昭和52年に山梨県教育委員会が行った遺跡分布調査の結果から、時代別の遺跡分布のありかたをみてみよう。先土器時代の遺物は、横畑、弥二郎遺跡でしか出土していない。近い所では中道町後呂遺跡、同米倉山遺跡などでナイフ形石器が少数点出土しているが、おおむね曽根丘陵上には大きな遺跡は立地していない可能性がある。縄文時代遺跡は24カ所で、26で早期、1、31、33、34、36、40、41、43、44、46の遺跡で前期、1、2、26～36、38～41、43、44、46～49、52の23遺跡で中期、39で後期の遺物が表採されている。弥生時代遺跡は12カ所で、1、2、26、27、29、31、33～35、38、42、45、49の遺跡である。古いものでは条痕文土器が表採されているが、ほとんど後期である。古墳時代は散布地が13カ所、古墳が24カ所である。古墳時代前期の散布地は、1、2、26、29、33、35、45で、すべて弥生時代の遺跡と重複する。古墳時代中期のものは、35でしか知られていない。古墳時代後期は、1、28、30、31、36、39、43、47で、1以外は前期と重複するものがない。奈良時代の明確なものは1のみで出土している。平安時代は9カ所で、1、27、30、35、38、41、43、46、52の遺跡である。中世以後の土師質土器が表採された遺跡は5カ所で、37、40～42、50である。32、37は中世館跡である。

これらの立地する地形については、第5章で詳述するが、ここでは概略を示し、遺跡立地のありかたについてみてみよう。遺跡の大半は、標高300～340mほどの平坦面に立地する。この平坦面は北西に流下する川と、北東に流下する川の、おのおの直交する河川によって縦横に切られている。台地前面も一直線にならずに階段状にくい違っており、直交する河川も含め、本地域が断層の構造運動の影響を強く受けていることがうかがえる。河川によって寸断された平坦面の間に、河川によって開析されたV字谷や平坦面、さらに河川の堆積作用によって形成されたであろう平坦面が存在する。また、第1図中央やや北側の中木原は、あたかも浅い盆状に平坦面が陥没したかのような地形である。こうした地形はかなり古い時期に形成されたものと思われる。たとえば、ローム層中の黒色帯が地形傾斜と同様に傾斜する点からも判断できる。黒色帯は、河西学氏によると22,000年前以後に形成されたものなので、少なくともその段階にはおおよその地形が形成されていたと考えられる。遺跡の大半は、平坦面に立地する。現在の集落が河川の開析面、堆積面に立地するのと対照的である。時期別の変化もあまり明瞭ではない。ただし、古墳は台地の前面近くに多く立地する。縄文時代から中世に至る遺跡が立地条件を変化させずに立地している点が本地域の特徴と把えうる。時代変遷に伴う生業変遷にもかかわらず、本地域を高度に利用した姿、逆に本地域がそうした利用に十分答えられたとも把えうる。さらに古墳時代後期には、台地前面に墓域が形成されるといった立地の変化はあったかもしれない。また、中世以後の集落は、主に谷部へ移っていったとも考えられる。

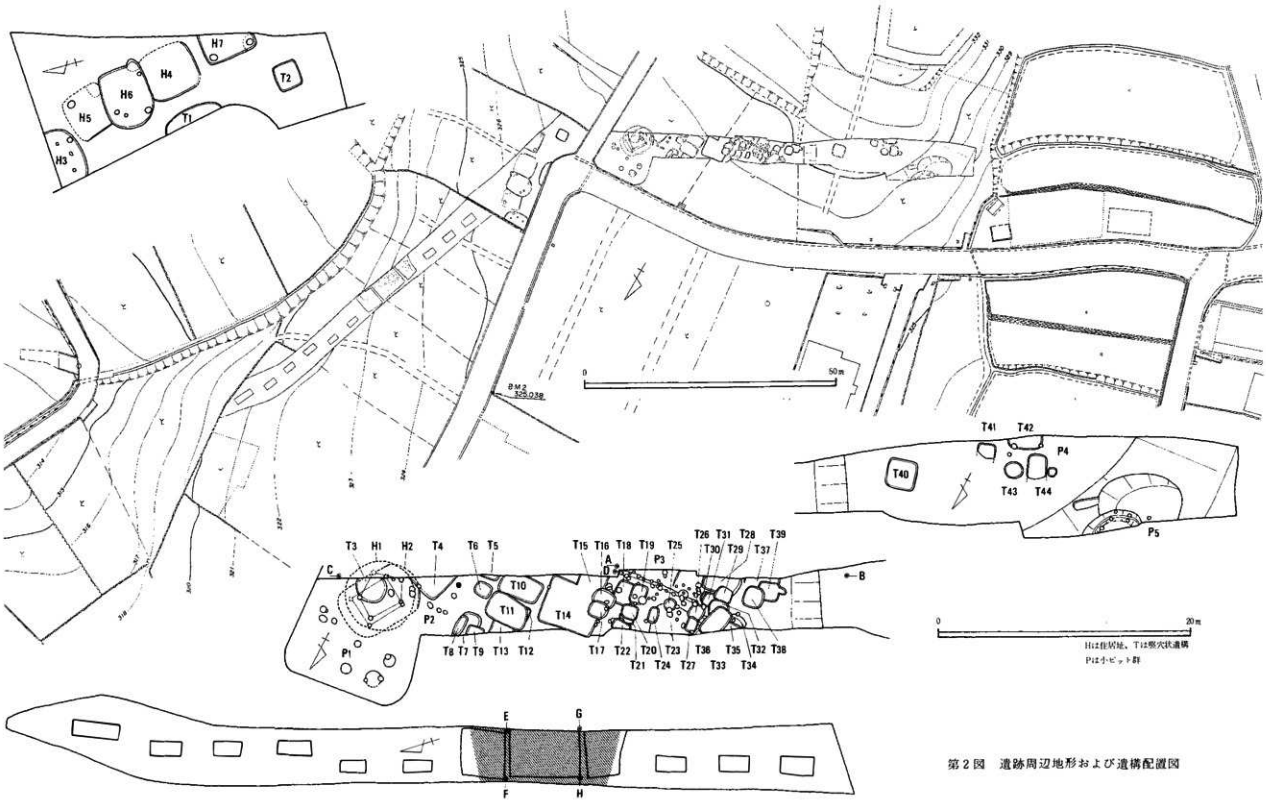
第３章　横畑遺跡の調査

第１節　調査の方法と経過

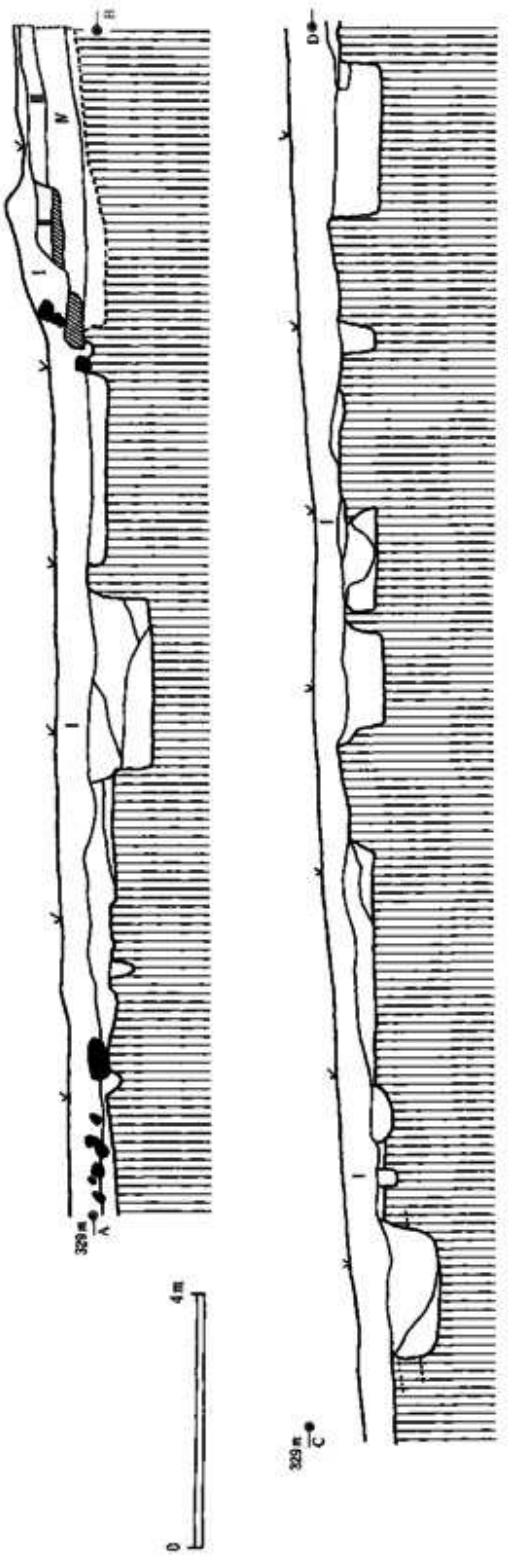
発掘調査は水管埋設によって掘削される幅３～５ｍの部分と、工事用道路の付設に伴い掘削される部分について行った。関東農政局の設定した工事用のセンター杭を基準に、発掘区の中央に５ｍ間隔の実測用基準杭を設定した。杭は、耕作土を重機で除去した後に設定した。発掘区東側（第２図東側の道路より東の部分、第５章ではＢ地区と呼称）や発掘区西端の発掘区最高部の小高い地点については、耕作土が非常に浅く、20～30cmでローム層に達した。ところが、発掘区中央（第２図の東西方向の道跡より南側の発掘区の西半分、第５章では発掘区西端を含めてＡ区と呼称）では耕作土が非常に浅く、厚い所では１ｍ前後もあった。土質も非常に軟質で、こうした土壌を地元では「ドカッツチ」と呼んでいるようである。ここでは、ロームブロックを多量に含む黒色土層（竪穴状遺構の覆土）を確認した段階で、手作業の発掘に切り換えた。遺構の確認は、ジョレンがけ作業で行った。竪穴状遺構が多数切り合う地域では、土層の違いを見ながら切り合い関係に注意しながら掘り進めた。こうした地点では、なるべくセクションベルトを多く設定し掘り集めた。出土遺物は全点実測し、図面にその位置とレベルとを記録した。その結果、縄文時代中期末の住居址１軒、弥生時代後期後葉の住居址３軒、平安時代後半の10世紀末の住居址１軒、12世紀代の住居址２軒、中世末から近世初頭と思われる竪穴状遺構44基、縄文時代中期の土壙も含む小ピット群５群を確認した。また、出土遺物は、先土器時代、縄文時代前～後期、弥生時代中・後期、古墳時代前・後期、奈良時代、平安時代、中世、近世のものが得られた。なお、先土器時代石器が表土中ながら出土したので、遺跡の有無の確認作業を行った。Ｂ区では任意にトレンチ設定し、Ａ区西半でもトレンチを設定したが、遺物は確認できなかった。Ａ区東半では、黒色帯下のハードローム層が全面的に露出していたので、この作業は行われなかった。また、Ｂ区中央で、遺物の集中地域を確認した（第２図の細斜線部分）。この地域には縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代の遺物が多量に分布していたのが、遺構は確認できなかった。ゴミ捨て場的な場所であったのかもしれない。

第２節　層　序

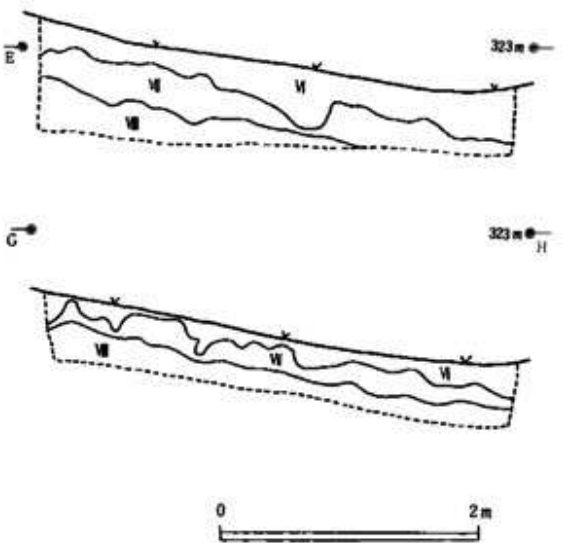
第３図左側がＡ区、右側がＢ区の土層図で、セクションポイントは、第２図中に示してある。Ⅰ層は、耕作土層である。非常に軟質で、新しい石垣がこの中に埋没していた。Ａ区東半部で特に厚いが、竪穴状遺構の覆土の多くが耕作土層になっているものと理解できる。Ａ区東半部の遺構内の土層については、各遺構の説明の際に記述する。Ⅱ層は、Ａ区西側の小山を切り込んで作った古い道の覆土で、暗褐色土層である。その下位の細斜線部は踏みかためられたⅡ層である。Ⅲ層以下は自然土層で、Ⅲ層ソフトローム層、Ⅳ層黒色帯、Ⅴ層ハードローム層である。



第２図　遺跡周辺地形および遺構配置図



第3図　横畑遺跡土層図

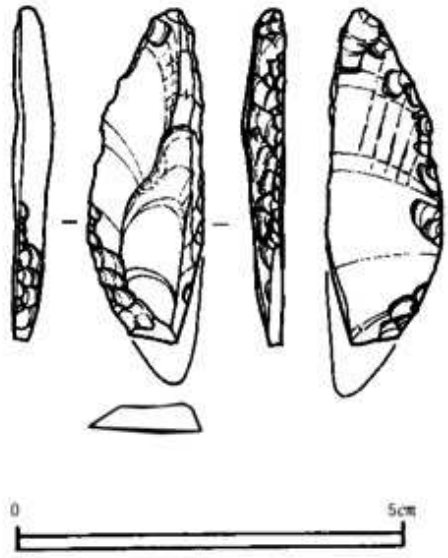


Ⅲ層、Ⅳ層は、A区東半部ではほとんど削り取られており、ソフトローム上面がほぼ現在の地表面ほどのレベルにあったと推定される。この削り取りについては、第3小ピット群に重なる遺物が竪穴状遺構とあまり時期差をもたない点から、両遺構群が形成される時点であると考えられる。また、その範囲は、第2、第3小ピット群や竪穴状遺構の各辺が、A区東半部西端の段や南側の段と平行ないし直交するありかたからして、段のある部分までとも考えられる。中・近世遺構群が形成されるにあたり、小山東半部の掘削・削平があったと推定したい。なお、黒色帯やソフトロームはT4からT3付近以東で残存しており、掘削もこのあたりまでと思われる。A区西半部では、土層図を示さなかったが、Pm－Ⅰやその下位のくされ礫層が南北方向で露出していた。したがって、旧来の地形は、東へゆるやかに傾斜し、西側が河川によって切られている。B区ではⅥ層が黒色土層、Ⅶ層が暗褐色土層、Ⅷ層がソフトローム層である。遺物はⅦ層に多量に包含されていた。Ⅵ層は、耕作による攪乱をのがれた旧来の土層である。

第３節　遺構と遺物

１．先土器時代の遺物

ナイフ形石器１点が出土した。A区中央の段付近の耕作土中から出土した。素材の左縁に刃縁を残した、いわゆる二側縁加工のナイフ形石器である。右縁のブランティングはすべて裏面から行われ、一部が欠損するものの、先端から末端まで連続していたものと思われる。左縁のブランティングは非常に浅く、しかもかなり傾斜している。基部の裏面加工は一部が残存している。刃縁部裏面に連続する剥離は、二次加工というよりも、大規模な使用痕とみられる。素材は石刃で、正、裏面とも同一方向の剥離である。その素材の末端を先端にしている。黒曜石製である。遺物の出土地点を含め、ソフトローム層以下の残存する部分で深掘したが、他の遺物の出土はみられなかった。石器の図を第４図に示す。



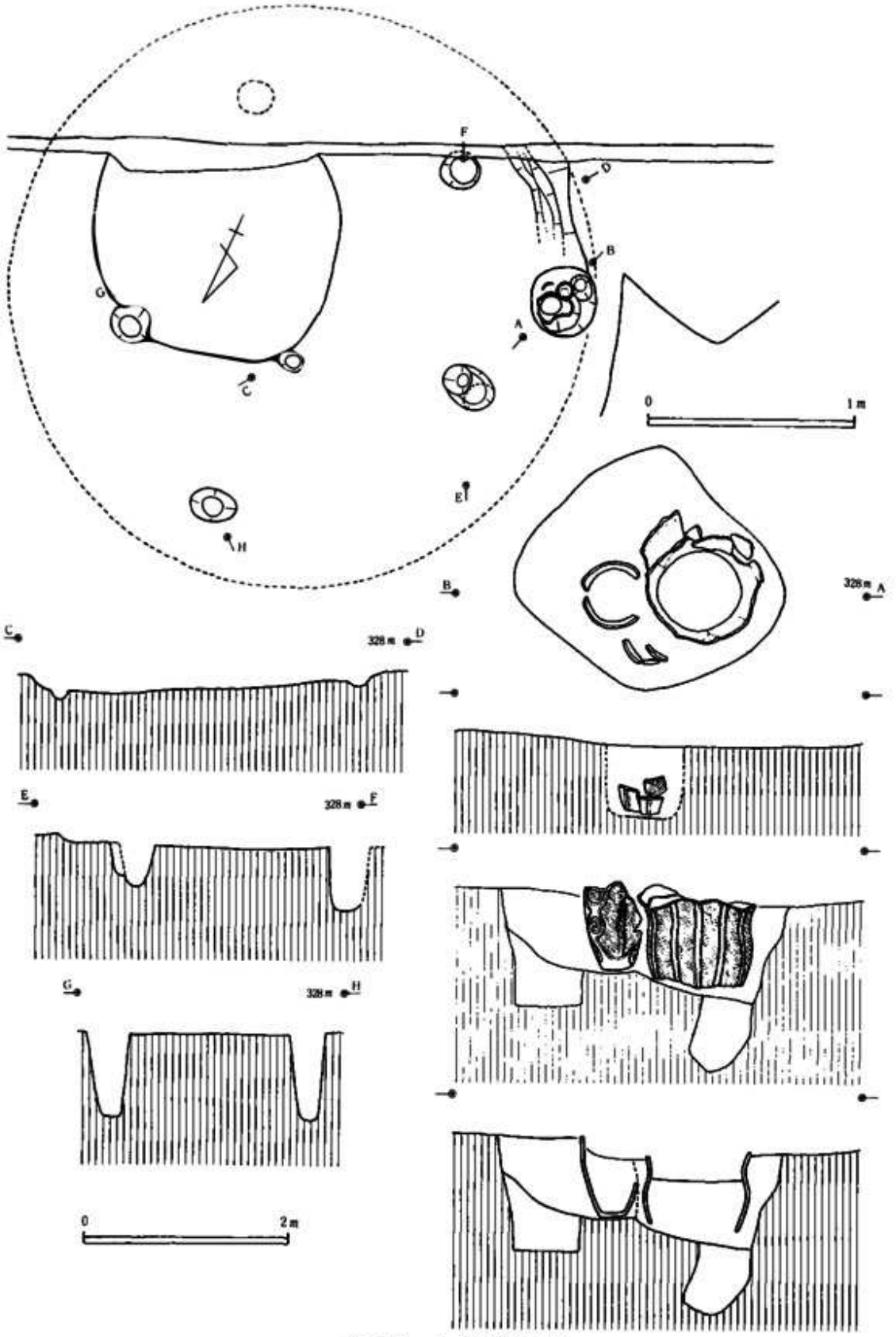
第４図先土器時代石器

２．縄文時代の遺構と遺物

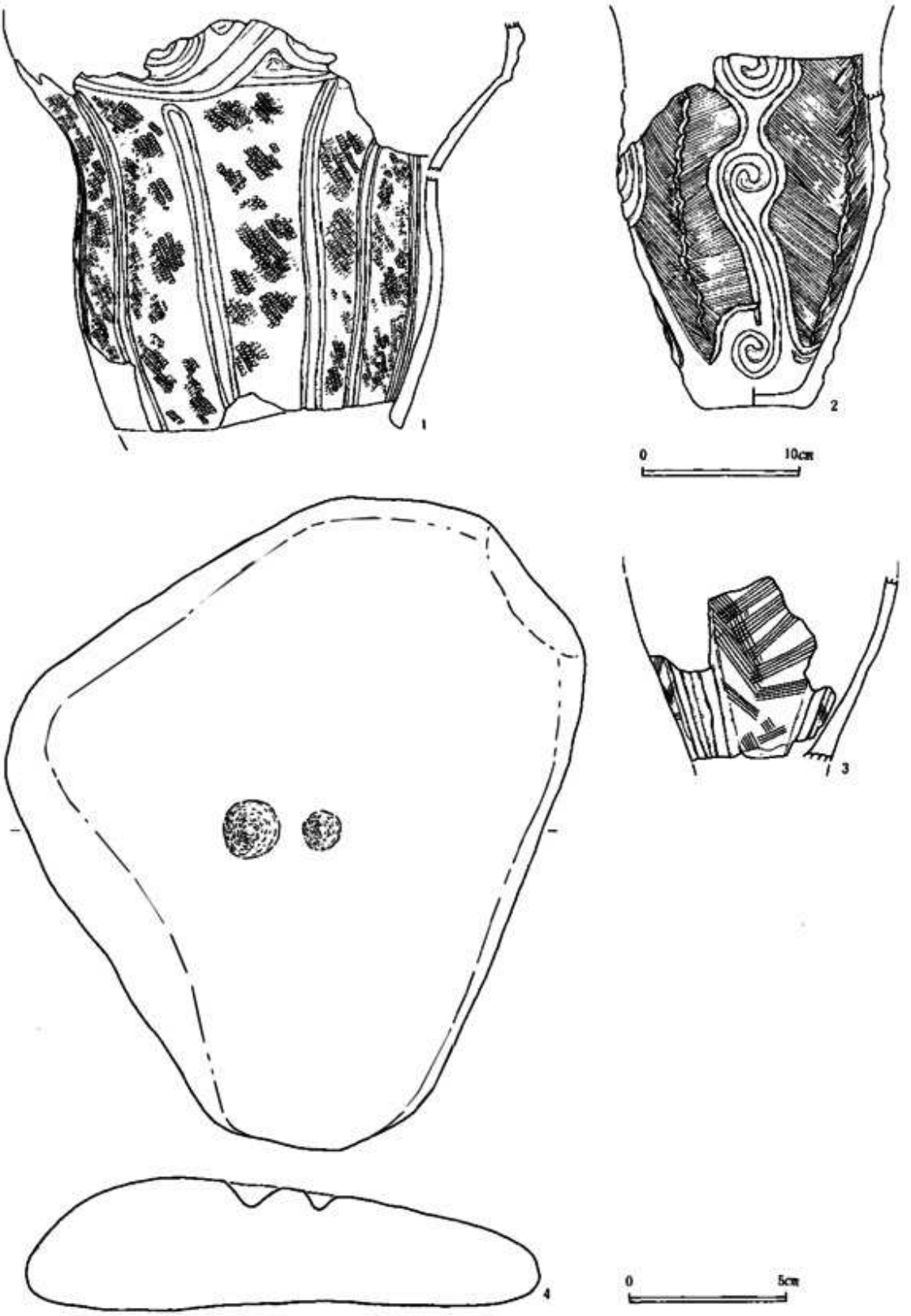
１号住居址

２号住居址の床面を除去した段階で埋甕を確認し、住居址の存在を知った。さらに周辺を精査して、非常に深い柱穴４カ所、住居址の周溝と立ち上りの一部を確認した。床面や壁のほとんどは、弥生時代の２号住居址によって破壊されたものと思われる。埋甕の上面が２号住の床面直下にあり、１号住の床面も２号住とほぼ同じレベルであったろうと思われる。炉址は、３号竪穴状遺構のある部分と思われ、これによって掘り込みをも破壊されたと思われる(第５図)。出土遺物は、埋甕３個体と、３号竪穴状遺構北東部にある柱穴に落ち込んでいたクボミ石、柱穴内の若干の土器である（第６図）。

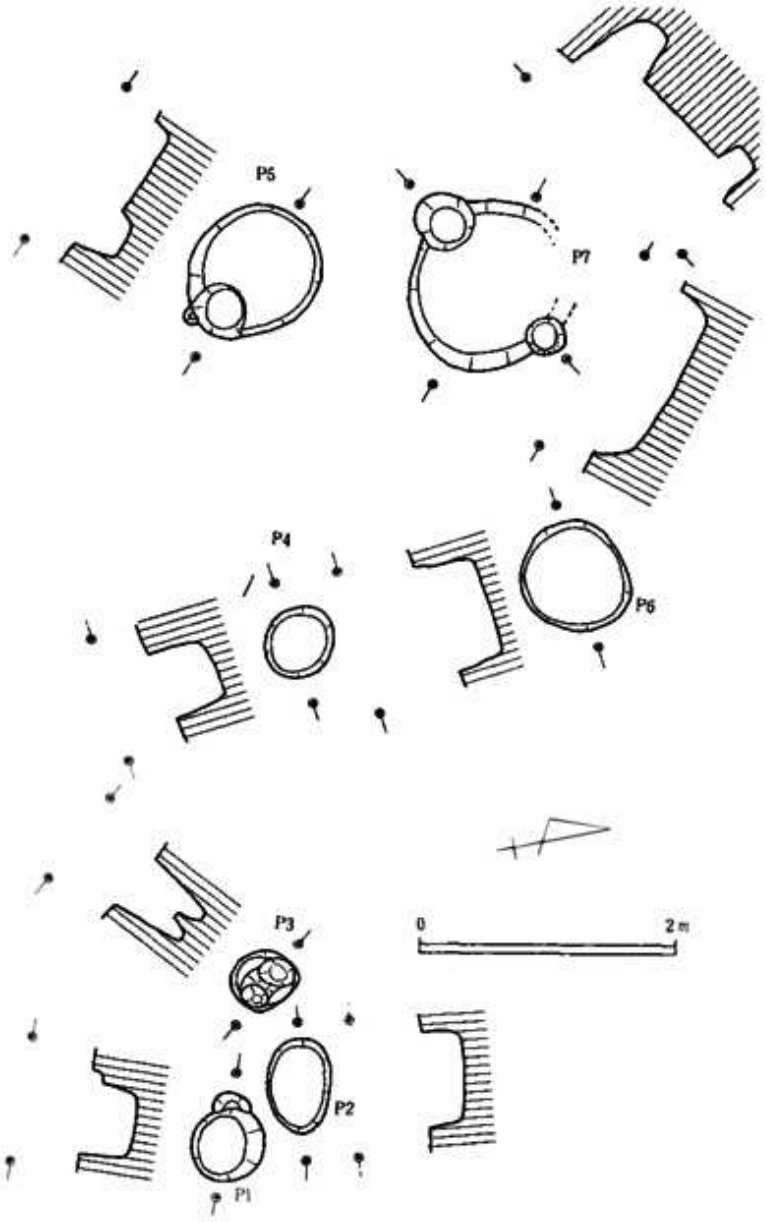
第６図１は、埋甕に用いられた土器で、３個体中最も新しいものと思われる。いわゆるキャリパー形の大型の深鉢土器で、口縁部を欠損する。底部は埋甕にする段階で取られており、破損部をきれいに磨り削っている。胴部は、地文に縄文を用い、頸部で逆Ｕ字に折り曲り垂下する二条のヘアピン状の沈線によって区画されている。口縁部には、隆帯によっていわゆる「渦巻つなぎ文」状の文様が施文されている。第６図２は、２番目に新しいものと思われる。櫛歯状工具による綾杉状の条線文を地文としている。綾杉の交差部に蛇行沈線文を垂下しているが、よくみると弧の連続である。また、やや隆起させた部分に両端が渦巻きになる沈線文を垂下し、それを沈線でかこむ文様が４単位みられる。１を埋没する段階で一部を欠損している。３は最も古いものである。底部付近の破片である。櫛歯状工具による粗い綾杉文と垂下する二条の隆帯がみられる。１、２の埋設時に大半を欠損している。４は、クボミ石である。砂岩製。



第5図　1 号 住 居 址



第6図　1号住居址出土遺物



第7図　第1ピット群（水糸標高は328m）

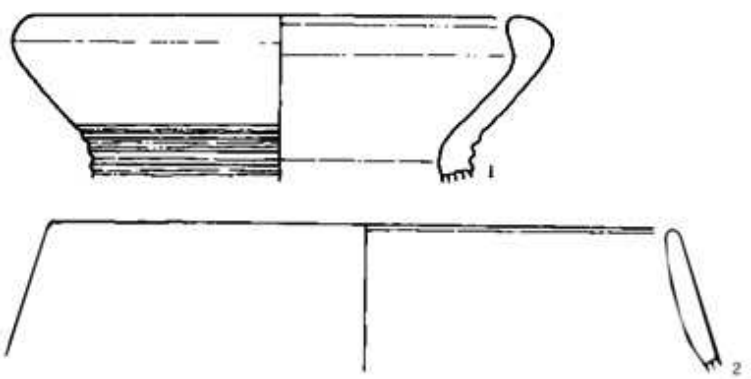
第1小ピット群

A区の東端部にある。他の小ピット群にくらべ、それぞれの穴の大きさが大きい。P6から縄文土器が出土しており、大型のピットと切り合う小型のピットはともかくとして、大半は縄文時代の可能性がある。いずれのピットも底が平坦で、立ち上がりが急な箱形である（第8図）。

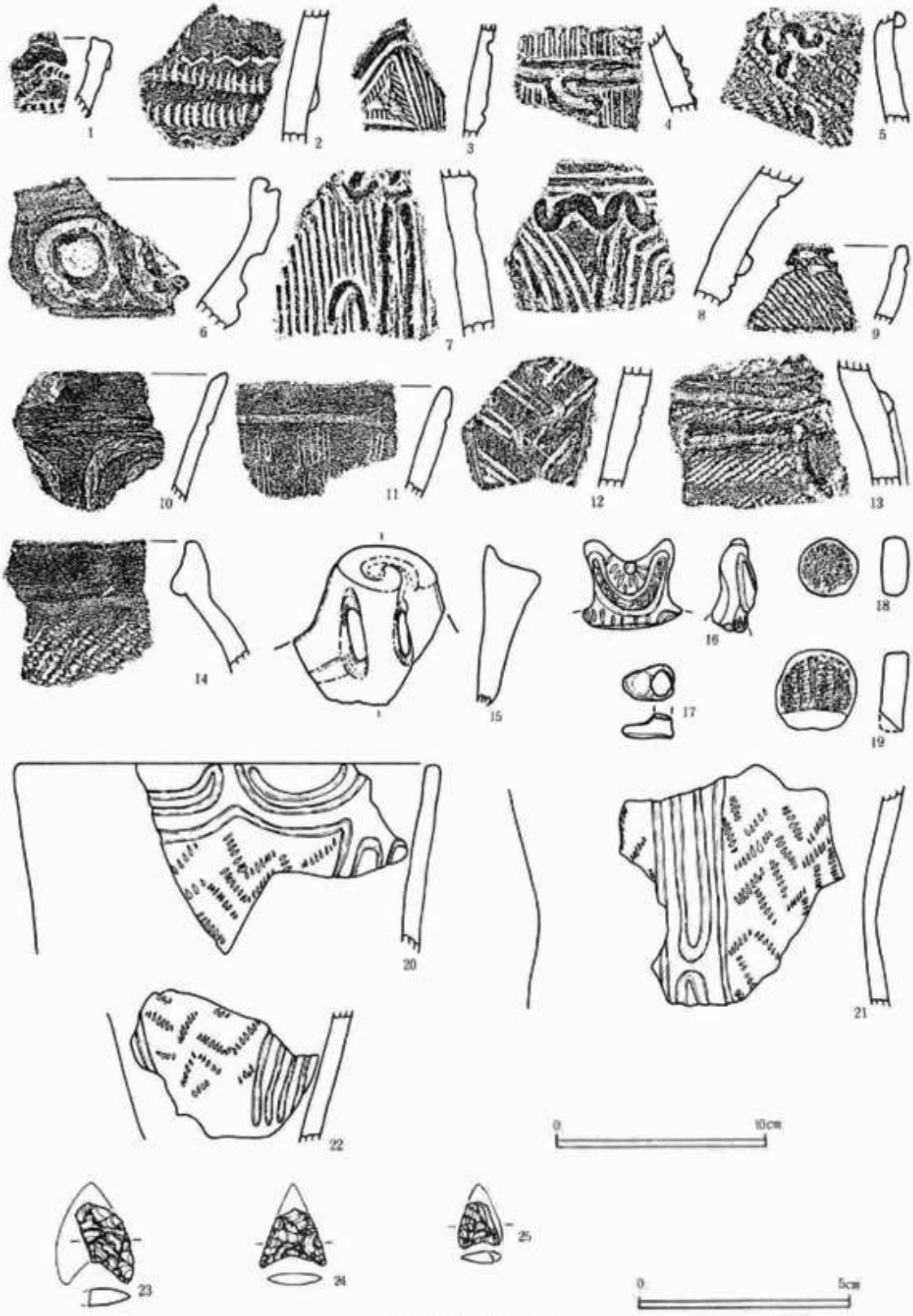
第8図は第1小ピット群中のP6出土の土器である。1は、小型の深鉢形土器の口縁部破片である。頸部に四条の沈線がみられるが、他は無文である。口縁端部はくの字に内傾する。2は、広口の壺形土器の口縁部であろう。おそらく、いわゆる両耳壺の口縁であろう。

その他の縄文時代遺物

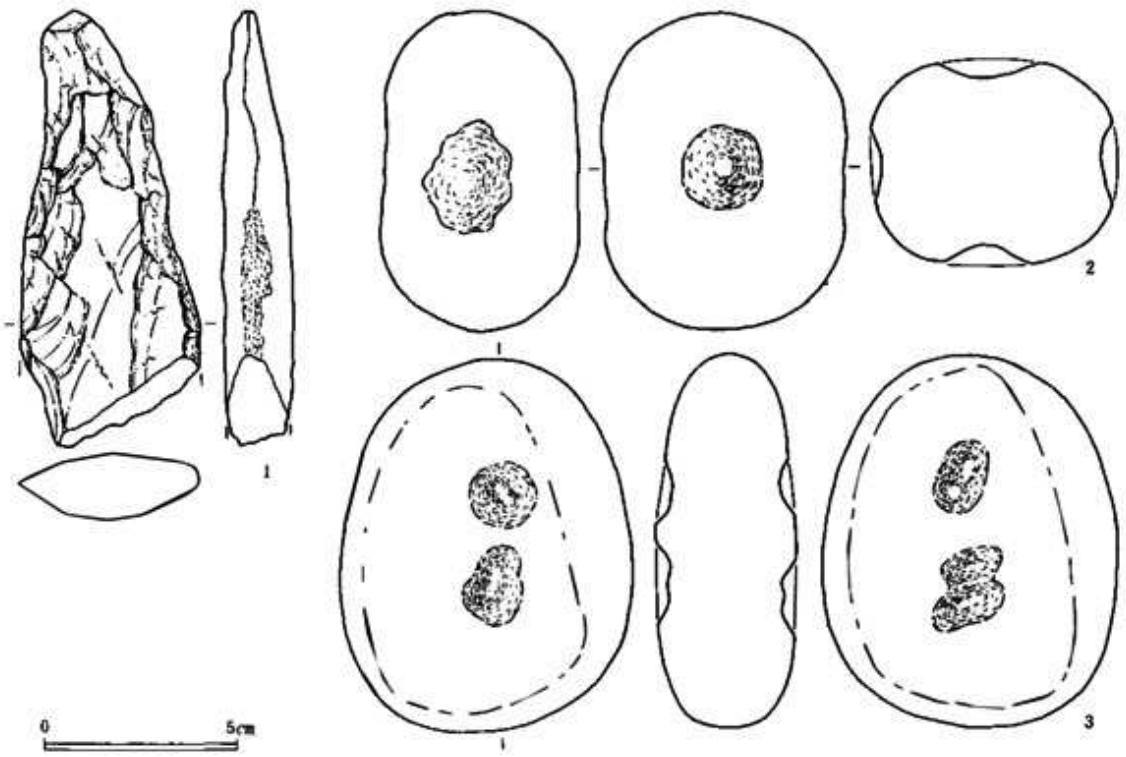
主にB区の遺物集中地点から多くの縄文時代遺物が出土している（第9・10図）。第9図1は前期末、2、3は中期中葉、4～15は中期後葉、16は後期初頭と思われる。20～22は同一個体で、中期後葉のものと思われる。



第8図　P6出土土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
0
10cm
0
5cm

第9図　縄文時代遺物



第10図　縄文時代石器

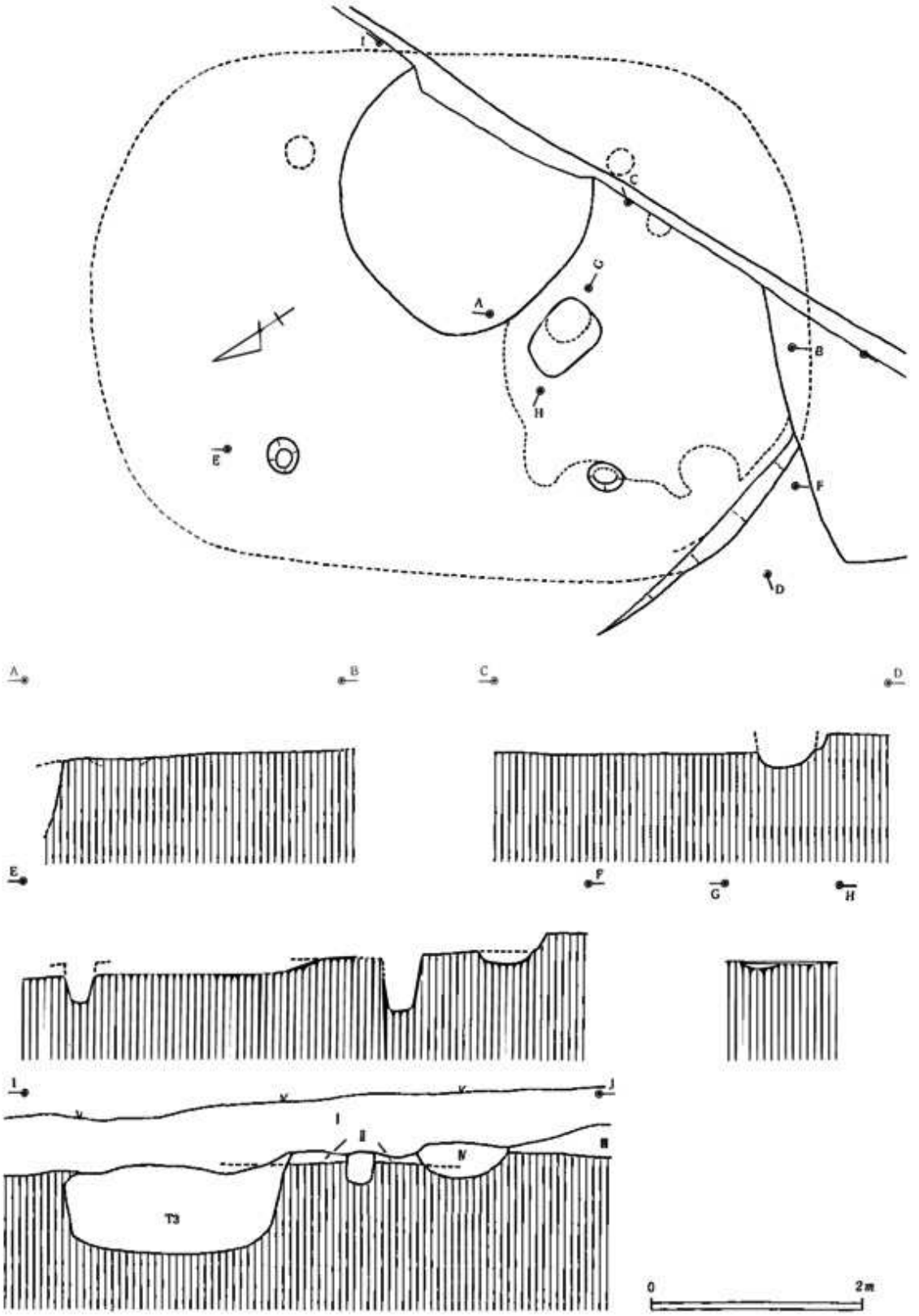
土器群の時期的なありかたをみると、中期後葉の土器が最も多くあるようである。17は土偶の足。18、19は土器片を用いた円盤形土製品である。15、17以外はすべてB区遺物集中地域から出土。第9図23～25は、黒曜石製の石鏃で、いずれも凹基無茎鏃である。25がB区、23がA区、24が第1小ピット群のP5内出土。第10図1は粘板岩製の打製石斧で、撥形である。2、3はクボミ石で、いずれも安山岩小礫製。磨り面や叩き面はみられない。1が6号住居内、2がA区、3が表採である。

3．弥生時代の遺構と遺物

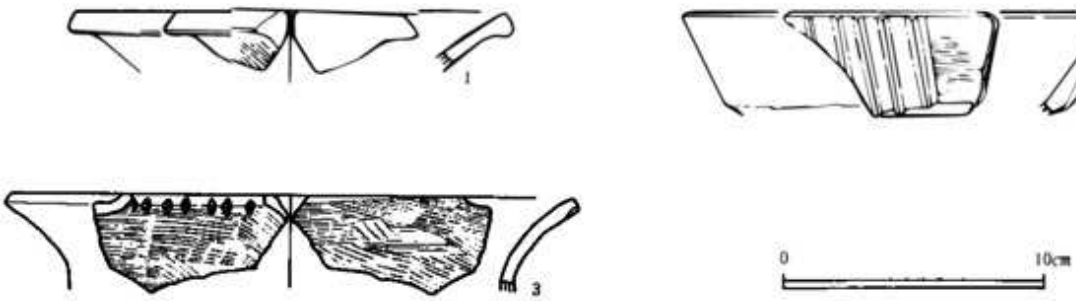
2号住居址

A区東端部を精査中に、住居址の床面と白色粘土敷きの炉址を確認した。壁の確認につとめたが、耕作による攪乱をかなり受けているうえ、中・近世の遺構で切られているため、壁らしき立ち上りは一部しか確認できなかった。しかも、黒色帯に切り込んでいるため、その確認にさえ困難をきわめた。柱穴は2カ所を確認した。床面は非常に硬く明瞭である。炉址は白色粘土を敷いたもので南部がよく焼けており、焼土も深かった（第11図）。なお、土層は、Ⅰ層耕作土層、Ⅱ層覆土の暗褐色粘質土層、Ⅲ層は4号竪穴状遺構覆土の黒褐色粘質土層、Ⅵ層は後世の攪乱である焼土、木炭片を多量に含む黒色土層である。2号住居址床面と4号竪穴状遺構の底面とにレベル差がある点に注意。

出土遺物は、大型のものはなく小破片ばかりで、縄文時代遺物がかなり混入していた。また、



第11図　2号住居址（水糸標高328.5m）



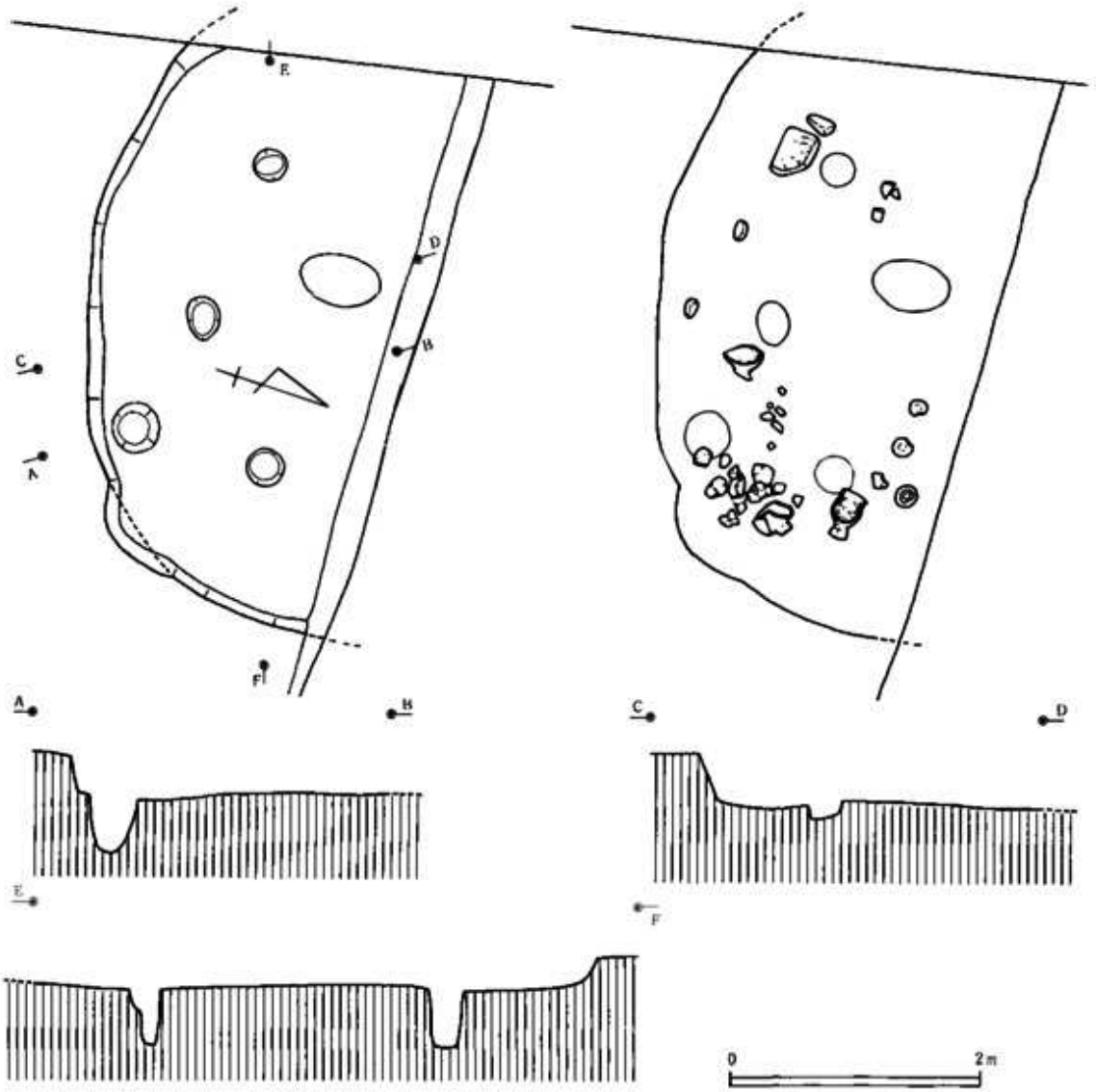
第12図　2号住居址出土土器

床面の東辺部には平安時代末の坏の大型破片があり、付近に同時期の遺構があった可能性がある。第12図1は断面三角形の折り返し口縁を有する壺形土器口縁部。2は棒状付文を5本貼付した有段口縁の壺形土器。3は、刻み目を有する口縁の甕形土器である。

3号住居址

B区南半部を精査中に確認した。最も遺物量が豊富な住居址である。西部を道路で切られ、北部を石垣で切られているが、床上20～30㎝の覆土はかろうじて保存されているらしい。ほぼ東西方向に配列する2本の柱穴と、2カ所の小ピット、および地床炉を確認した。プランは小判形と思われる。床面はかなり硬く明瞭であるが、地床炉周辺にかぎられる。床面直上で多量の土器が、あたかも放置されたかのように出土した。しかし、この時期よく見かける火災住居ではない。火災住居は一般的に遺物出土量が少なく、本例と対照的である（第13図）。

出土遺物は、台付甕形土器1個体、大型の壺形土器2個体、小型の壺形土器が1個体、坏形土器3個体、大型のクボミ・スリ石1点である。第14図1は、刻み目のない口縁の台付甕形土器である。内外面ともハケ目調整。胴下半部に明瞭な接合部が一周し、成形時に上下を合体したものと思われる。胴半分を耕作により取られている。2は大型の壺形土器で、口縁部がまったくなく、胴部も部分的に失われているが、残存率はかなり高い。内外面ともハケ目調整。底面以外の外面全面と口頸部内面をヘラ磨き。底部は木葉痕がみられる。胴部最大径は底部側にかたよっており、ゆるい段を形成している。3は大型の壺形土器で、口縁部と底部を失っている。外面はきれいにヘラ磨きされ、内面は口頸部でハケ目調整の後ヘラ磨き、胴部円面はヘラ調整を行っている。4は小型の壺形土器で、口縁部がないが他は割れがみられず、床面に直立して出土した。外面ヘラ磨き、内面ナデ調整で、肩部に粗い目の縄文を帯状に施文している。2と同様、胴下半にゆるい段を有する。5、6、7は坏形土器で、5、6は、4に伴うようにならんで直立して出土した。7はやや離れて割れた状態で出土。5は内外面ともハケ目調整の後にヘラ磨き。6、7はいずれも内外面とも、底部外面以外はヘラ磨きされている。古墳時代以後の坏と違う点は、胎土が精選されていず粗い点と、底部にヘラケズリがみられない点、内面底部が球面状に近い点などである。8は、敲打による円錐状のクボミ部と、その周辺から一方向にかたよって広く分布する磨り面とで構成される大型石器である。花崗岩製である。底面は割れ面であり、大きな自然礫の一部を板状に剝ぎ取る、ないしは整形したものらしい。上面外周の底面付近に、スス状の黒色付着物が一周する。出土状態は、底面を上にして伏した状態で出土。

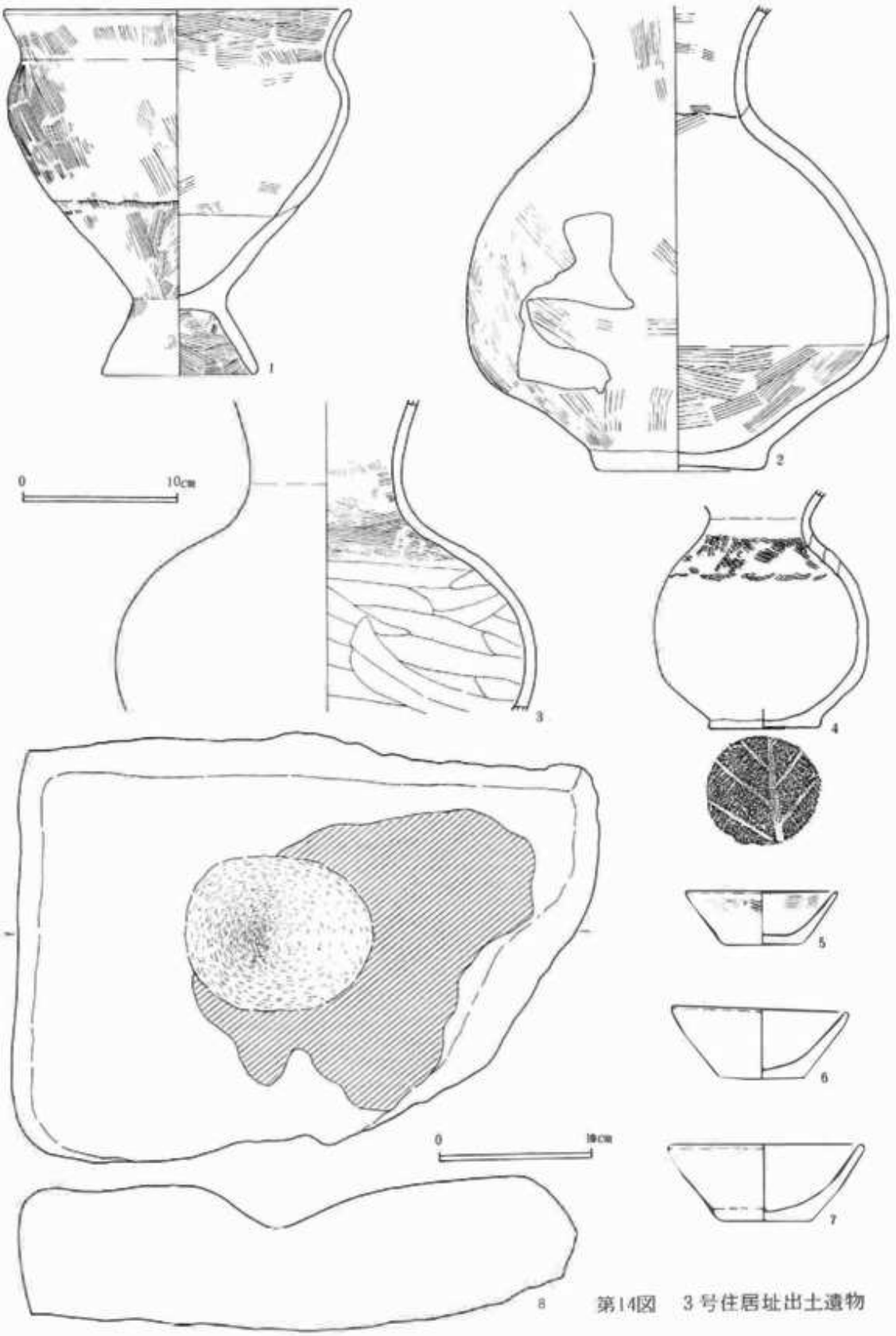


第13図　3号住居址（水糸標高326m）

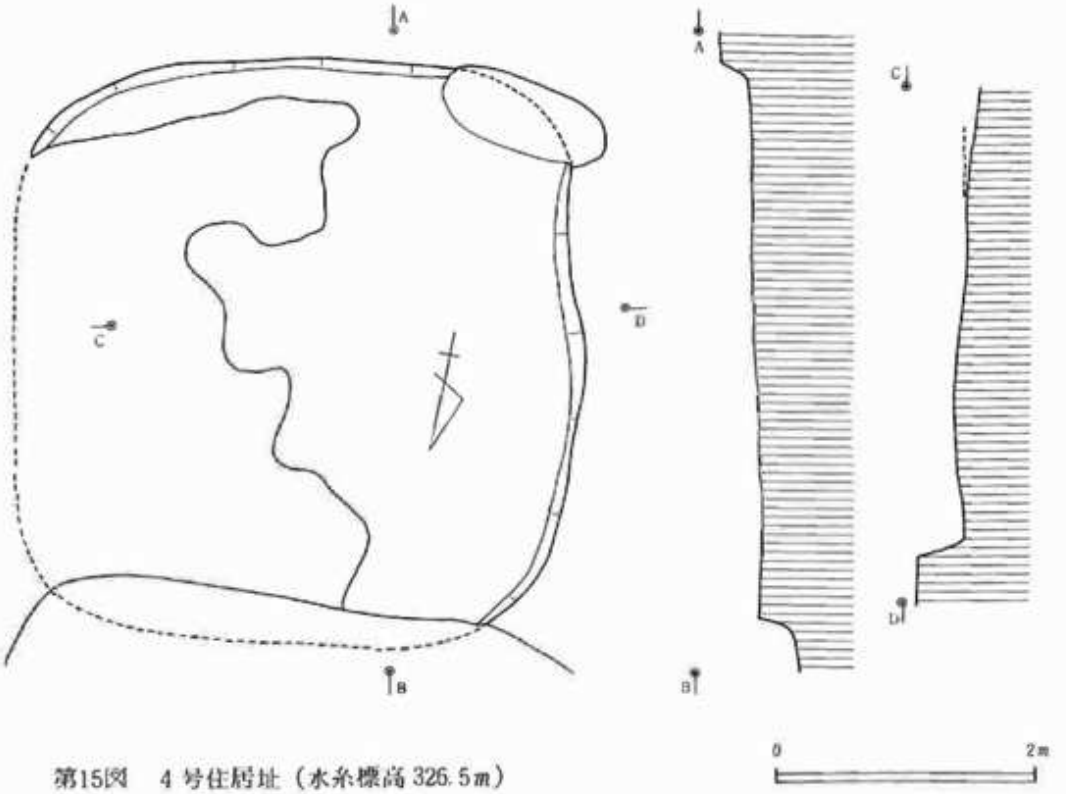
4号住居址

6号住居址南側で、遺物の出土が非常に多い部分があり、精査したところ、住居址を確認した。床面は不明瞭で、柱穴や炉址の確認はできなかった。また、遺物の出土は多いが、ほとんど小さな土器片であり、まとまったものは、第16図1、2くらいである。プランはほぼ正方形の隅丸方形と思われるが、かなり後世の攪乱を受けているものと思われる。北部を6号住居址で切られ、東部は攪乱を受けて破壊されていた。南西部の穴は古い動物生活痕と思われ、トンネル状である（第15図）。

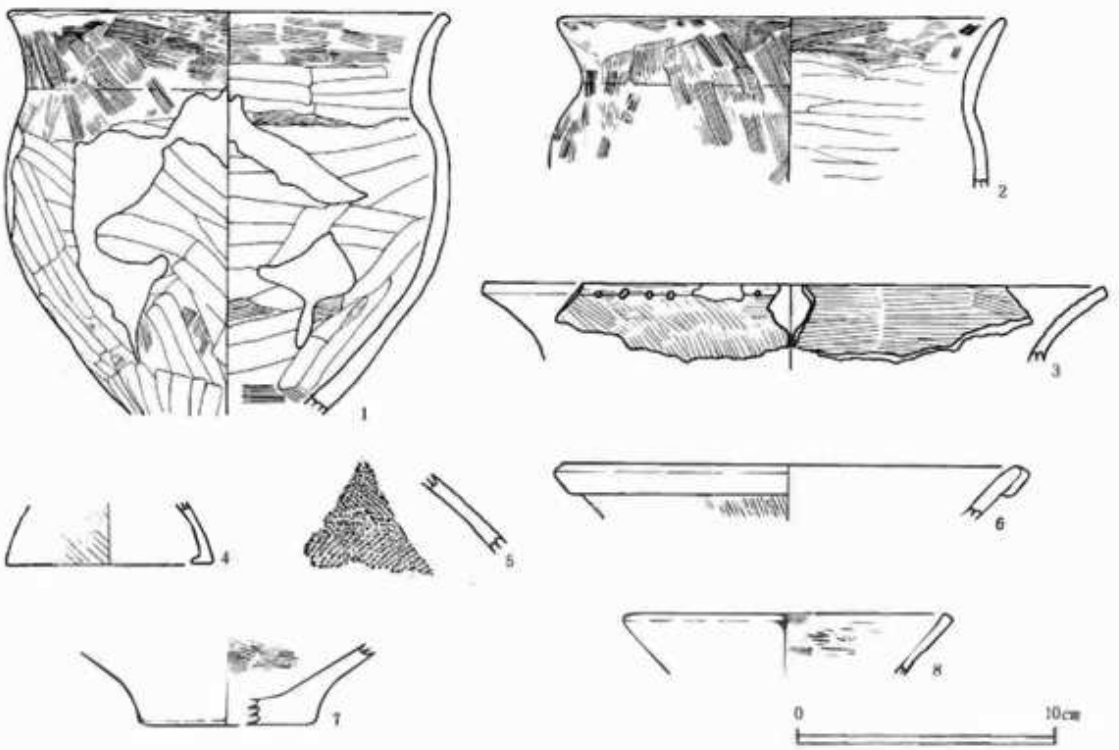
出土遺物は、第16図1がおそらく台付甕形土器。内外面ともハケ目調整の後、ヘラ調整。2は1と同様な土器で、外面にヘラ調整がみられない。3は口縁端に刻み目のめぐる甕形土器。4は台付甕台部。5は、結節縄文を施した壺形土器。6は、断面四角形の折り返し口縁の壺形



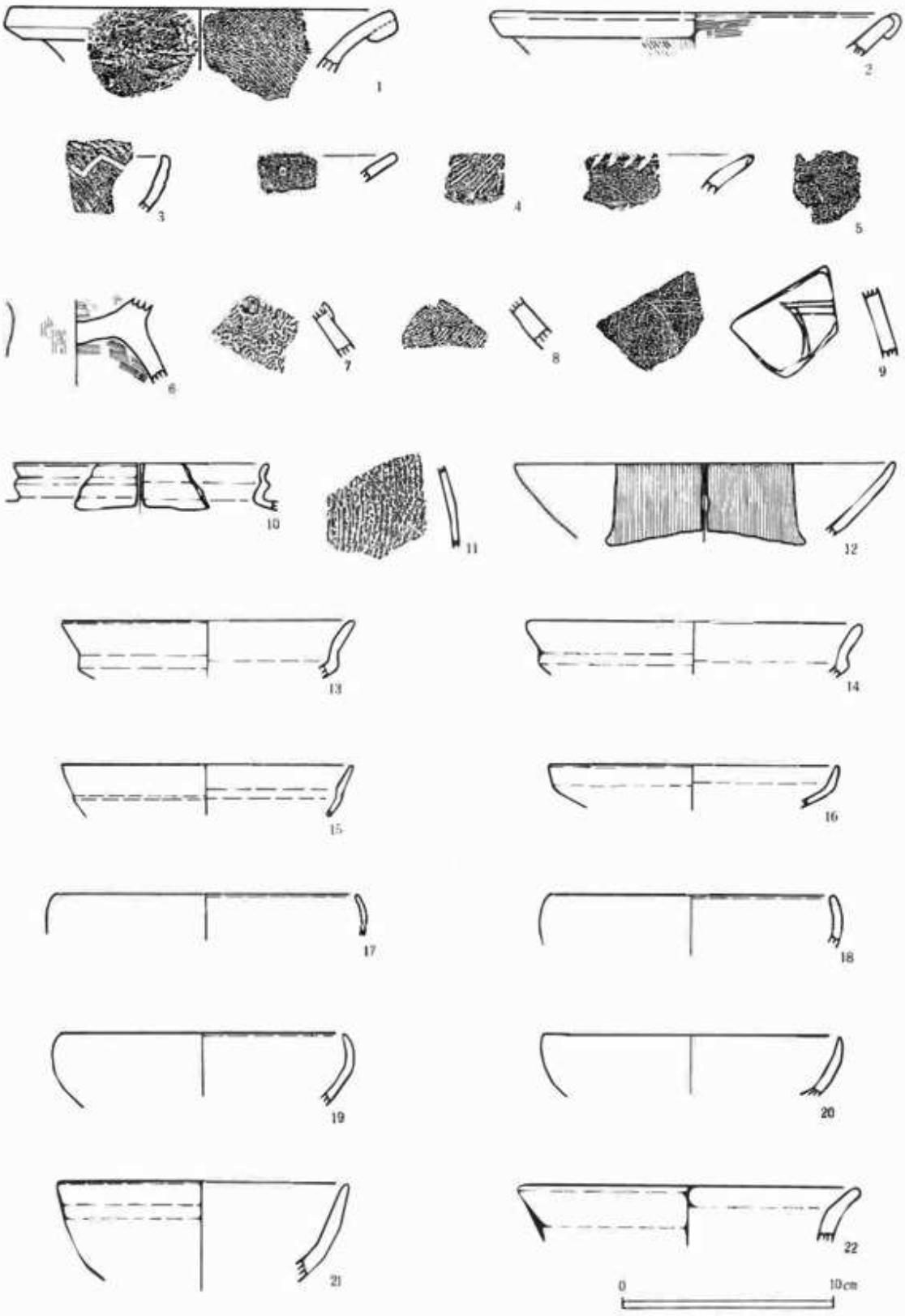
第14図　3号住居址出土遺物



第15図　4号住居址（水糸標高 326.5m）



第16図　4号住居址出土土器



第17図　弥生・古墳時代遺物

土器。7が壺形土器底部。8が小型の壺形土器の口縁部である。

その他の弥生時代遺物

以上の他に、弥生時代中期から後期の土器が出土している（第17図1～9）。弥生時代中期のものは、3で、口唇部および口縁部外面に縄文を施文し、沈線による鋸歯状文を施文している。壺形土器口縁部であろう。これ以外は後期と思われる。1、2は折り返し口縁の壺形土器で、1の内面には羽状縄文がみられ、口唇にも縄文がみられる。4は内面に縄文のある壺形土器口縁。5は刻み目のある甕形土器口縁。6は台付甕形土器台部。7は櫛歯状工具による波状文と小円盤の貼付文を有する壺形土器。8は羽状縄文が肩部にみられる壺形土器。9は、細い沈線により絵が描れた壺形土器片で、県下では稀少例である。

4．古墳時代の遺物

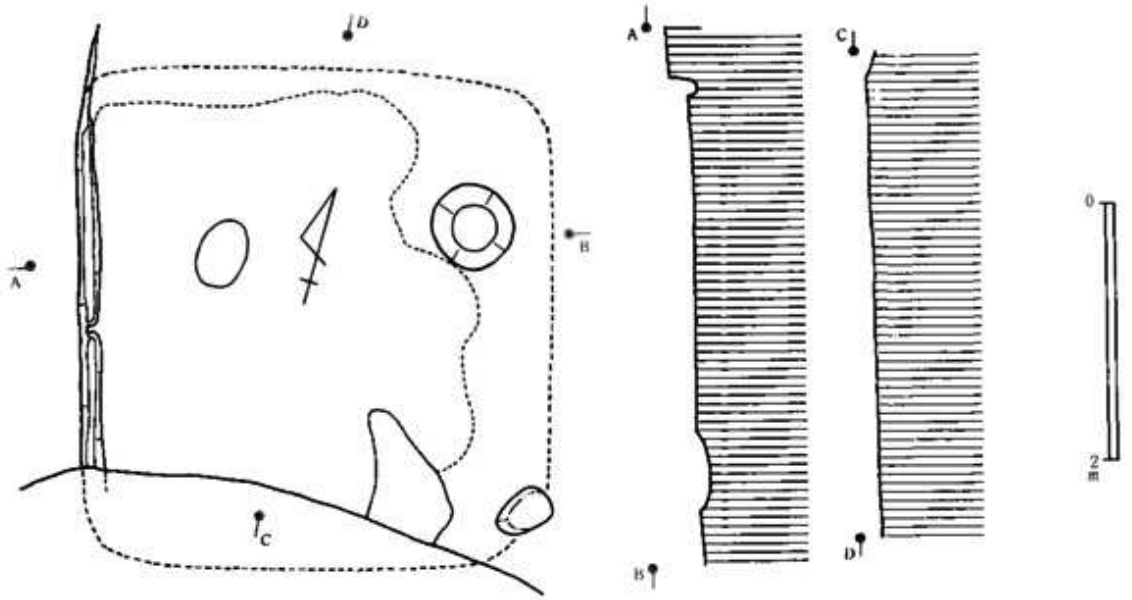
古墳時代の遺構は見い出されなかったが、かなりの量の土器が出土している。古墳時代前期と後期の土器がみられる（第17図10～22）。前期は10～12である。10はいわゆるS字状口縁台付甕の口縁部である。11もS字状口縁台付甕の胴部破片である。胴部破片はB区遺物集中地域の他、弥生時代後期の3号住居址内からも出土している。12も3号住居址内出土で、坏形のいわゆる小型精成土器である。内外面とも縦方向ヘラ磨き。後期は13～22である。13～15が胴部に段を有する坏。16は胴部が屈曲する坏。17～20が埦。21が胴部に段を有する小型の鉢。22が甕の口縁である。20は6号住居址内出土。他はB区遺物集中地域出土である。遺物集中地域には、この他にも後期土器の細片、特に坏の細片が多量に出土した。

5．奈良・平安時代の遺構と遺物

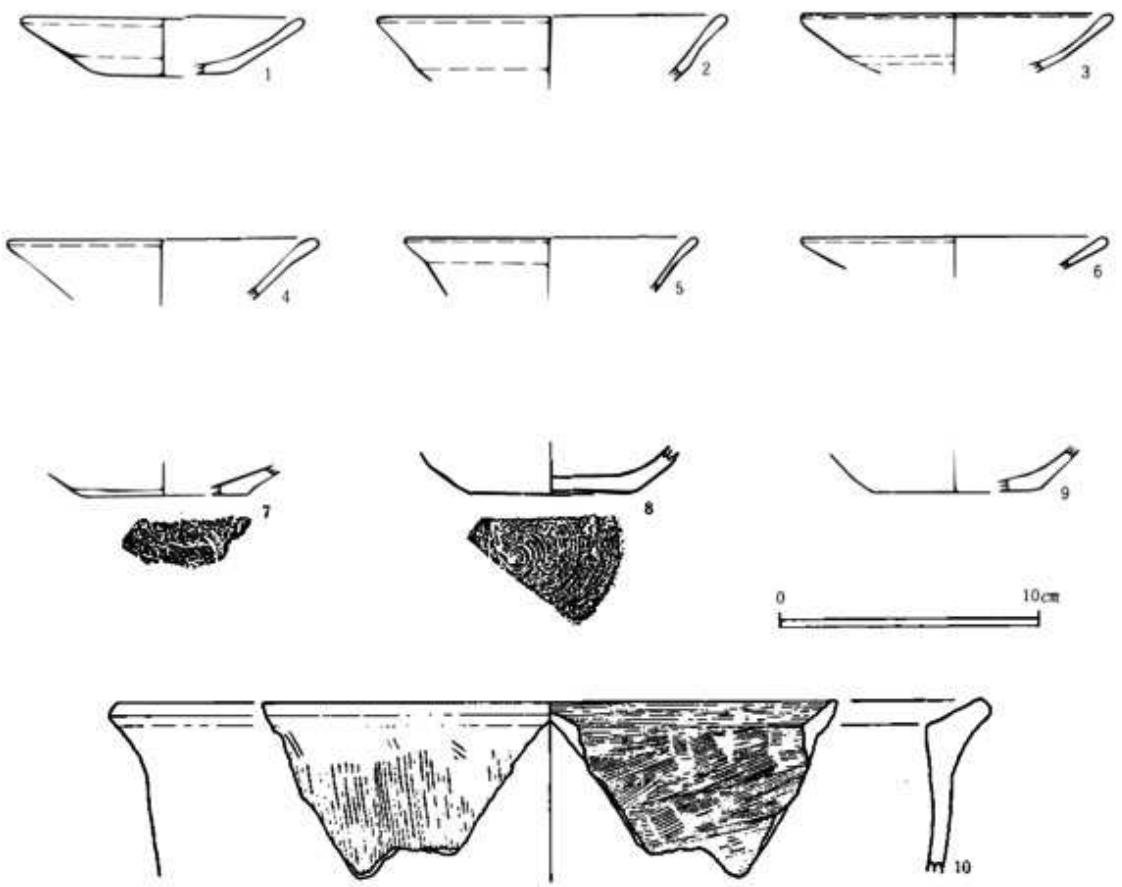
5号住居址

6号住居址を確認した段階でその北側に6号住居址覆土よりも黒い土層の分布を見い出し、精査したところ5号住居址を確認した。当初より切り合い関係は明瞭で、6号住により南側が切られていた。床面は明瞭でやや硬く、中央やや北と南東隅に焼土がみられた。柱穴はないが北東部に浅い小ピットがあり、住居址覆土と同時期の遺物を多く出土した。南東部の焼土のそばに大型礫があり、カマドの一部のなごりと考えられる。住居址は北辺と東辺を攪乱により失っているが、西辺は非常に明瞭である。10cmほどの壁が残存し、周溝もみられる。床面の残存状況や小ピット、カマドの位置等考え合わせると、1辺4m程度の方形のプランが推定できる（第18図）。

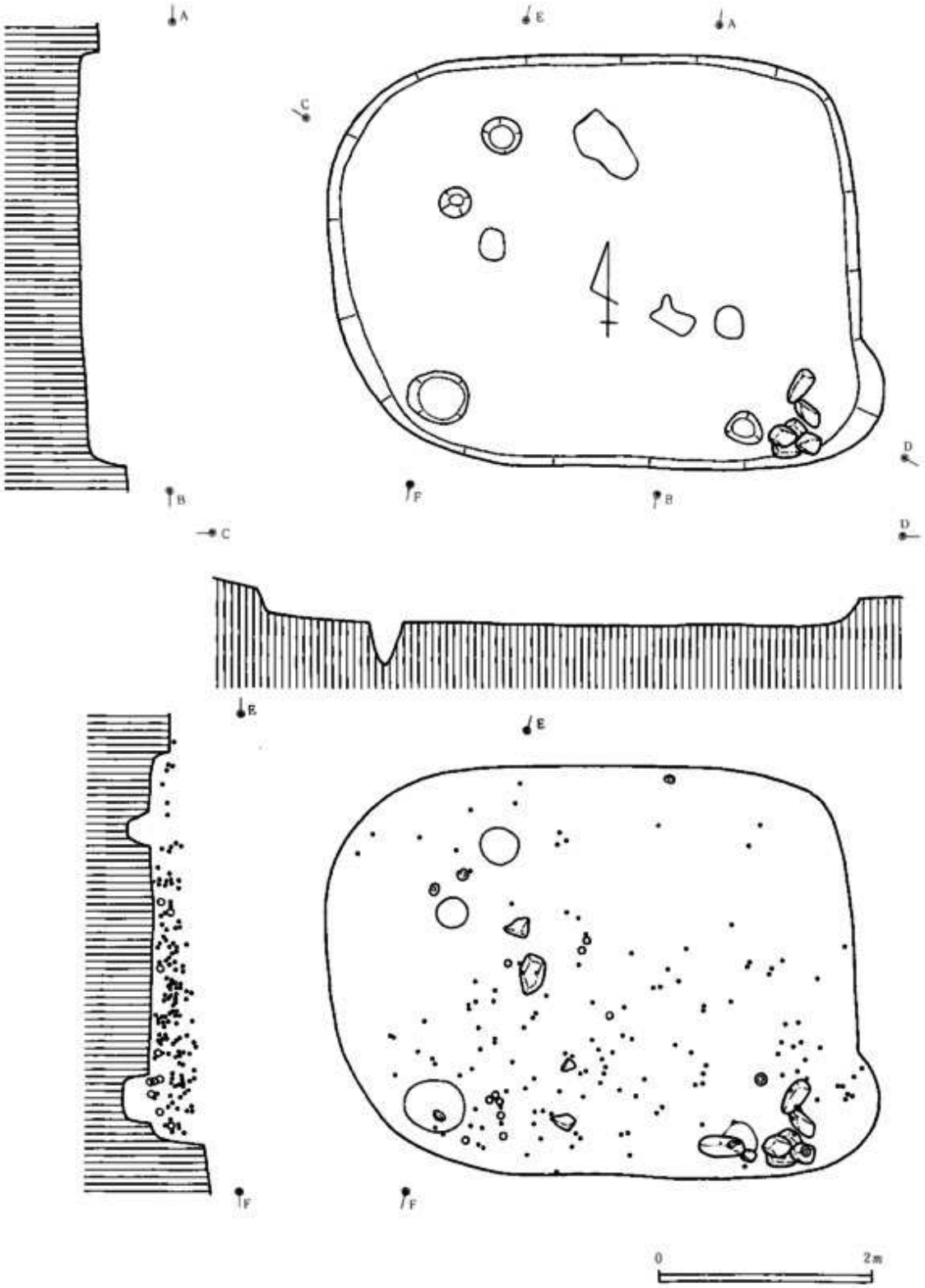
出土土器は、坏と甕である（第19図）。1～9が坏、10が甕である。1～6は坏の口縁部である。精選された緻密な胎土で、彩度の高い赤褐色を呈する。口唇部は玉縁である。内外面ともロクロ成形のままで、無調整である。7～9は坏の底部である。1、9は底部の残存部が狭く、調整の様子が不明であるが、7、8は回転糸切りの後、無調整である。いずれの底部破片にも調整の痕跡がない。10は甕である。口縁部がかなり肥厚している。いわゆる甲斐型の甕である。これらの土器群は、坂本氏、末木氏、堀内氏が1983年に行った編年のXIII期の特徴を有するもので、



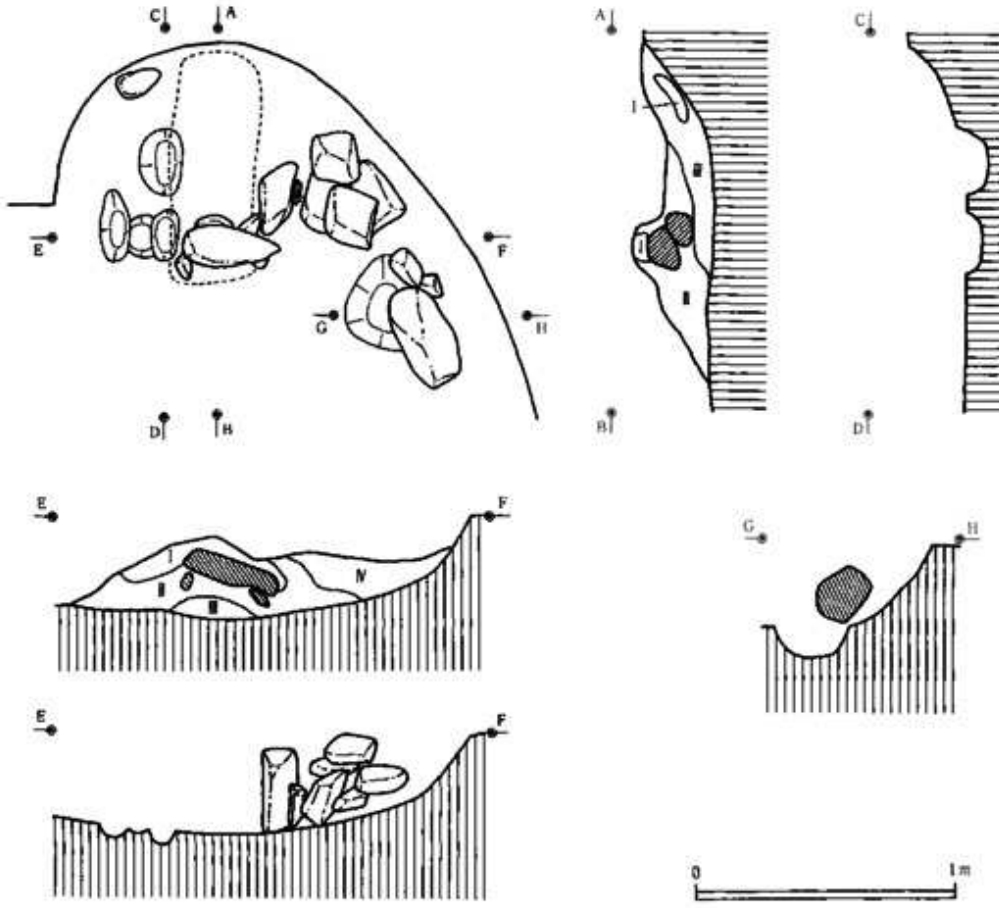
第18図　5号住居址（水糸標高326m）



第19図　5号住居址出土土器



第20図　6号住居址（水糸標高326.5m）

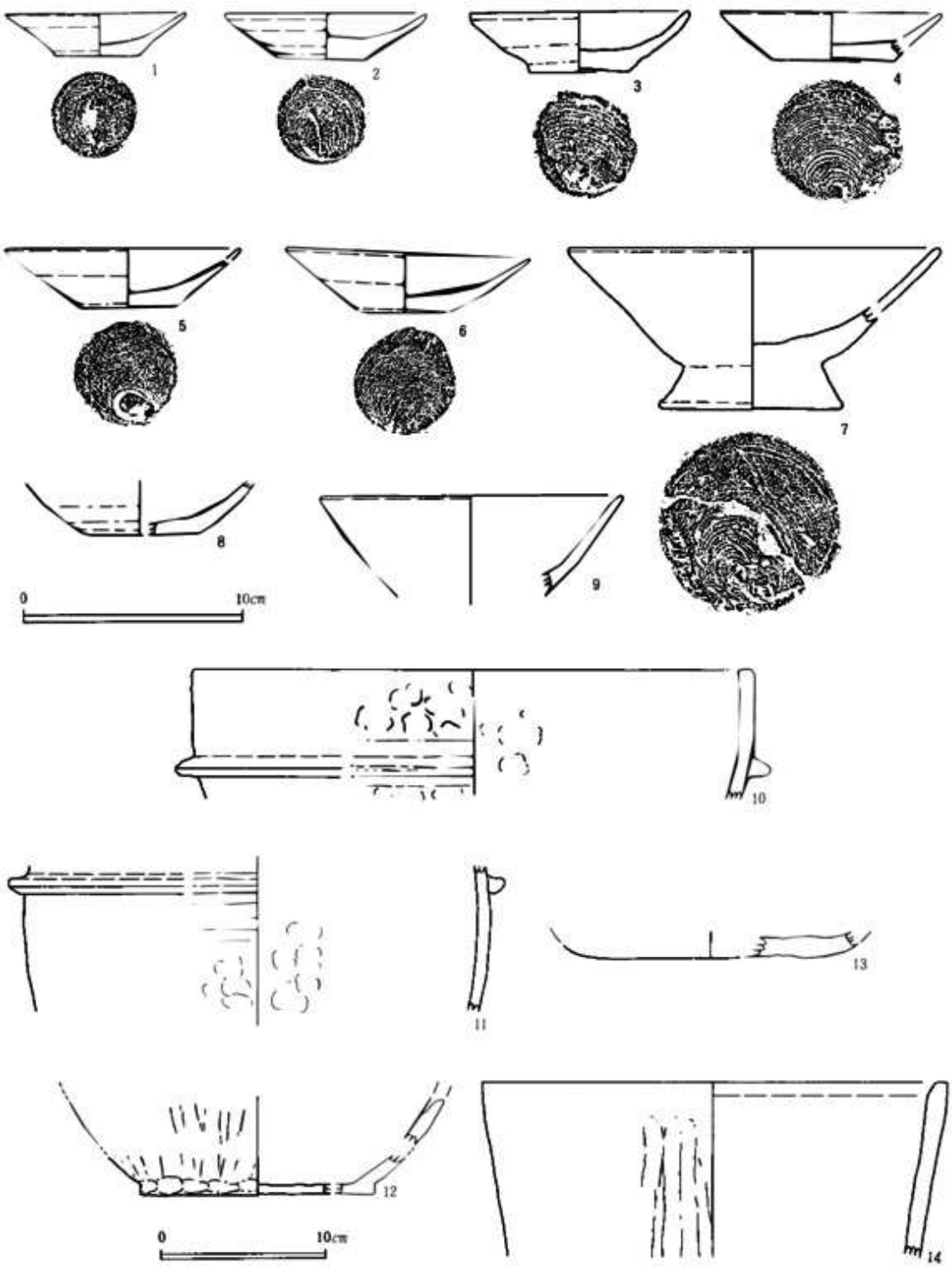


第21図　6号住居址カマド（水糸標高326m）

年代的には坂本氏の1986年の編年によると10世紀第4四半紀である。

6号住居址

本遺構で最も残存状態がよく、全体を発掘できた住居址である。床面は非常に明瞭で硬い。柱穴と思われるものはないが、南西隅に貯蔵穴とおぼしきやや大きめのピット、北西部に小ピット2つが並んでいる。小ピットのうち南側のより小さいものが北側より深く、あるいは柱穴であったかもしれない。床面の所々に焼土（床面が焼けたもの）がみられた。あるいは地床炉的なものかもしれない。なお、最も西にある焼土に礫が2点近接するが、両者とも床面より5cmほど浮いている。小ピットはカマドの脇にもみられ、カマドの用材と思われる礫が上をふさいでいた。貯蔵穴と思われるピットの中から、白色粘土塊が4点見い出され、さらに第22図4の坏1点が覆土中より落ち込んだ状態で出土した。遺物は全面に分布するが特に南側に多いようにみえる。しかし、これは遺物の垂直分布図でわかるように、北側が耕作により深く削られているためと考えられる。特異な点は、完形の坏が住居址の壁ぎわか壁に近い位置にある点である。いずれも床面直上かやや浮いた状態で出土している。高台付坏（第22図7）は割れてかなり分散して出土している（第20図遺物平面図中の白マル）。しかし、垂直分布をみるとほぼ床面直上にあり、本住居址の一群の土器に組成されるものと思われる。



第22図　6号住居址出土土器

住居址プランは、東西にやや長い隅丸方形である。西辺が非常に丸く作られている。

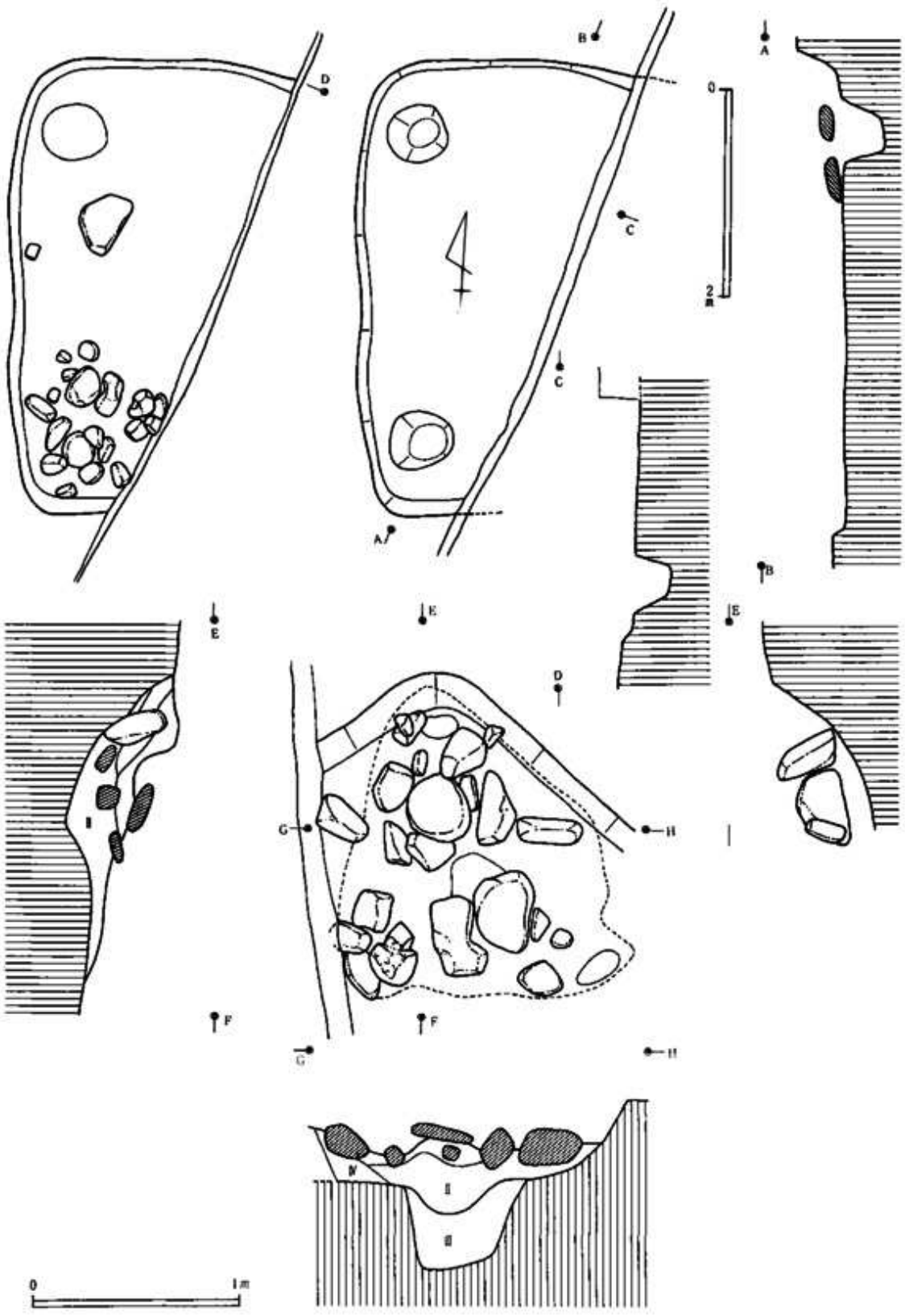
カマドは、南東隅に作り付けられている（第21図）。大型礫を用いたカマドで、礫の構造は南半のみ残存し、北半は掘り込みが残存している。袖石は直立する1個が残存し、その脇をやや小型の礫が補助するようにかためている。この間にはさまって羽釜片（第22図11）が出土した。直立する袖石のやや前方にずれて、天囲の石が横たわっている。その上方を覆うように白色粘土（第21図Ⅰ層）がみられる。掘り込みの状況からして、北側にもほぼ同じような構造があったと思われるが、袖石は2個であった可能性がある。2個の袖石の配置は、南側よりも前面にずれており、天囲の石を北で2個、南で1個でささえる構造であったと思われる。土層は、Ⅰ層が白色粘土層、Ⅱ層が粘土、焼土、木炭片を多量に含む暗褐色粘質土層、Ⅲ層が焼土層、Ⅳ層が竈居址覆土である黒褐色粘質土層である。

出土遺物は、坏と羽釜、鉢である。1～6は、坏である。1、5、6は、胎土が粗く、金雲母を多量に含む。口縁部が尖形ぎみである。2、3は、胎土が前者ほど粗くない。口縁部の外側が丸く、内側で鋭く尖る。前者より口縁部が厚い。4は皿に近い器形である。底径と口径との差があまりない。また、他のものは底部がとび出すのに、4は平坦である。いずれもロクロ整形の後、無調整である。なお、4、5、6の底部に板庄痕風の痕跡がみられるが、微妙であり、それとは特定できない。8は胎土がやや緻密で、底径も大きめである。覆土中出土なのでやや古いものの混入かもしれない。9は、非常に深い坏である。胎土や肌あいが7に近似するので、高台付であるかもしれない。7は高台付坏である。口縁端はやや尖形を呈し、やや外斜する。9も同様である。無調整である。底部は回転糸切りであるが、何物かの圧痕がみられる。しかし、板状のものの上に置いた状況ではない。

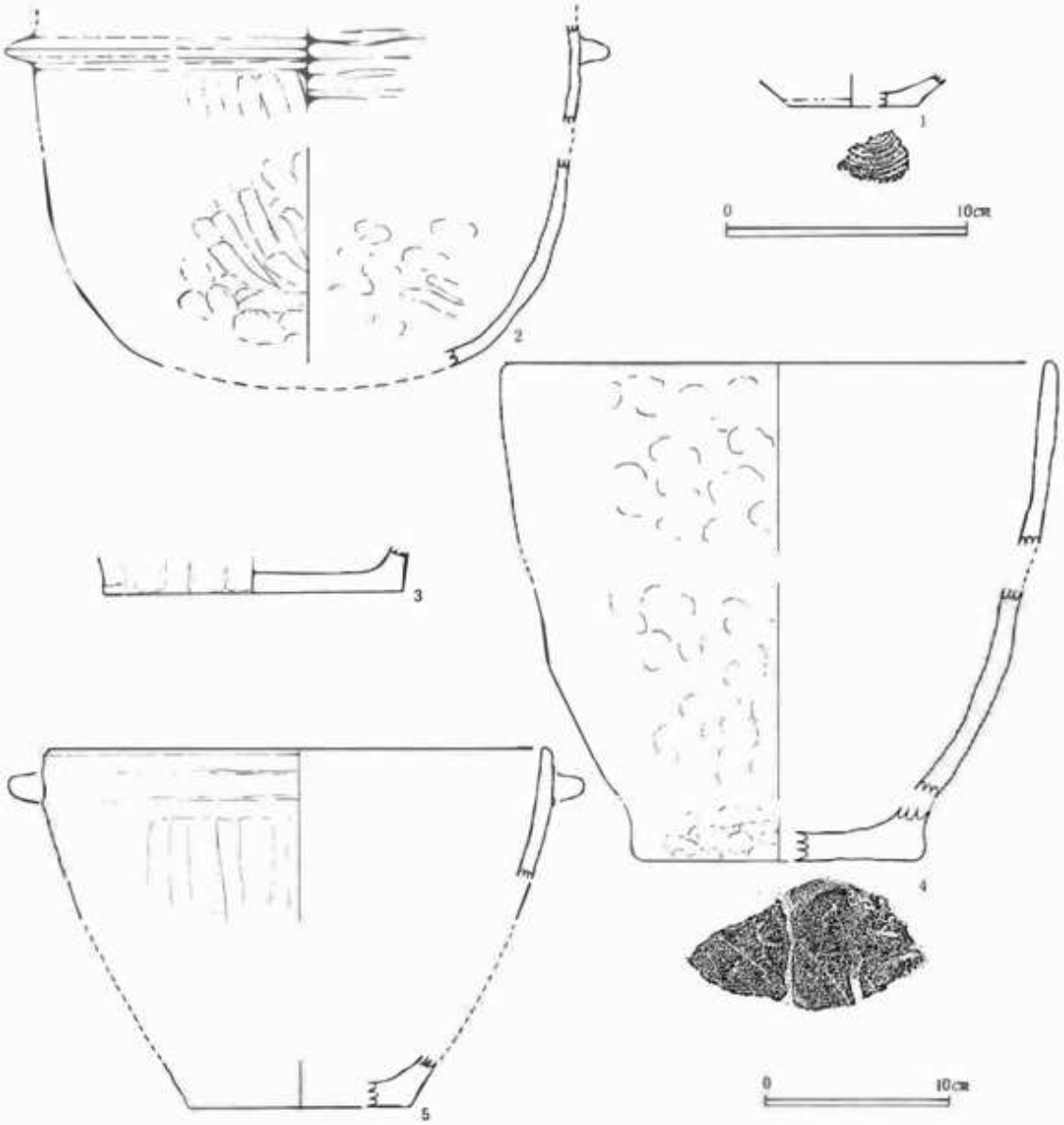
10、11は羽釜である。10は外面が指頭圧による粗い調整。内面は、主に幅広のヘラ状工具で横方向に調整され、若干指頭痕もみられる。つばの部分は貼付の後にその周辺を含めてナデ調整され、下縁はヘラ状工具で条線状に境界を明瞭している。11もほぼ同様であるが、外面にも横方向のヘラ状工具による調整が残る。12は、羽釜の底部の可能性がある。外面にヘラ状工具による縦方向の調整があり、かなり表面がなめらかである。内面はザラザラである。底部は非常に薄い。底部外面にもヘラ状工具による調整がなされている。13は、非常に粗悪な胎土で繊維を多量に含み、スカスカである。鉢の底部か。底部外面に繊維圧痕が無数に残る。14は、鉢である。外面は縦、内面は横方向のナデ調整である。口縁端は平坦で内面が面取りされている。11と14はカマド内出土。12は、カマド内出土の部品を含むが、それ以外は覆土中出土。

7号住居址

二分の一程度が発掘区外であるが、貯蔵穴らしきピット2カ所とカマドがみられる。床面はさほど明瞭ではない。2つある貯蔵穴らしきピットは、いずれも竈居址壁側の壁の傾斜がゆるくなっている。なお、南側のピットはカマドでふさがれている。6号住居址のありかたからすれば、おそらく、もともとカマドは南東隅にあり、ピットが南西隅にあったが、何らかの理由でカマドが南西隅に移り、それに伴いピットも北西に移ったものと思われる。この際、ピットを埋め、さらに南側壁に傾斜をつけるため埋土をしたらしい（第23図カマドのⅣ層）。



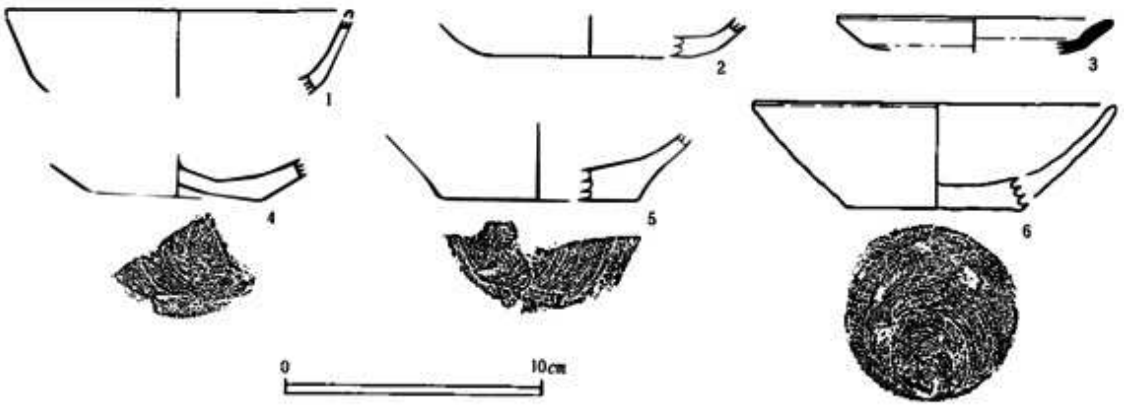
第23図　7号住居址（水糸標高327m）



第24図　7号住居址出土土器

カマドは、西側に袖石2個を立て、前面の袖石に横に寝かした竈をそわせている。東側は煙道に近く直立する竈1個があるが他は浮いている。中央の円盤状の石は天囲の竈であろう。土層は、Ⅰ層が黒色粘質土層、Ⅱ層が焼土層、Ⅲ層が黒褐色粘質土層、Ⅳ層が暗褐色土層、Ⅴ層が白色粘土ブロック、木炭片、焼土を多量に含む黒色粘質土層である。

出土遺物は、坏がほとんどなく、羽釜や鉢が多い。1は唯一の坏である。底部が尖出し、6号住居址の坏に似る。2は羽釜で、内外面ともナデ調整や指頭圧痕が目立つ。つばは貼り付け後に周辺を含めてナデ調整。3は鉢か羽釜の底部。外面にヘラ調整がみられる。底部外面は砂まきされ、作業台から切りはなしがよいようにしている。この技術的要素に注意を要する。4は鉢で、非常に厚い器壁である。外面にナデ調整と指頭圧痕、内面にナデ調整がみられる。底



第25図　奈良・平安時代の土器

部外面は木葉底であろう。5は羽釜で、外面縦方向のナデ調整、内面横方向のナデ調整で、それは底部内外面に及ぶ。つばより上方の口縁が短いのが特徴である。3、4、5はカマド内出土かそうした部品を含むが、1、2は覆土中出土である。

その他の奈良・平安時代の遺物

奈良時代の土器は、1、2のみである。3は、灰釉陶器の段皿である。4、5、6は大型の坏で、いずれもロクロ成形の後は無調整。5、6は底部が非常に厚い。4は、底部をゆびでおさえ、へこませているらしい。4、5、6はいずれも2号住居址付近から出土しており、同一時期のものと思われる。なお、6は漆のような光沢のある黒色物質を全面に付着させている。3はおおむね10世紀代、5、6、7は11世紀代のものであろう。なお、図示しなかったが、内面に暗文を有する坏片も出土している。

6．中・近世の遺構と遺物

1号竪穴状遺構

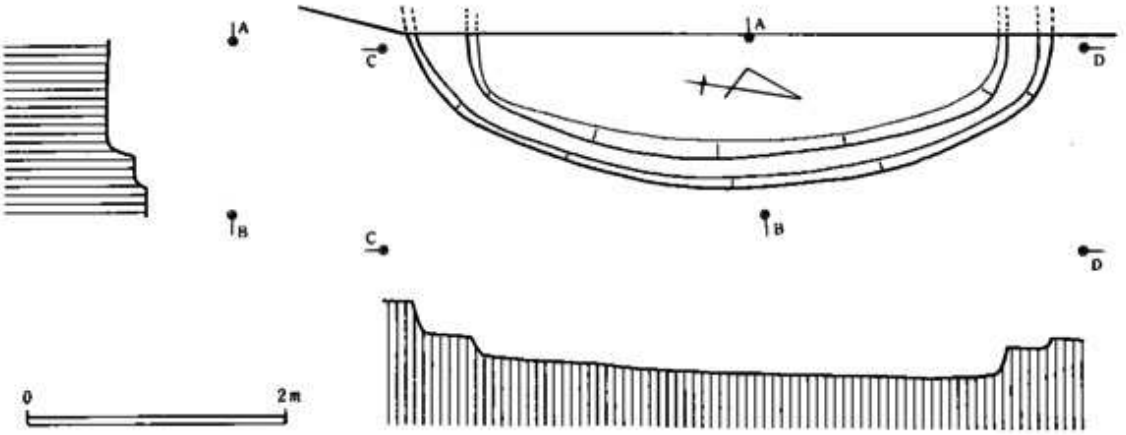
6号住居址西側の道路に大半を切られた遺構である。大、小2基が切り合っていると思われるが、下位のものが古く、その覆土が上位のそれよりもかなり硬かった。下位より第27図の鉢や黄瀬戸の陶器片が出土したので、中・近世のものと判断した。他の壁穴状遺構と異なり、東辺がゆるく弧を描く。同遺構の中で、大型の部類に入る。底面は非常に平坦である（第26図）。他の竪穴状遺構群から孤立しているが、同遺構がさらに北側にも分布すること、2号竪穴状遺構も含め、本遺構より東側には同遺構が分布しないことを推測させる。

出土遺物は、第27図の鉢と黄瀬戸の皿と思われる陶器の細片のみである。鉢はボール状の器形で、口縁端が平坦である。内外面ともヨコナデされているが、内面は特に平滑に仕上げられている。本遺跡では他に類例がない。

2号竪穴状遺構

7号住居址西側で見い出された、竪穴状遺構群では1号竪穴状遺構とともに最も東側に位置するものである。隅がやや丸い正方形を呈する。本遺跡では最も一般的にみられる大きさである。底部は平坦に掘られている（第28図）。覆土は黒褐色粘質土でロームブロックはない。

出土遺物は、擂鉢の破片1点のみで他は縄文時代の土器片である。第29図がそれで、緻密な



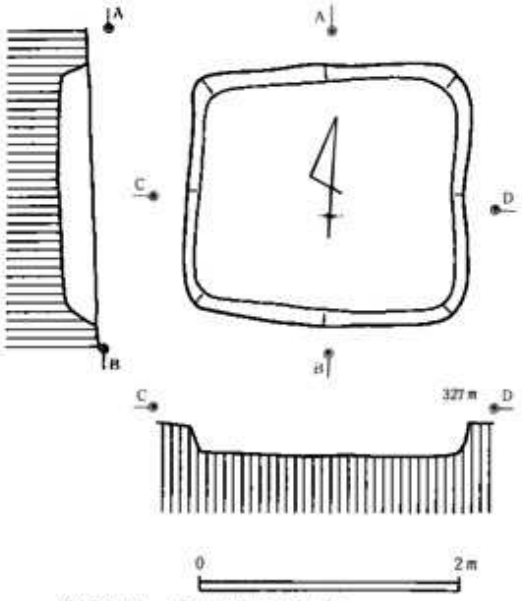
第26図　1号竪穴状遺構（水糸標高327m）

第27図　1号竪穴状遺構出土土器

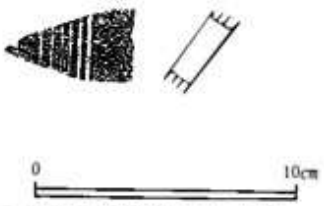
胎土で、赤みのある黄褐色を呈する。外面に指頭痕が多く、内面は非常に平滑である。

3号竪穴状遺構

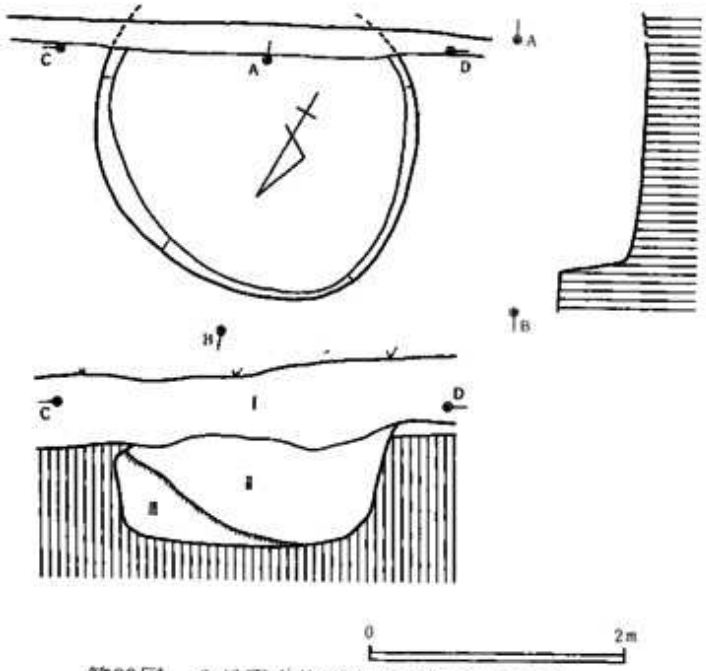
A区の最も東にある竪穴状遺構である。この付近より竪穴状遺構が多く分布するようになる。非常に深いもので、本遺構の確認面直下にある黒色帯を掘りぬきその下底より約50～80cmほど下に至っている。掘り込み部のうち、南東部でセクション面に内側にオーバーハングする部分がみられる。黒色帯の深さからして、削平以前の地表面は現地表面とほぼ同じであろうから、地下式壙と考えるには浅すぎる。上部がやや内側にせり出すとしても、天囲のように上をふさぐものではなかったと考えたい。土層は、Ⅰ層耕作土層、Ⅱ層暗褐色粘質土層で1～5cmのロームブロックを多く含む。Ⅲ層は暗褐色粘質土層でローム粒子を多く含む。Ⅲ層上面を木炭片を多く含む黒色土帯が覆うが、これはⅢ層堆積後、一時土層堆積が停止した状況を示すものと思われる（第30図）。円形を呈する。



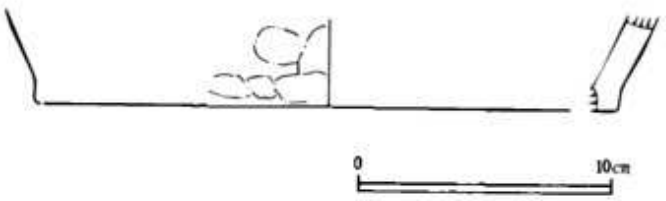
第28図　2号竪穴状遺構



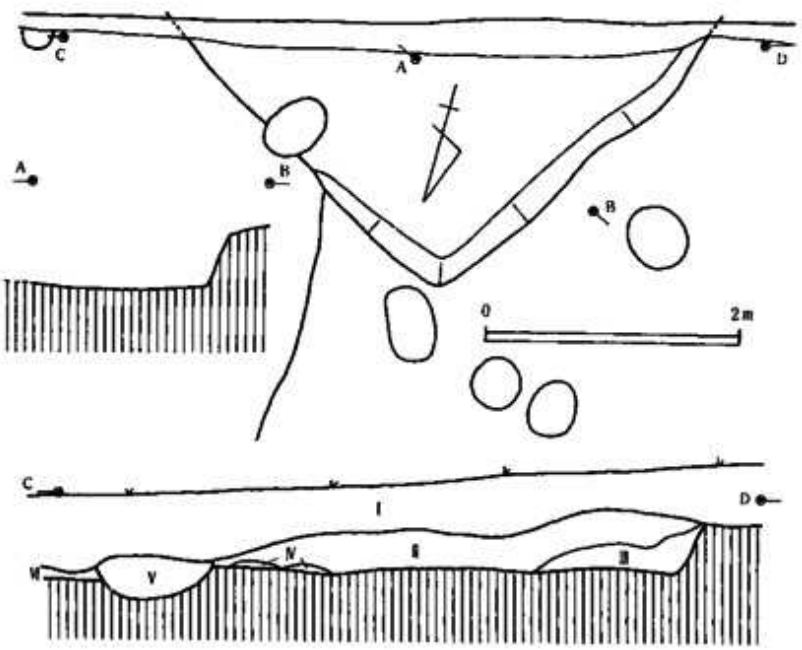
第29図　2号竪穴状遺構出土土器



第30図　3号竪穴状遺構（水糸標高328m）



第31図　3号竪穴状遺構出土土器



第32図　4号竪穴状遺構（水糸標高328.5m）

出土遺物は、鍋形と思われる内耳土器の破片1点のみで、他は縄文～平安時代のものである。第31図は内外面ともヨコナデがみられ、外面に指頭痕が目立つ。砂粒を多く含むスカスカの胎土で、外面がススを付着させたように黒色を呈する。

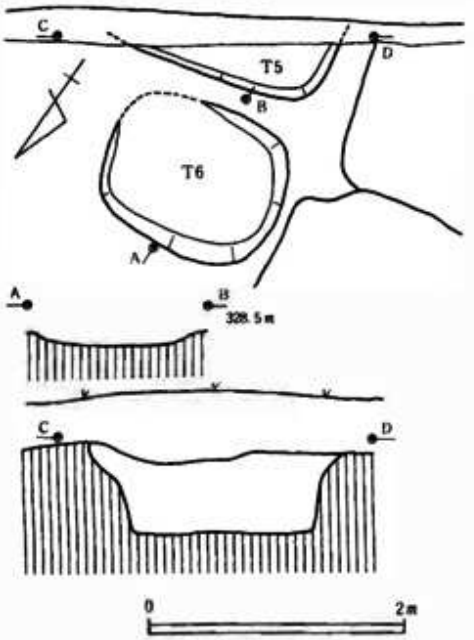
4号竪穴状遺構

隅丸方形のプランで、かなり大型である。黒色帯を掘り込んでいるがかなり浅い。土層は、Ⅰ層耕作土層、Ⅱ層ロームブロックを含まない黒褐色粘質土層、Ⅲ層Ⅱ層よりも黒く大型ロームブロック、黒色帯ブロックを含む黒褐色粘質土層、Ⅳ層焼土と白色粘土ブロック、Ⅴ層後世の攪乱と思われる焼土、木炭片を多量に含む黒色粘質土層、Ⅵ層2号住居址覆土である暗褐色粘質土層である（第32図）。焼土や白色粘土ブロックのみられるのは本例のみである。

出土遺物は、すべて縄文～弥生時代のものであった。

5号竪穴状遺構

ほとんどの部分が発掘区外にあるのでプランの推定もできない。土層は、覆土が1～3cmほどのロームブロックを多量に含む暗褐色粘質土である（第33図）。



第33図　5・6号竪穴状遺構

6号竪穴状遺構

非常に小型の竪穴状遺構で、非常に浅い。小判形に近いプランである（第33図）。出土遺物はない。

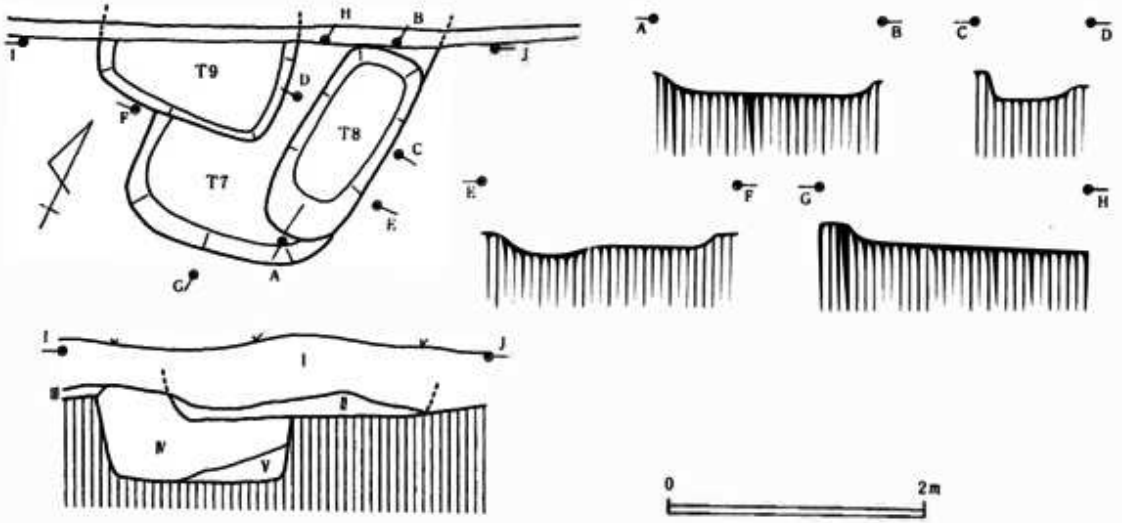
7号竪穴状遺構

9号、8号竪穴状遺構に切られ、発掘区外にのびる状況ではあるが、隅丸長方形のプランと思われる。非常に浅く、大半を耕作で失われていると思われる。底面は平坦（第34図）。

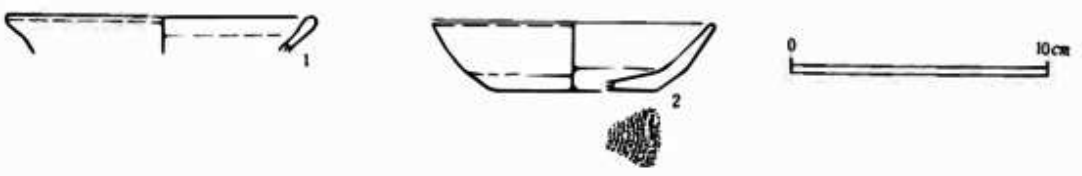
出土遺物は1点のみである。第35図1は、土師質土器の小皿であるが、内面全面に銅と思われる溶融物が付着し、ガラス分が溶出して表面を覆い、胎土も須恵質に変質している。口縁部が玉縁状にふくらむのは、変質によるふくらみである。

8号竪穴状遺構

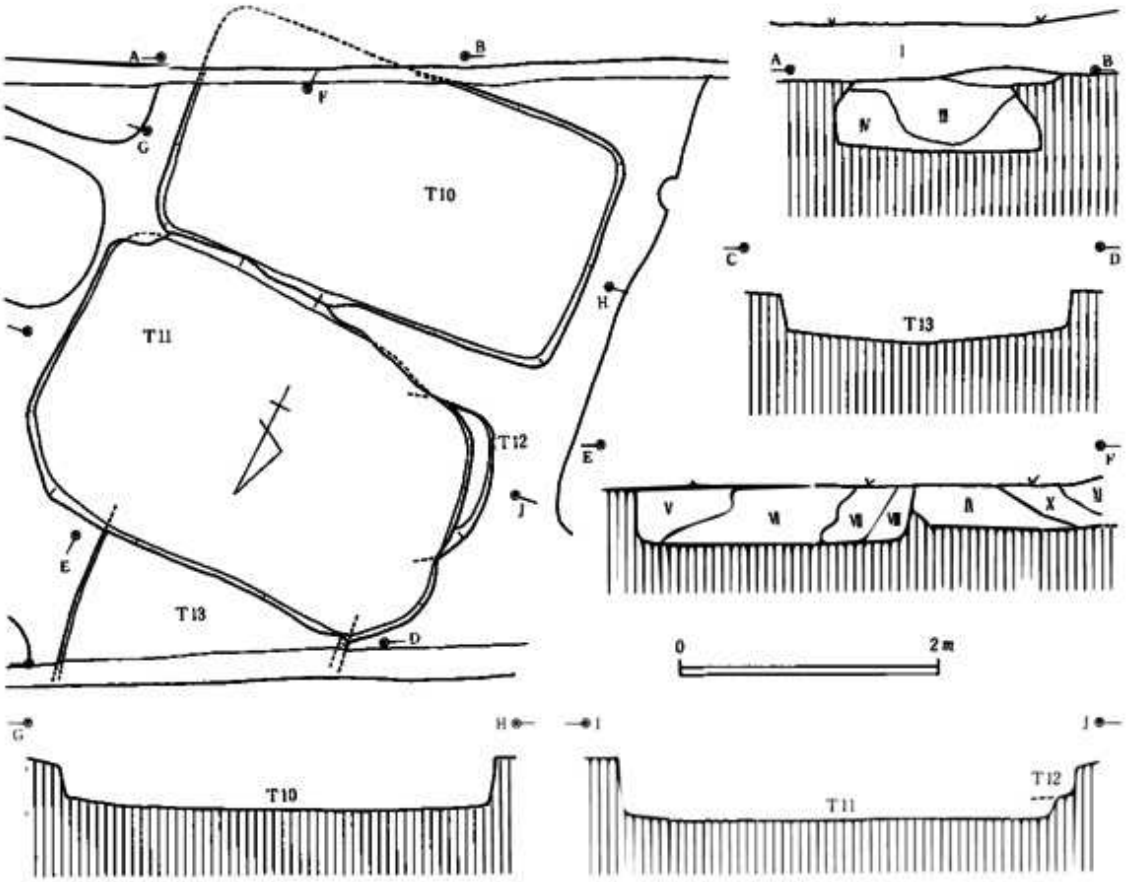
非常に長い隅丸方形のプランである。7号竪穴状遺構を掘り込んでいる。やはりかなり浅く、耕作で



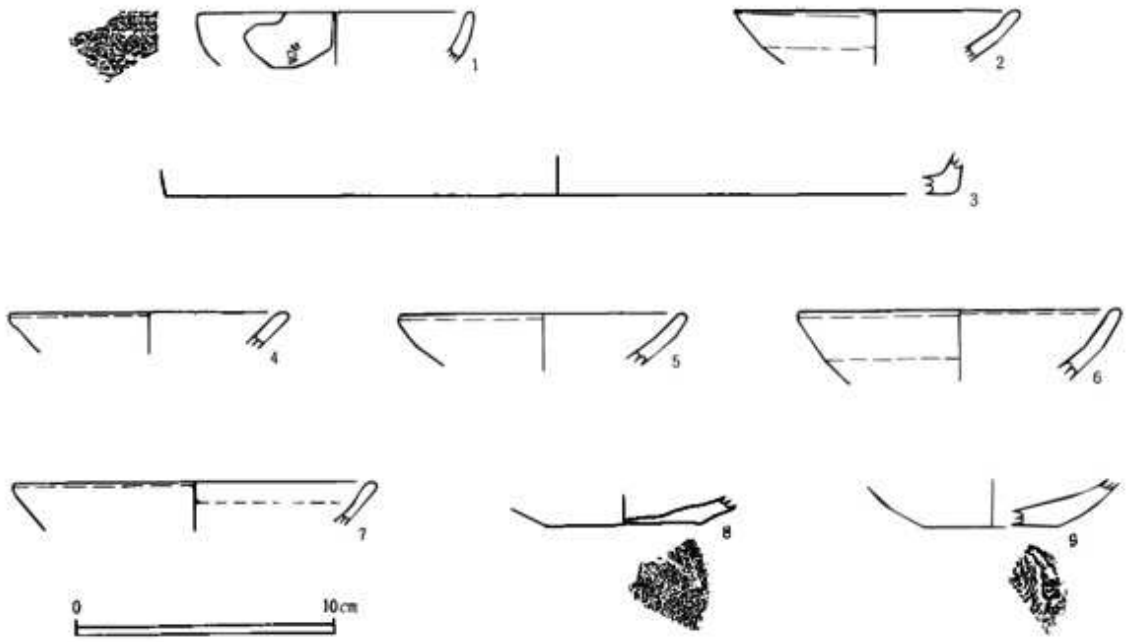
第34図　7・8・9号竪穴状遺構（水糸標高328.5m）



第35図　7・9号竪穴状遺構出土土器



第36図　10・11・12・13竪穴状遺構（水糸標高328.5m）



第37図　10・11号竪穴状遺構出土土器

削られているものと思われる（第34図）。出土遺物は、まったくみられない。

9号竪穴状遺構

非常に深い竪穴状遺構である。隅丸方形であるが、ほとんど発掘区外にあり、その長さについては不明である。底面もかなり平坦である。土層より切り合い関係が判断できる。Ⅰ層耕作土層、Ⅱ層7号竪穴状遺構の覆土で1㎝ほどのロームブロックを含む黒色粘質土層、Ⅲ層大型ロームブロックを含む黒褐色粘質土層、Ⅳ層9号竪穴状遺構の覆土で1～3㎝ほどのロームブロックを多量に含む暗褐色粘質土層、Ⅴ層1㎝ほどのロームブロックを多量に含む暗褐色粘質土層である。Ⅱ層下底面は非常に硬く、7号竪穴状遺構が9号竪穴状遺構を切っている状況がわかる。

出土遺物は3点あり、すべて土師質土器の小皿である。また、すべて溶融物付着土器である。第35図2はそのうちの1点である。外面がやや湾曲し、口縁は薄く丸い。底部がややとび出すようにみえ、胴下半部にわずかに段がつくようにみえる。同面に銅と思われる溶融物が付着。

10号竪穴状遺構

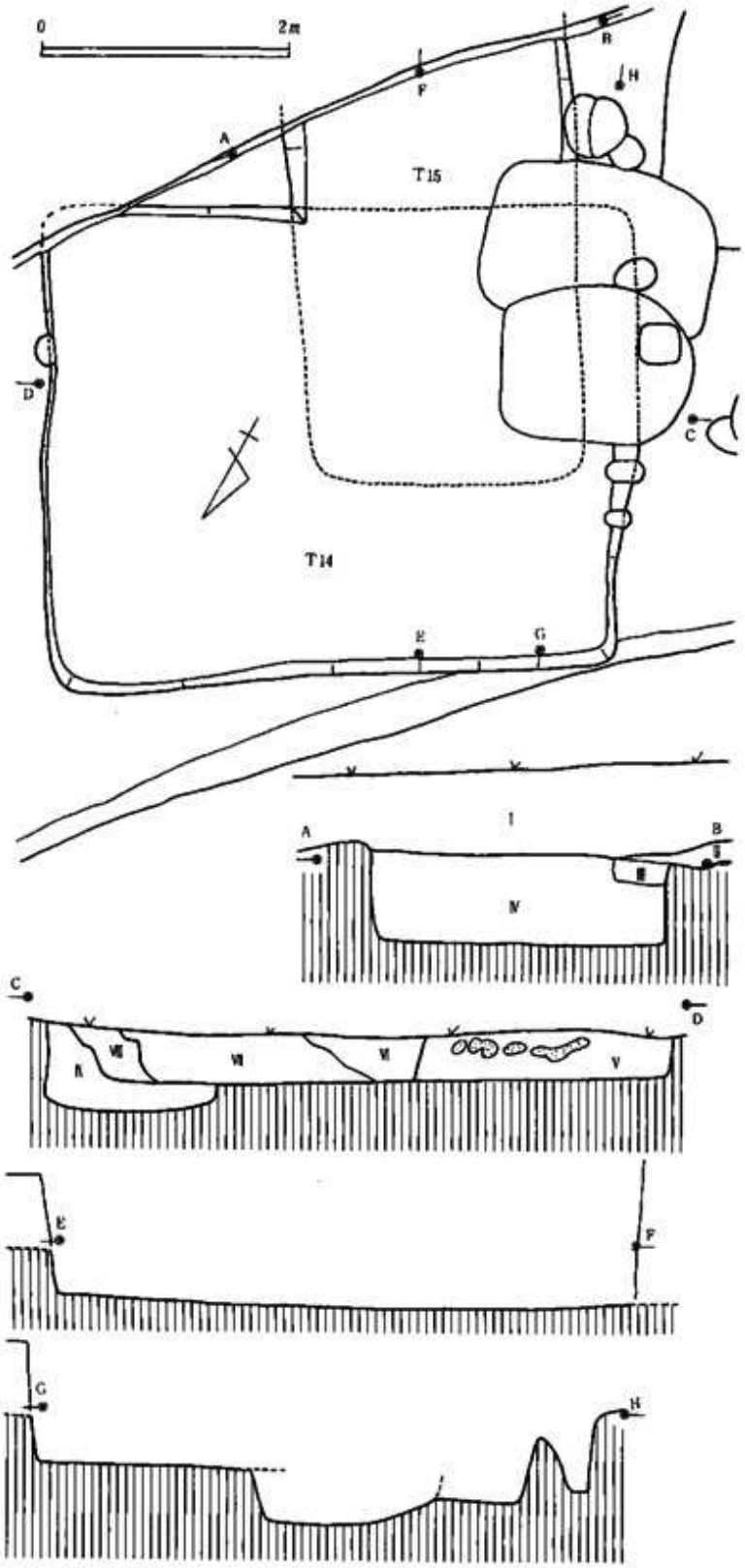
隅丸長方形の大型の竪穴状遺構である。底面は非常に平坦である。掘り込み上部が内側にやや突出する部分がある。また、南西隅付近で、掘削時の道具の痕跡がみられた。幅30㎝ほどで外傾にゆるい弧状に出る断面をもつもので、縦方向にならぶ。土層は、Ⅰ層耕作土層、Ⅱ層ロームブロックを含まない暗褐色粘質土層、Ⅲ層1～3㎝ほどのロームブロックを多量に含む黒褐色土層、Ⅳ層ロームブロックをほとんど含まない黒褐色土層である。

出土遺物は6点あり、他は全て縄文～平安時代の土器である。土師質土器の小皿や内耳土器の破片である。第37図1～3がその一部である。1は、土師質小皿であるが、椀状に内湾する。外面に菊花文と思われるスタンプ文様を有する。胎土は粗く、赤褐色である。2は土師質の小皿である。口縁部内面がややもりあがる。内外面ともススが付着したようにうっすらと黒いが、胎土は白褐色で緻密。3は内耳土器底部破片である。他に鉄サイ風の溶融物1点出土。

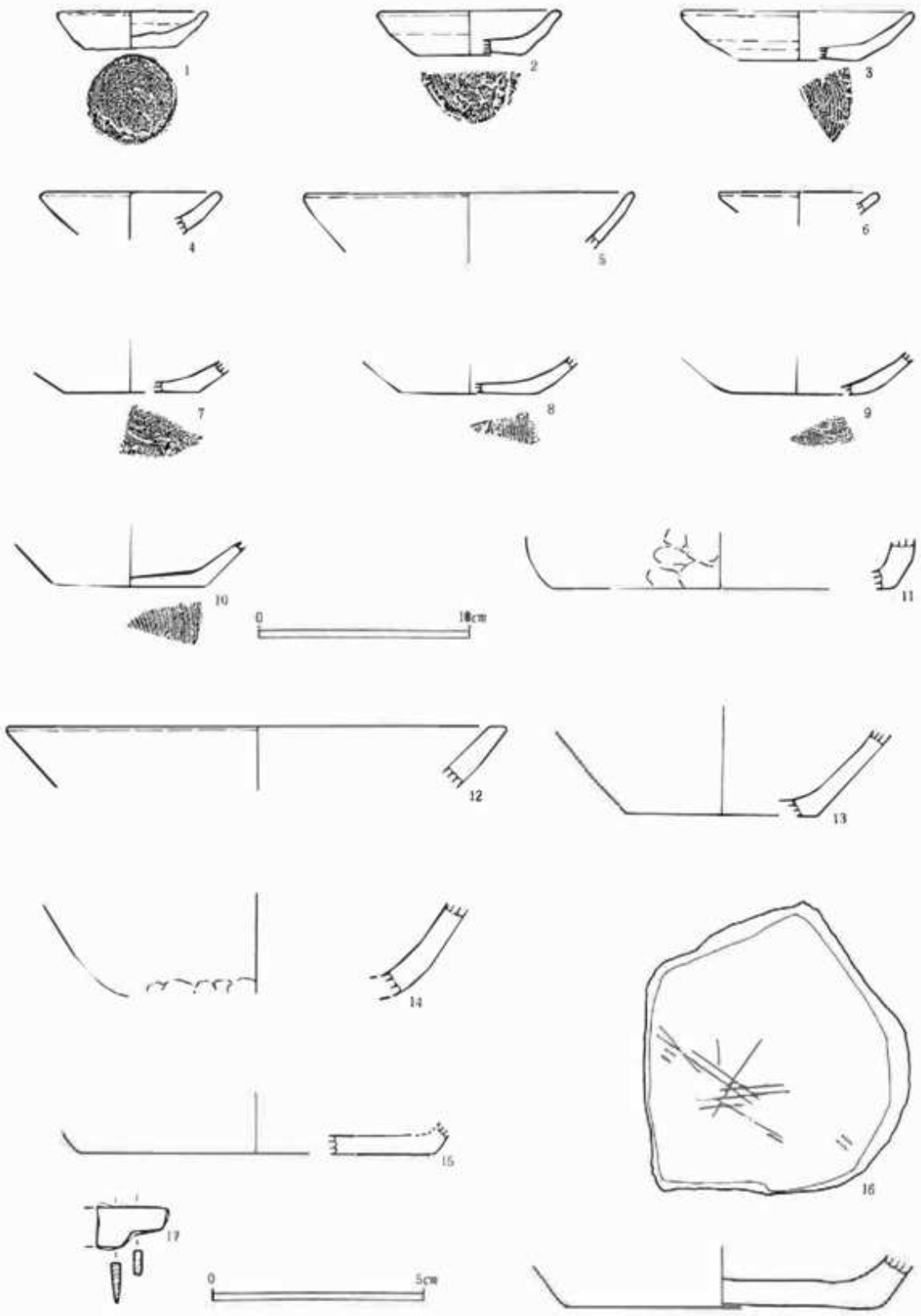
11号竪穴状遺構

10号竪穴状遺構と形状や規模が似る。ただし北辺の両隅が台形状に切られている。底面は非常に平坦である。土層は、Ⅴ層1㎝以内のロームブロックを少量含む黒色粘質土層、Ⅵ層3～5㎝のロームブロックを多量に含む暗褐色粘質土層、Ⅶ層ロームブロックをほとんど含まない黒褐色粘質土層、Ⅷ層Ⅴ層に近似する黒色粘質土層、Ⅸ層10号竪穴状遺構覆土で3～5㎝のロームブロックを多量に含む暗褐色粘質土層、Ⅹ層はⅣ層と同じ、Ⅺ層はⅢ層と同じである。この土層によるかぎり11号竪穴状遺構が10号竪穴状遺構を切っていると考えられる（第36図）。

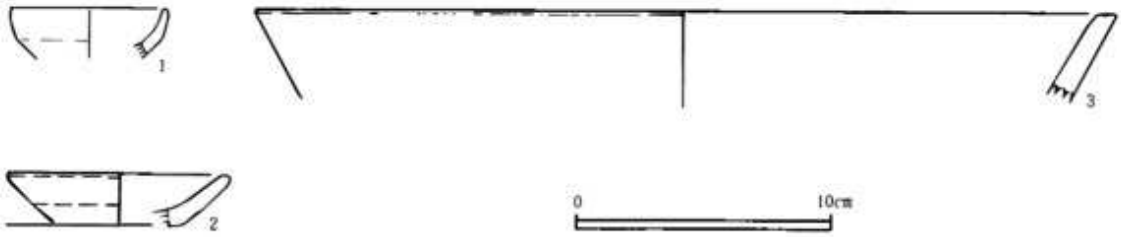
出土遺物は、土師質の小皿、擂鉢、内耳土器などが少量ある。また、溶融物付着土器も3点みられる（第37図6、8を含む）。4～7は土師質土器の小皿口縁部である。いずれも外面がやや湾曲する。口縁内側がややもりあがるもの4、7と、体部よりやや薄くなり丸いもの5、6とがある。6の胎土がかなり白いが他は赤みがある。8、9は小皿底部である。底部中央が非常に薄くなる傾向がある。底部屈曲部が非常に厚い。8は底縁部がやや出るようにみえる。9は外面が湾曲する。8は回転糸切りの後に板状圧痕風のものが一条みられる。



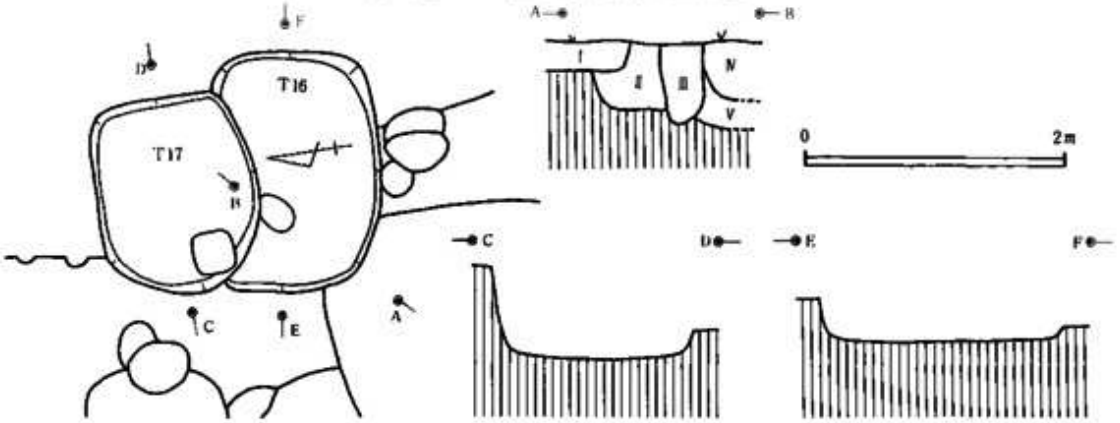
第38図　14・15号竪穴状遺構（水糸標高328.5m）



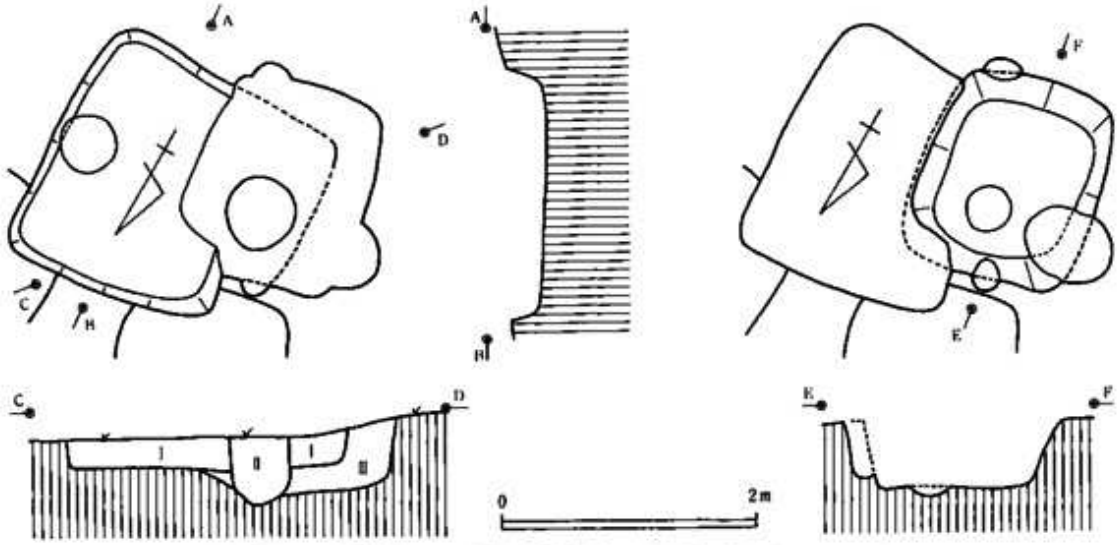
第39図　14号竪穴状遺構出土遺物



第40図　15号竪穴状遺構出土土器



第41図　16・17号竪穴状遺構（水糸標高328.5m）



第42図　18号(左)・19号(右)竪穴状遺構（水糸標高328.5m）

12号竪穴状遺構

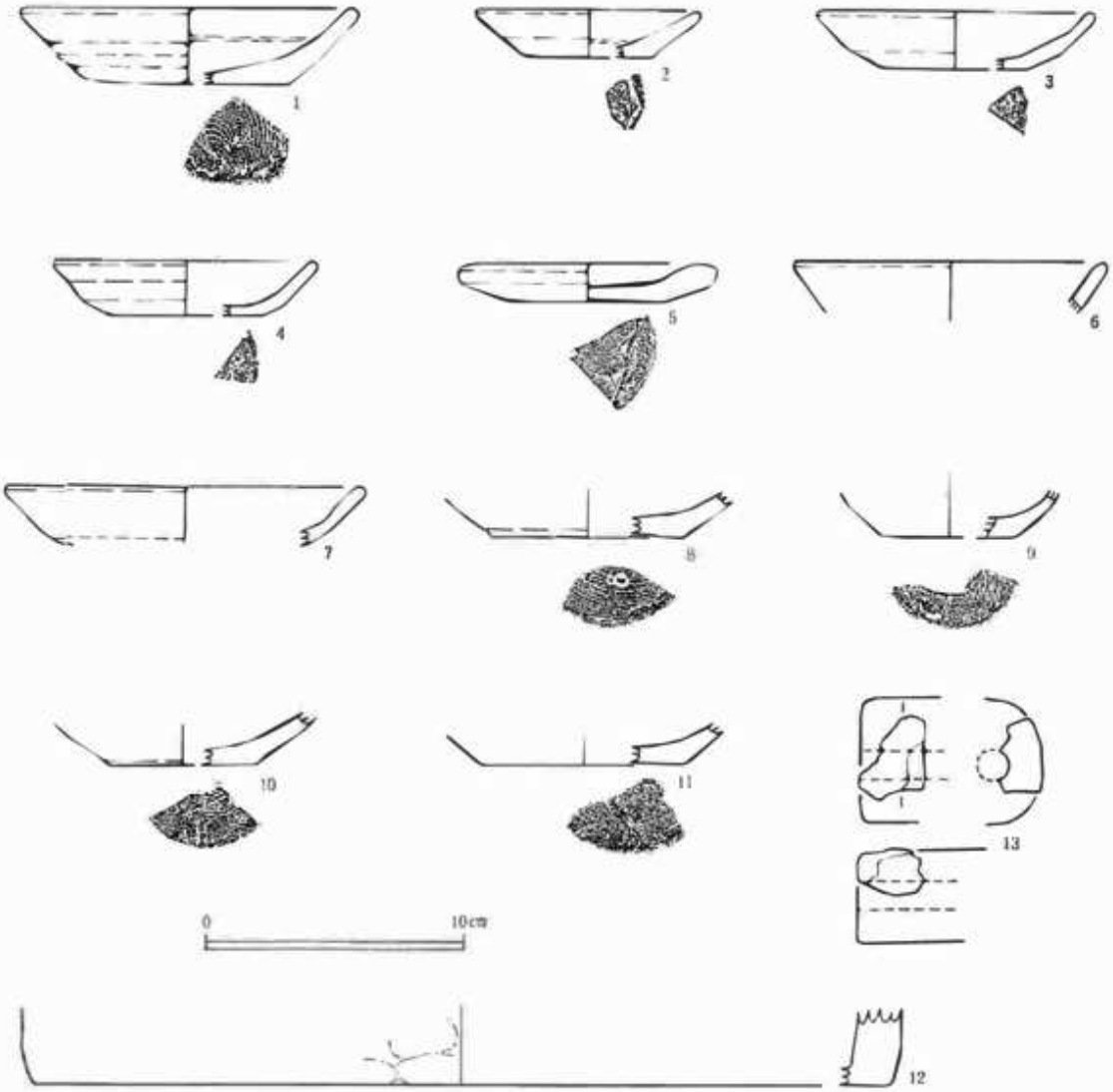
11号竪穴状遺構に切られ、プラン不明であるが、かなり小型なものであろう（第36図）。

13号竪穴状遺構

11号竪穴状遺構に切られ、ほとんど発掘区外にあるので、プラン不明（第36図）。

14号竪穴状遺構

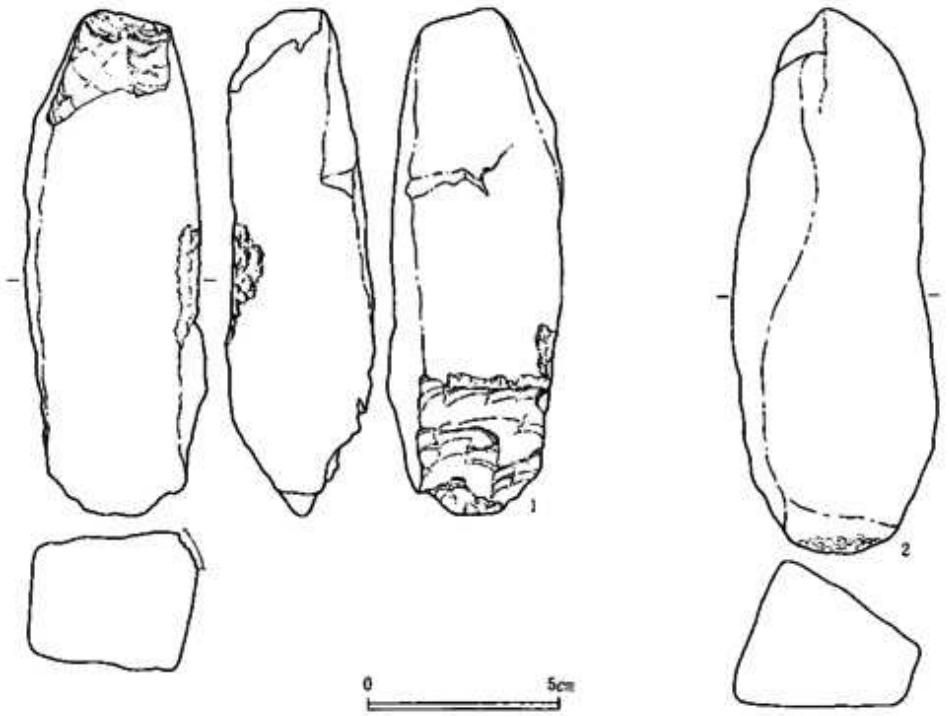
非常に大型である。東西にやや長い隅丸方形プラン。北辺の東側がやや北に出る。土層は、



第43図　18号竪穴状遺構出土遺物

V層ロームブロックをほとんど含まない黒褐色粘質土層、VI層2㎝ほどのロームブロックを少量含む暗褐色粘質土層、VII層3～5㎝ほどのロームブロックを多量に含む暗褐色粘質土層、VIII層ローム粒を多量に含む暗褐色粘質土層、IX層5㎝ほどのロームブロックを多量に含む暗褐色粘質土層である。V、VIII層が本遺構の覆土、VI、VII層が15号竪穴状遺構、IX層が17号竪穴状遺構の覆土である。したがって、本遺構は17号竪穴状遺構より新しく、15号竪穴状遺構より古い。

出土遺物は非常に多い。土師質土器の小皿、擂鉢、内耳土器の他、鉢形の土器もあるようである。第39図1～10は、土師質の小皿である。一般的に外面は直線的である。5や7～10は、坏であるかもしれない。また10はやや古いものかもしれない。1は口縁内側がくぼむ。3の胎土が白褐色で緻密であるが、他は赤褐色で粗い。13の底部外面に棒状のものの圧痕が若干みられる。11～15は、鉢ないし擂鉢であろう。11、14は外面に指頭痕がみられ、内面はナデ。12、13はロクロ整形。12は灰色を呈する。瓦質に近い。11と15の底面に砂まきがみられる。16は擂鉢で



第44図　18号竪穴状遺構出土石器

ある。底面に板状のものの圧痕らしきものがある。17は剝刀状の鉄器。鉄サイも出土。

15号竪穴状遺構

周辺で本遺構と切り合うものはすべて本遺構より古い。14号竪穴状遺構と覆土が近似し、そのおおよその範囲程度しかわからなかった（第38図）。土層は、Ⅰ層耕作土層、Ⅱ層ロームブロックを含まない黒褐色粘質土層、Ⅲ層ローム粒を多く含み硬質の暗褐色土層（小型の竪穴状遺構があったかもしれない）、Ⅳ層1～3㎝のロームブロックを多量に含む暗褐色粘質土層である。Ⅱ層がⅣ層の覆土を覆っている点注意。

出土遺物は4点ある。第40図1は土師質の小皿で、埦形に近い。2は、第39図2、4に近似する。3は擂鉢で、口唇に一条の沈線がまわり、端部が尖る。他の1点は土師質の小皿片。

16号竪穴状遺構

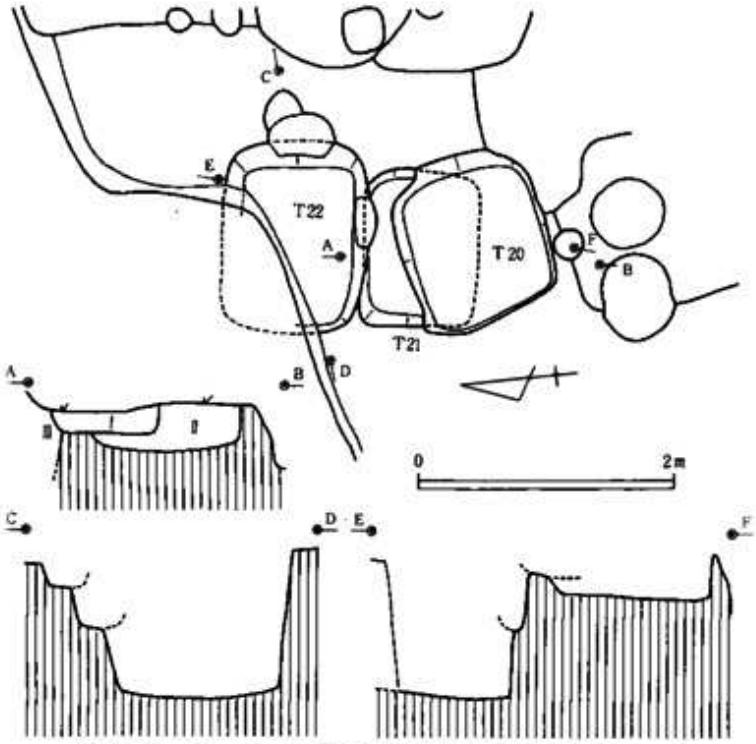
17号竪穴状遺構に切られている。小型の隅丸長方形で、東西にやや長い。土層は、Ⅰ層18号竪穴状遺構の覆土、Ⅱ層本遺構覆土で1～3㎝のロームブロックを多量に含む暗褐色粘質土層、Ⅲ層第3小ピット群のP36覆土でロームブロックを含まない黒色粘質土層、Ⅳ層14号竪穴状遺構覆土でローム粒を多量に含む暗褐色粘質土層、Ⅴ層17号竪穴状遺構覆土で大型ロームブロック層である。土層からして、本遺構は、切り合うどの遺構より古い（第41図）。遺物はない。

17号竪穴状遺構

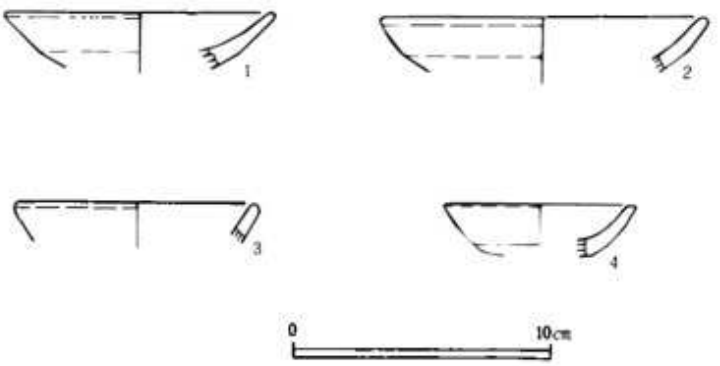
やや東西に長い隅丸方形で、西辺が丸い。第3小ピット群P37が切っている（第41図）。

18号竪穴状遺構

本遺構は他と違い、西側に突出部をもつらしい。これはセクションから判断したものである。



第45図　20・21・22号竪穴状遺構（水糸標高328.5m）



第46図　22号竪穴状遺構出土土器

Ⅰ層1～2㎝ほどのロームブロックを少量含む暗褐色粘質土層、Ⅱ層第3小ピット群P32覆土でロームブロックを含まず非常に軟質の黒色粘質土層、Ⅲ層19号竪穴状遺構覆土で1～4㎝ほどのロームブロックを多量に含む暗褐色土層である。Ⅰ層とⅢ層の境界は硬くなっていた。なお、第3小ピット群P34は本遺構より古い。

出土遺物は、土師質土器の小皿や内耳土器で、溶融物付着土器が非常に多いのが特徴である。ふいごの羽口も1点出土した。また、擂鉢の細片も1点ある。第43図1～11が土師質土器の小皿である。1、2、6以外は溶融物付着。5は口縁部が高熱で発泡。全体に外面が湾曲するものが目立つ。12は内耳土器底部。13が小型のふいごの羽口。他に鉄サイ風の溶融物、石錘（第44図）も出土。

19号竪穴状遺構

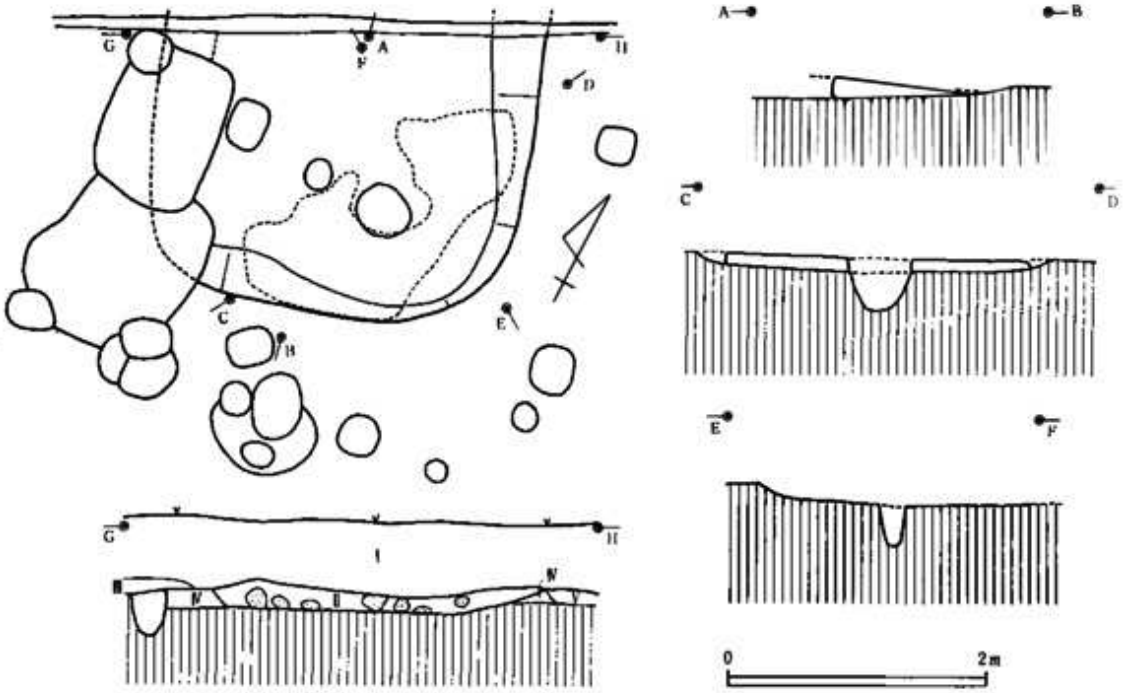
南北にやや長い隅丸方形を呈する。非常に深い。第3小ピット群P30よりは新しいが、P33、P31との関係は不明。P32と18号竪穴状遺構より古い（第42図）。遺物はない。

20号竪穴状遺構

東西にやや長い隅丸方形で、非常に小型。21号竪穴状遺構より古いが、18号竪穴状遺構との関係は不明である（第45図）。遺物は出土はなかった。

21号竪穴状遺構

東西にやや長い隅丸方形で、非常に小型。土層は、Ⅰ層本遺構覆土でローム粒を多く含む軟質



第47図　23号竪穴状遺構（水糸標高329m）

第48図　23号竪穴状遺構出土土器

の暗褐色粘質土層、Ⅱ層20号竪穴状遺構覆土で1～3㎝ほどのロームブロックを少量含む暗褐色粘質土層、Ⅲ層22号竪穴状遺構覆土で3～5㎝のロームブロックを多く含む黒褐色粘質土層である（第45図）。遺物は出土しなかった。

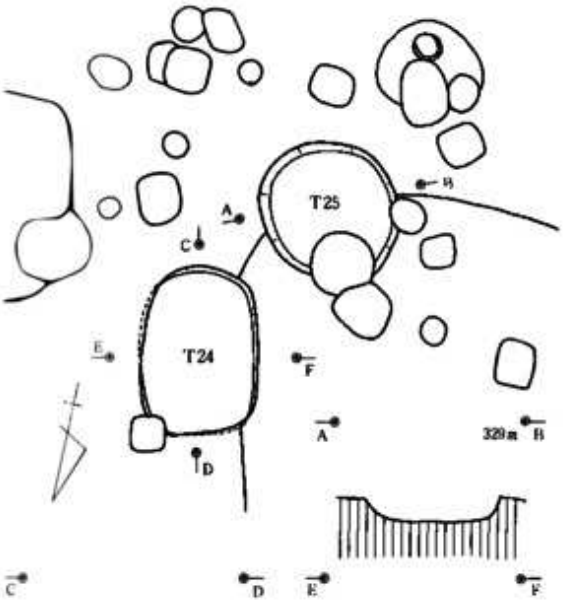
22号竪穴状遺構

東西に長い隅丸長方形を呈す。非常に深い。21号竪穴状遺構より古いが、第3小ピット群P46～48との関係は不明（第45図）。

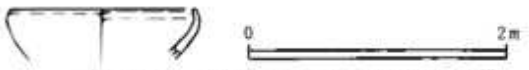
出土遺物は5点で、うち4点を図示した（第46図）。全て土師質土器の小皿。1と4が溶融物付着土器。1、2、4は外面が湾曲する。3の胎土が白褐色で緻密。4の口唇は平坦。

23号竪穴状遺構

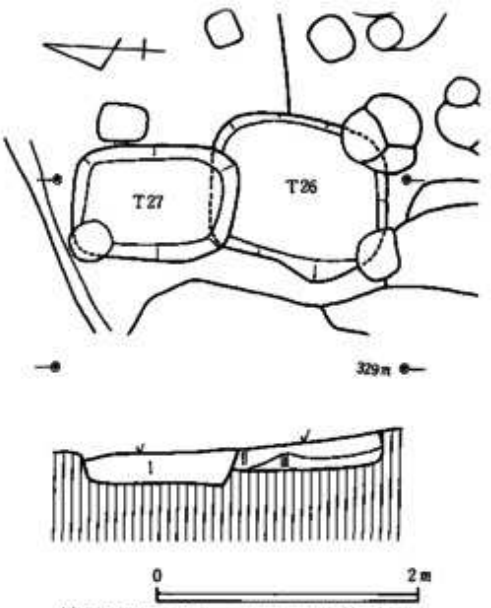
南北に長い隅丸長方形と思われるが、発掘区外にある部分も多い。上部の大半が耕作され、底面のみ残存したと思われるが、浅い皿状であり他と異なる。覆土が床面のように硬くなって



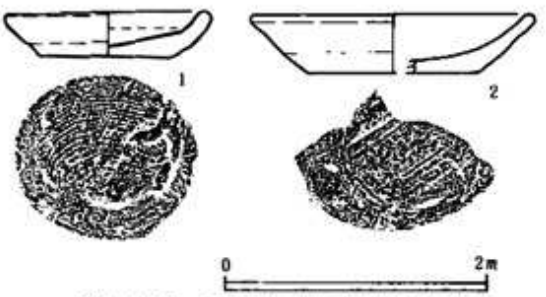
第49図　24・25号竪穴状遺構



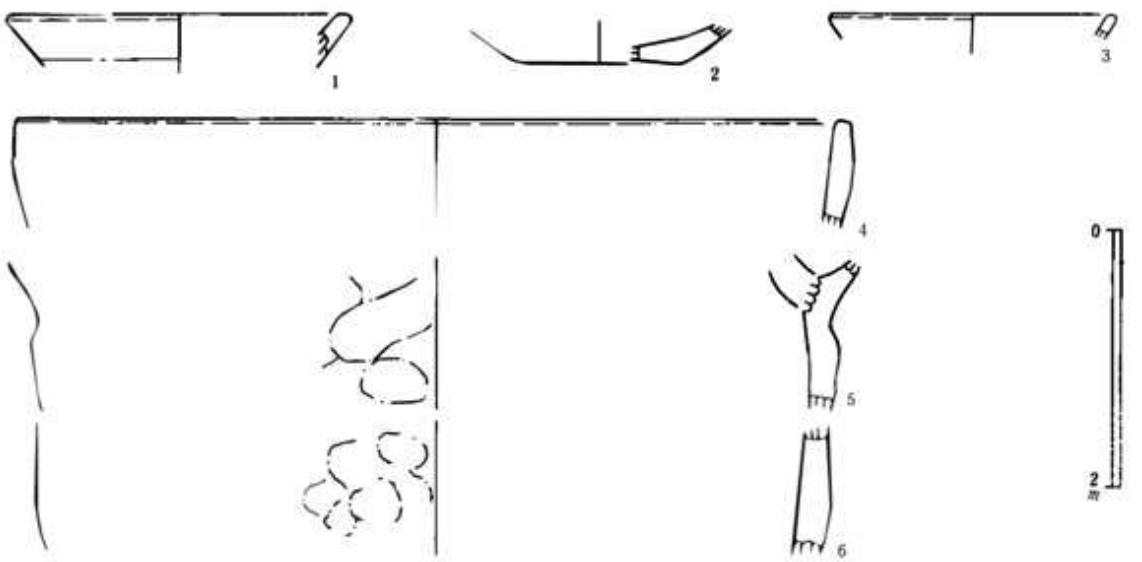
第51図　25号竪穴状遺構出土土器



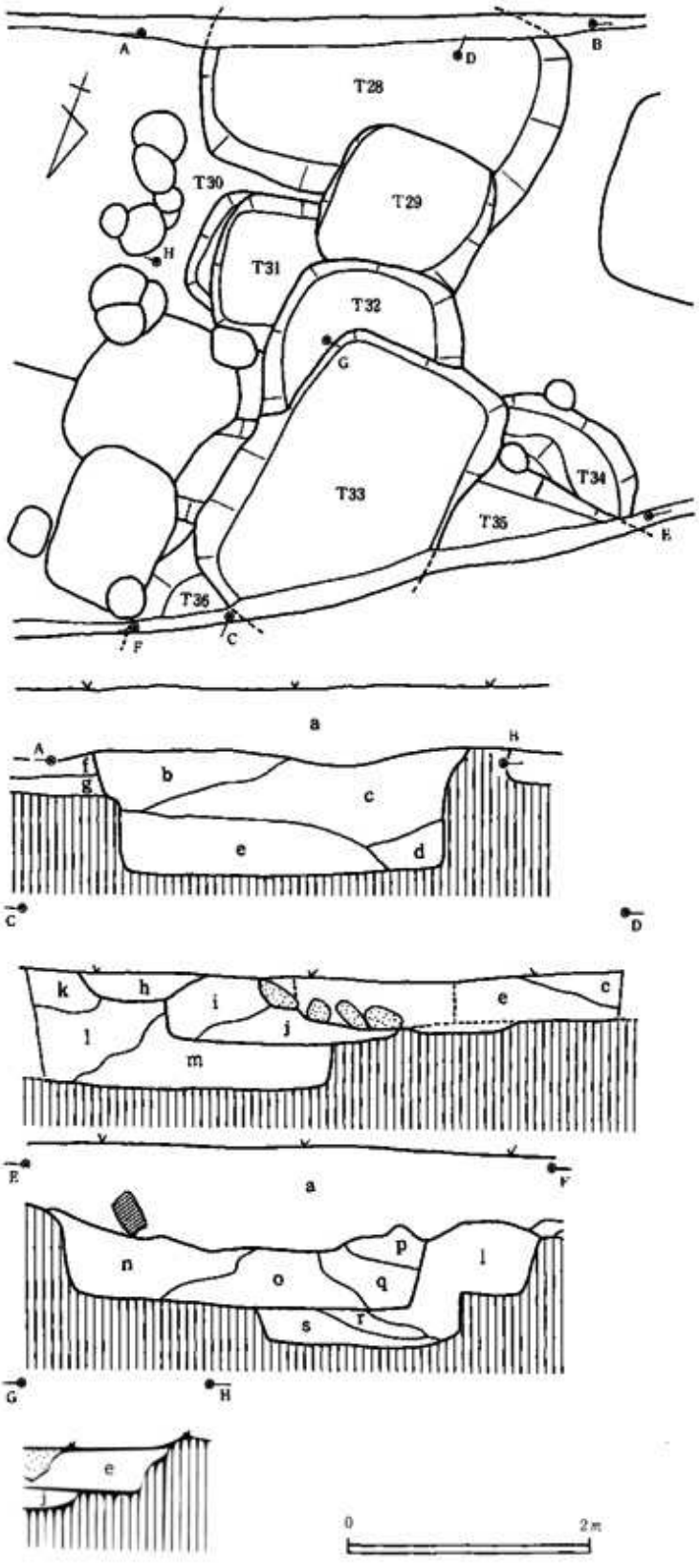
第50図　26・27号竪穴状遺構



第52図　27号竪穴状遺構出土土器



第53図　26号竪穴状遺構出土土器



第54図　28～36号竪穴状遺構(1)（水糸標高329m）

おり、かなり古い段階で削平され、そこが生活活動の場となったとも思える。土層は、Ⅰ層耕作土層、Ⅱ層平面図中破線で示した硬い暗褐色土のブロックを含む黒色粘質土層、Ⅲ層1㎝ほどのロームブロックを多量に含む暗褐色粘質土層、Ⅳ層硬くしまったロームブロック層、Ⅴ層黒色粘質土層である。第3小ピット群P20、21、25と26号、27号竪穴状遺構より古く、P22～24、24号、25号竪穴状遺構より新しい（第47図）。

出土遺物は、土師質土器小皿と内耳土器である。第48図は小皿である。口縁内側がもりあがるもの（1、3、4）、外面中央がもりあがるもの（1～4）があり、外面は非常に直線的である。1、3は内面黒色。

24号竪穴状遺構

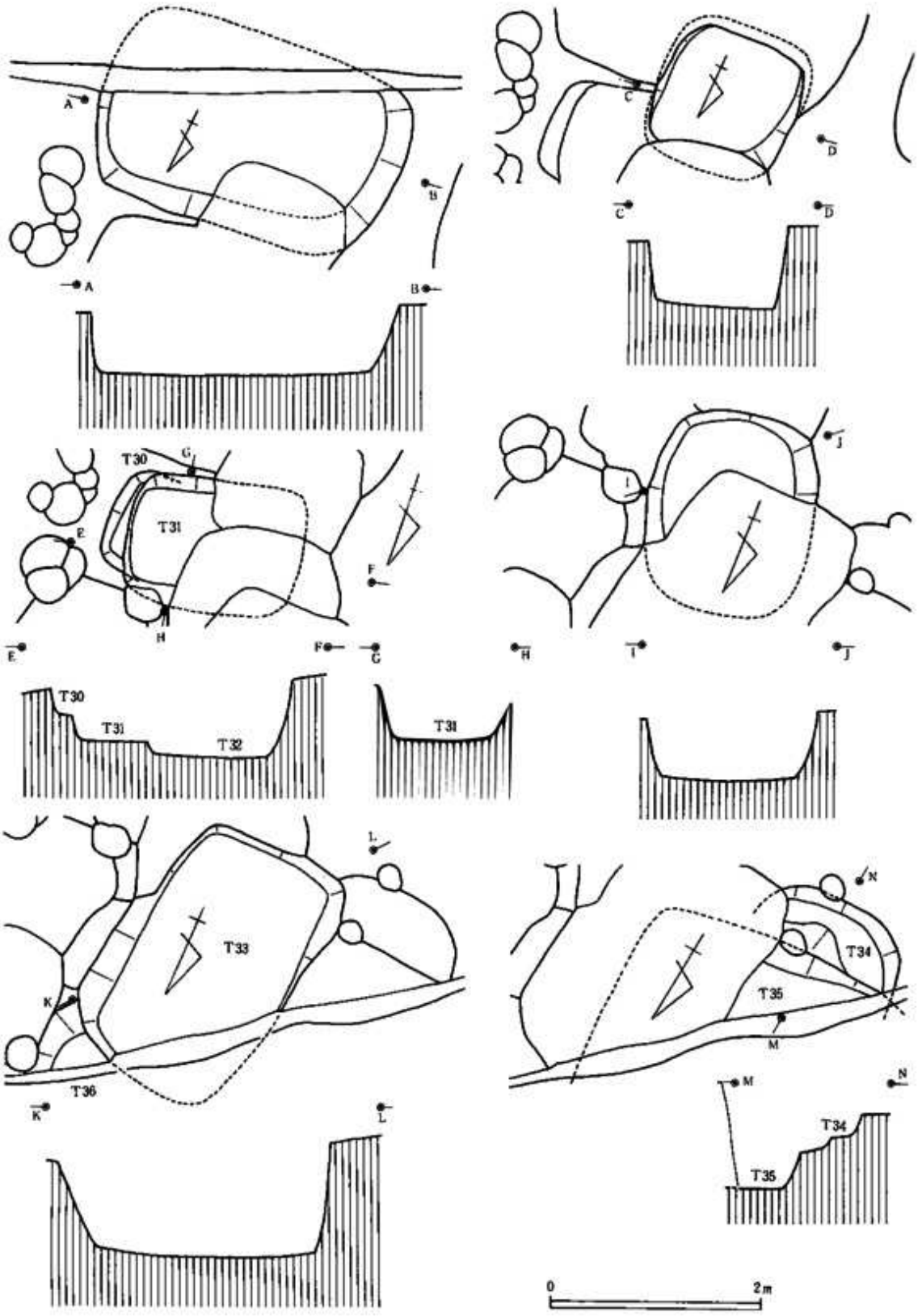
小型の小判形で底面が弧状にくぼむ（第49図）。P26と関係不明。小皿底1点出土。

25号竪穴状遺構

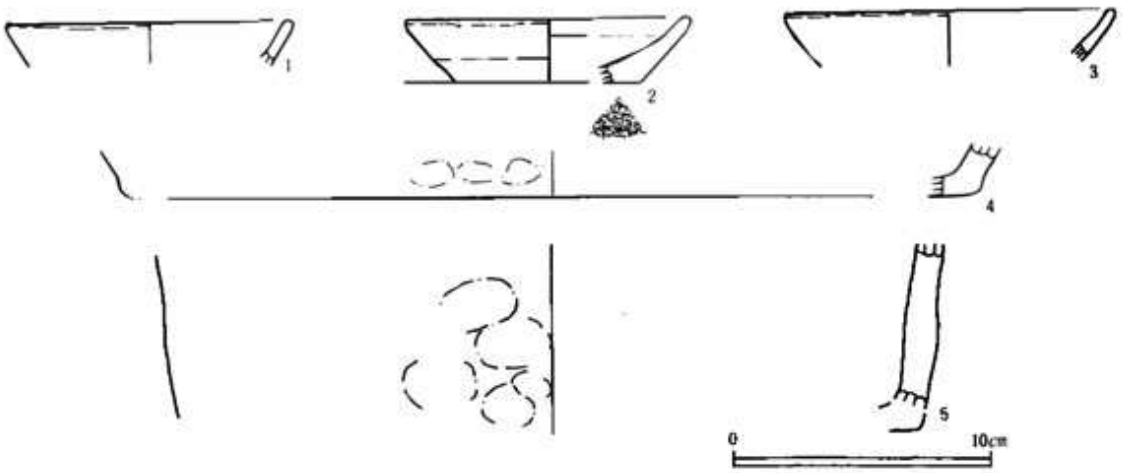
円形で底面がややくぼむ（第49図）。口縁が内傾する埦形の小皿の出土（第51図）。

26号竪穴状遺構

南北に長い隅丸長方形。27号竪穴状遺構より古い。土層は、Ⅰ層27号覆土で1㎝前後のロームブロックを多量に含



第55図　28～36号竪穴状遺構 (2)（水糸標高329m）



第56図　34・35号竪穴状遺構出土土器

む黒褐色粘質土層、Ⅱ層26号覆土で3～5㎝ほどのロームブロックを少量含み硬質の黒褐色粘質土層、Ⅲ層ロームブロックをあまり含まない非常に硬質の黒色粘質土層である（第50図）。

出土遺物は、内耳土器がほとんどで、小皿は図示した3点と溶融物付着の1点のみ。第53図1～3が土師質の小皿。4～6が鍋形の内耳土器。口縁が直立する。同一個体らしい。

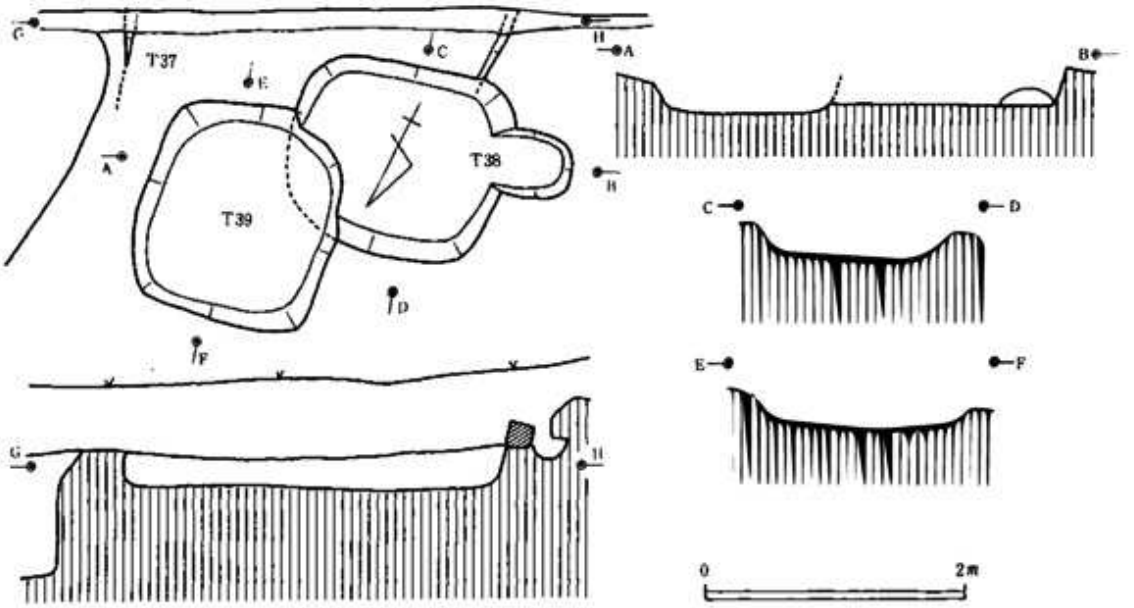
27号竪穴状遺構

南北に長い隅丸長方形。26号と同様に小ピットとの関係不明（第50図）。

出土遺物は、内耳土器片、擂鉢片、小皿が少量。第52図1、2は土師質の小皿。1の外面に漆状の黒色物質付着。2の底面に板状圧痕が明瞭。

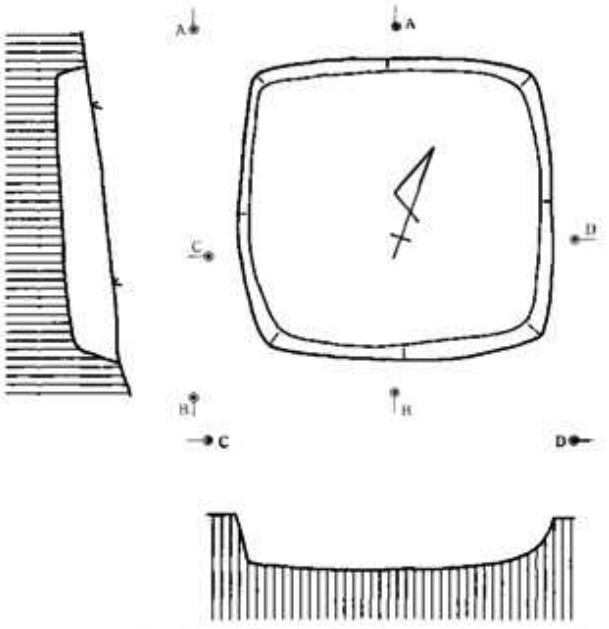
28号竪穴状遺構

東西に長い隅丸長方形で、東、西辺がかなり丸い。本遺構付近は竪穴状遺構が多数切り合う。ここで土層を説明し、新旧関係を述べたい。a層耕作土層、b層ローム粒を少量含む暗褐色土層、c層3～5㎝のロームブロックを少量含む黒褐色土層、d層ロームブロックをあまり含まない黒色土層、e層3～5㎝のロームブロックを多量に含む暗褐色土層、f層ロームブロックを含まない黒褐色粘質土層、g層3～5㎝Kロームブロックを多量に含む黒褐色土層、h層暗褐色粘質土層（比較的新しい攪乱か）、i層1㎝ほどのロームブロックを多量に含む暗褐色粘質土層、j層3㎝ほどのロームブロックを多量に含み非常に硬質の暗褐色粘質土層、k層1㎝ほどのロームブロックを多量に含む暗褐色粘質土層、l層3㎝ほどのロームブロックを多量に含み軟質の暗褐色粘質土層、m層ロームブロック層で非常に硬質、n層1㎝ほどのロームブロックを多量に含みボロボロの暗褐色粘質土層、o層大型ロームブロック層、p層3㎝ほどのロームブロックを少量含む黒褐色粘質土層、q層1㎝ほどのロームブロックを多量に含みボロボロの暗褐色粘質土層、r層ボロボロの小型ロームブロック層、s層1㎝以下のロームブロックを多量に含む暗褐色粘質土層である。切り合いを、古→新で示すと、29号→28号、29号→31号、32号→31号、33号→32号、33号→35号となる。切り合うもののうち、28号と31号、30号と31号、36号と33号、34号と35号の関係は不明（第54、55図）。

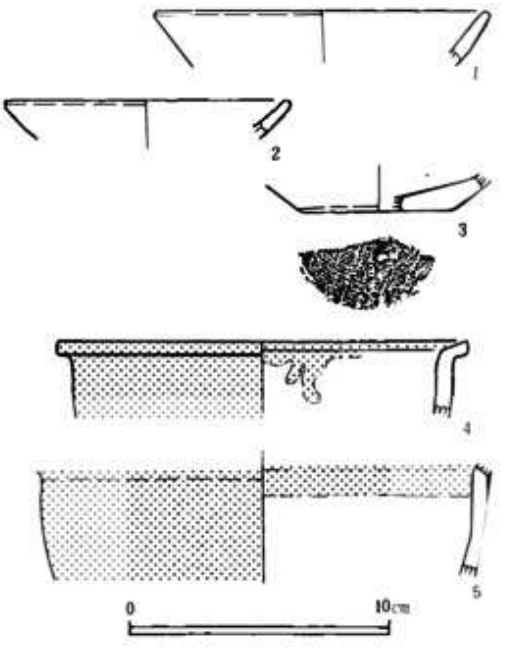


第57図　37・38・39号竪穴状遺構（水糸標高329m）

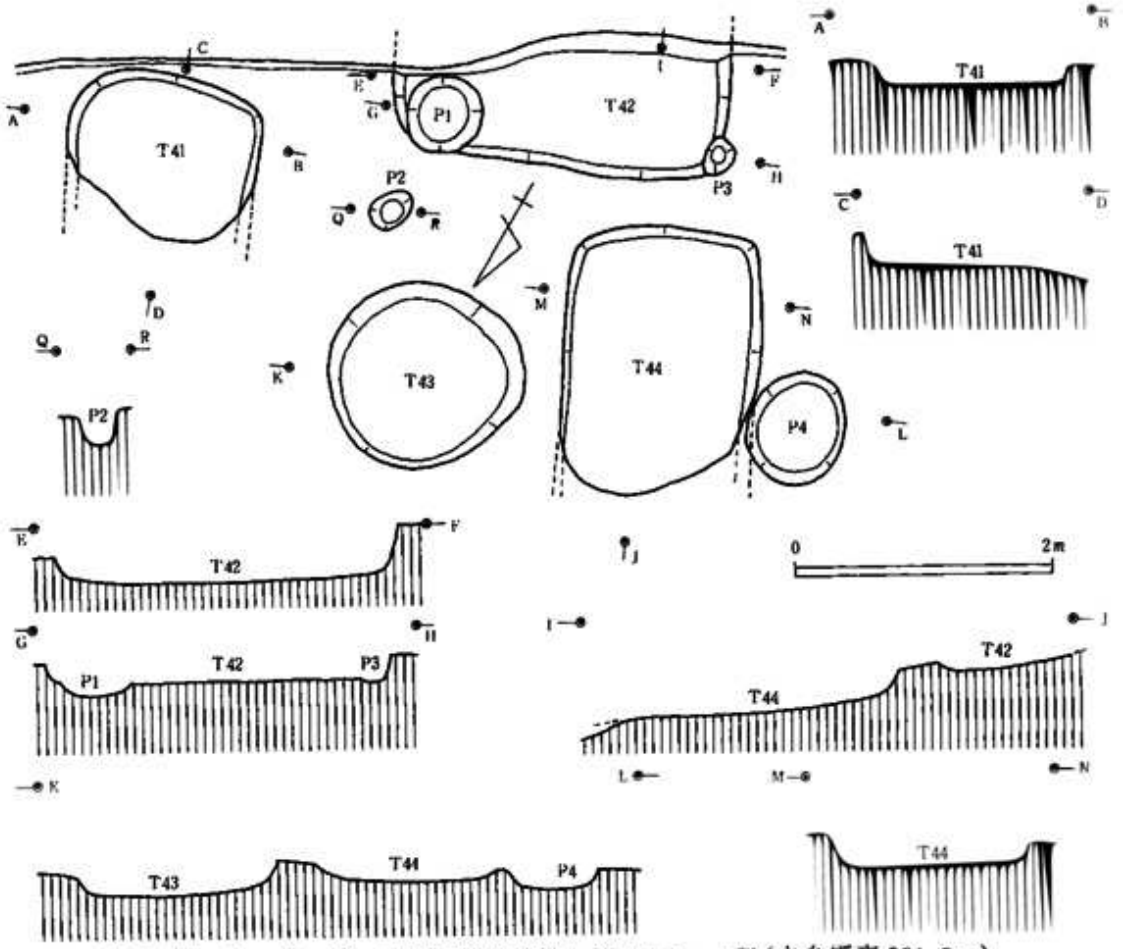
第58図　38号竪穴状遺構出土土器



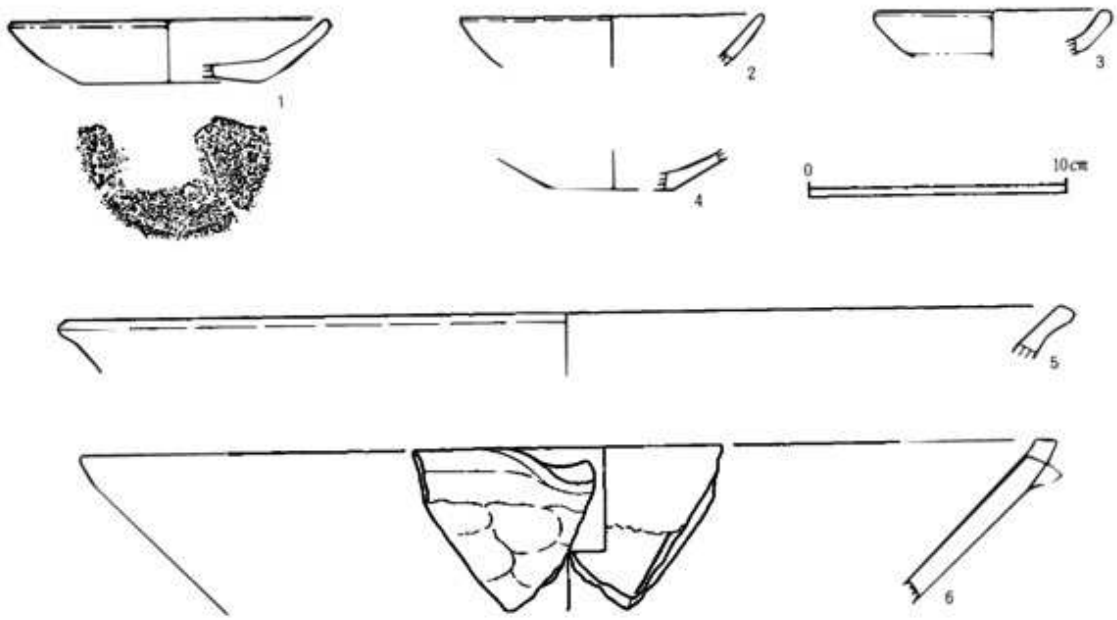
第59図40号竪穴状遺構（水糸標高331m）



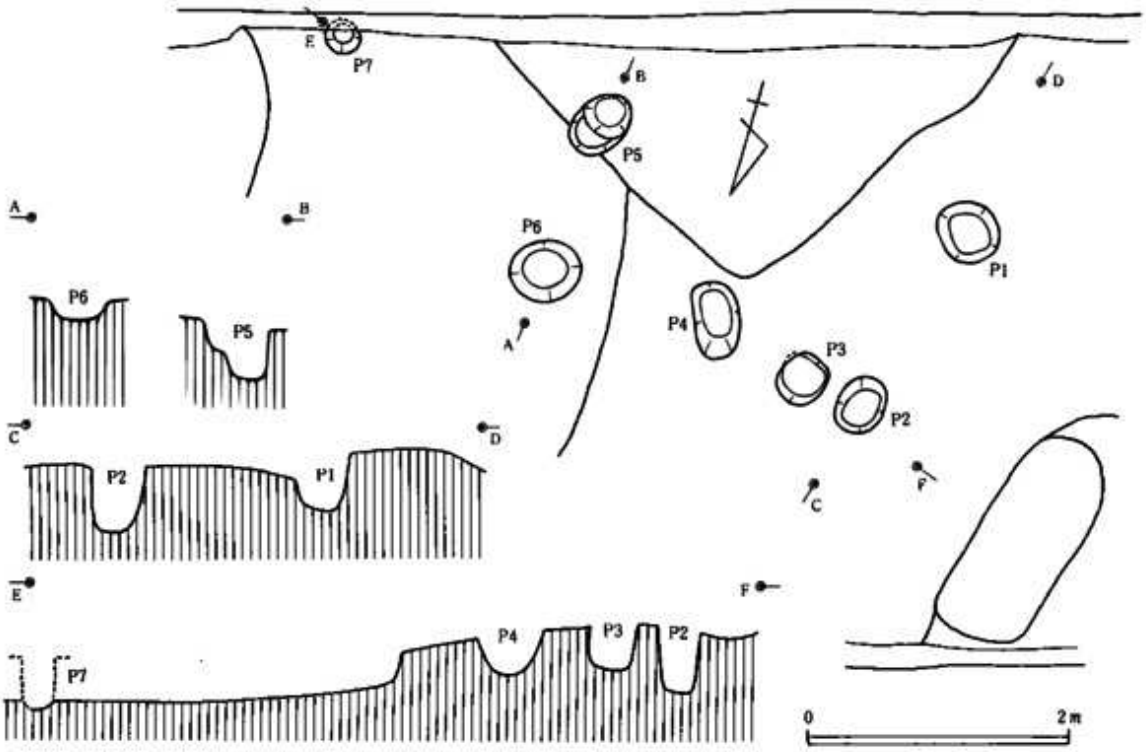
第60図40号竪穴状遺構出土土器



第61図　41・42・43・44号竪穴状遺構と第4小ピット群（水糸標高331.5m）



第62図　41・42・43・44号竪穴状遺構出土土器



第63図　第2小ピット群（水糸標高328.5m）

第64図　第2小ピット群P2内出土土器

29号竪穴状遺構

ほぼ正方形の隅丸方形を呈す。小型であるが深い（第55図）。遺物はない。

30号竪穴状遺構

31号に切られて形状不明。おそらく隅丸長方形。非常に浅い（第55図）。遺物はない。

31号竪穴状遺構

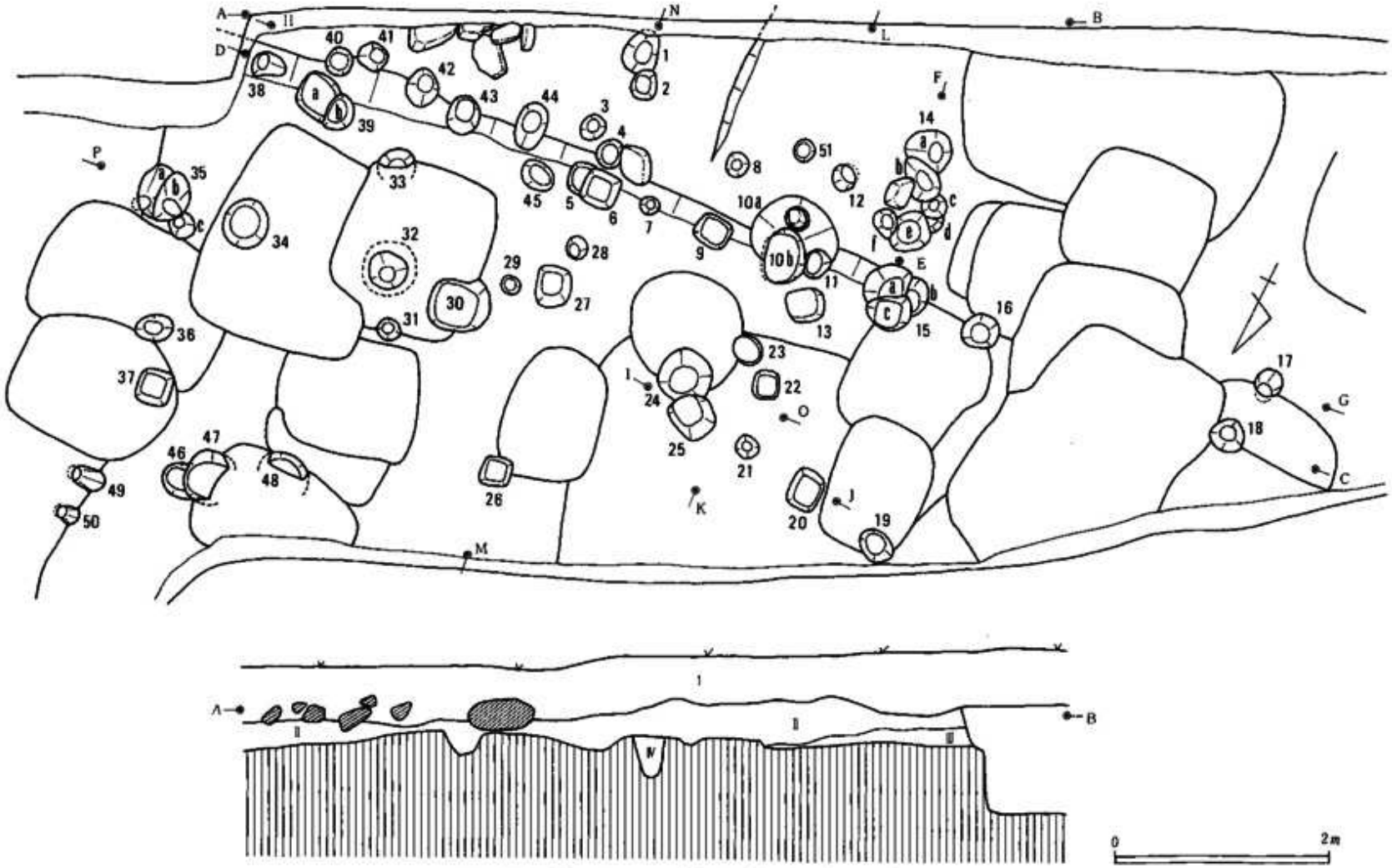
東西に長い隅丸長方形。かなり深い（第55図）。内耳土器片と土師質小皿片各1点が出土。

32号竪穴状遺構

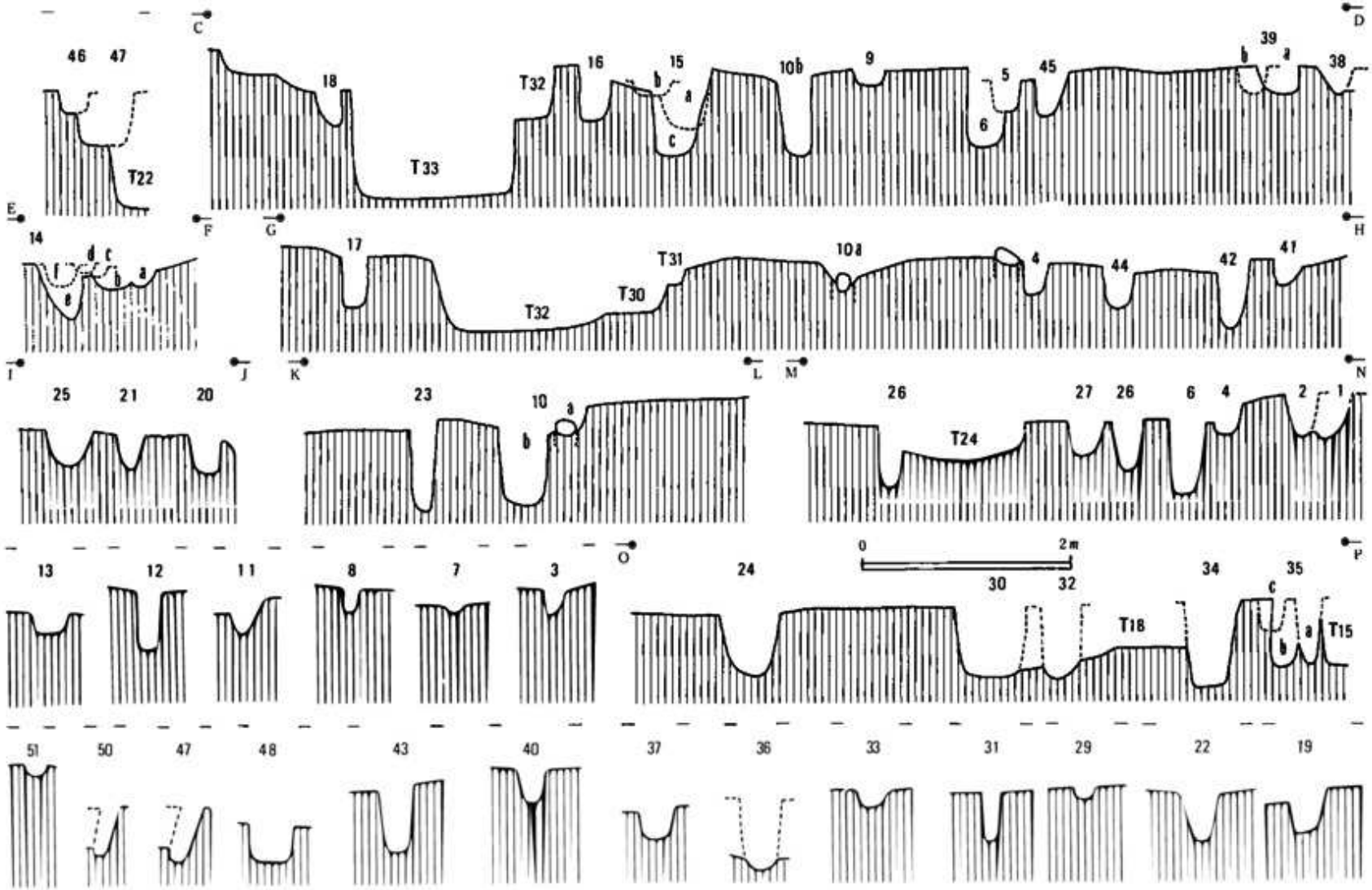
南北にやや長い隅丸方形で、各辺が丸い。かなり深い（第55図）。遺物はない。

33号竪穴状遺構

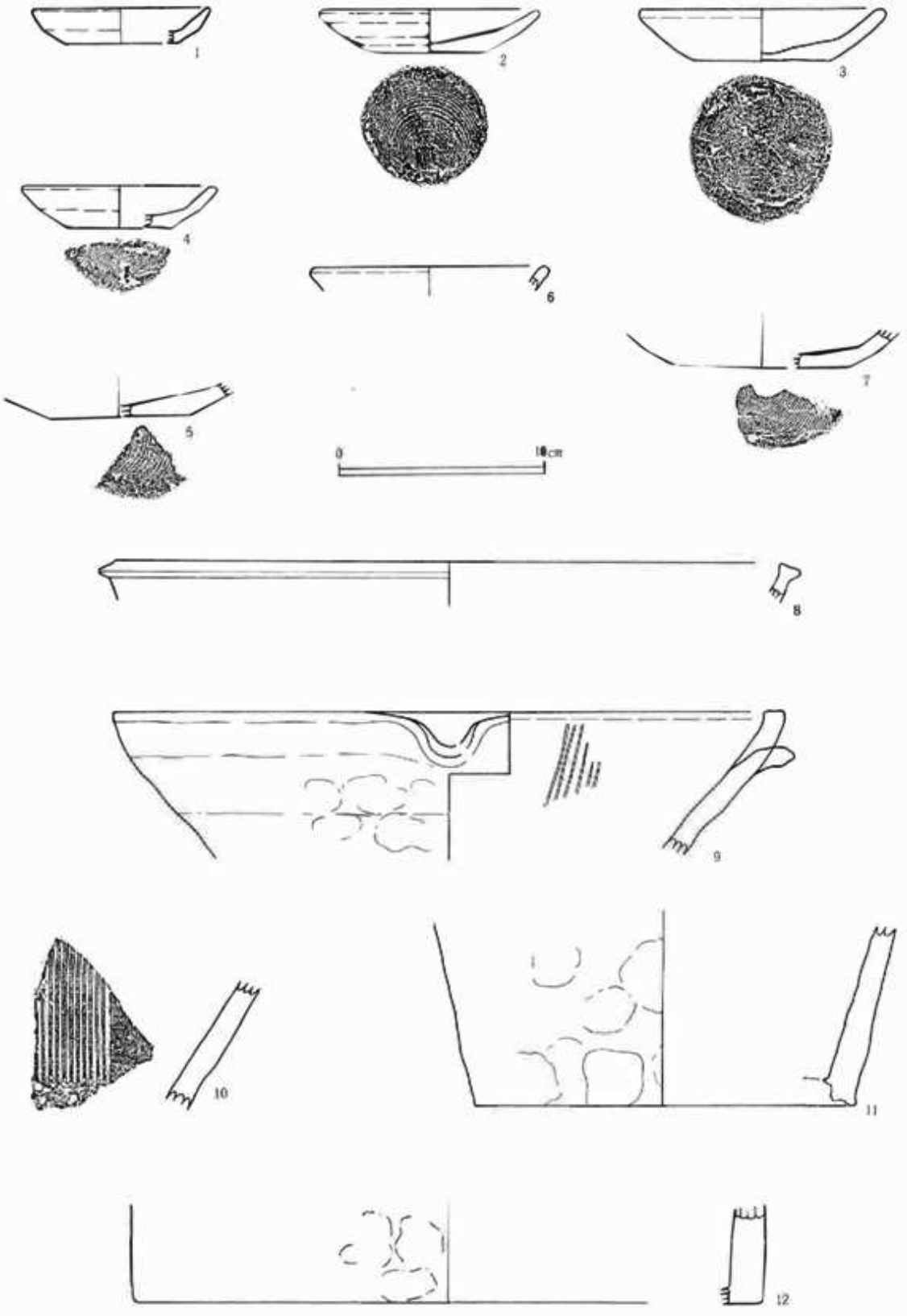
南北に長い隅丸長方形。非常に深い（第55図）。掘削工具痕が明瞭（図版5）。遺物なし。



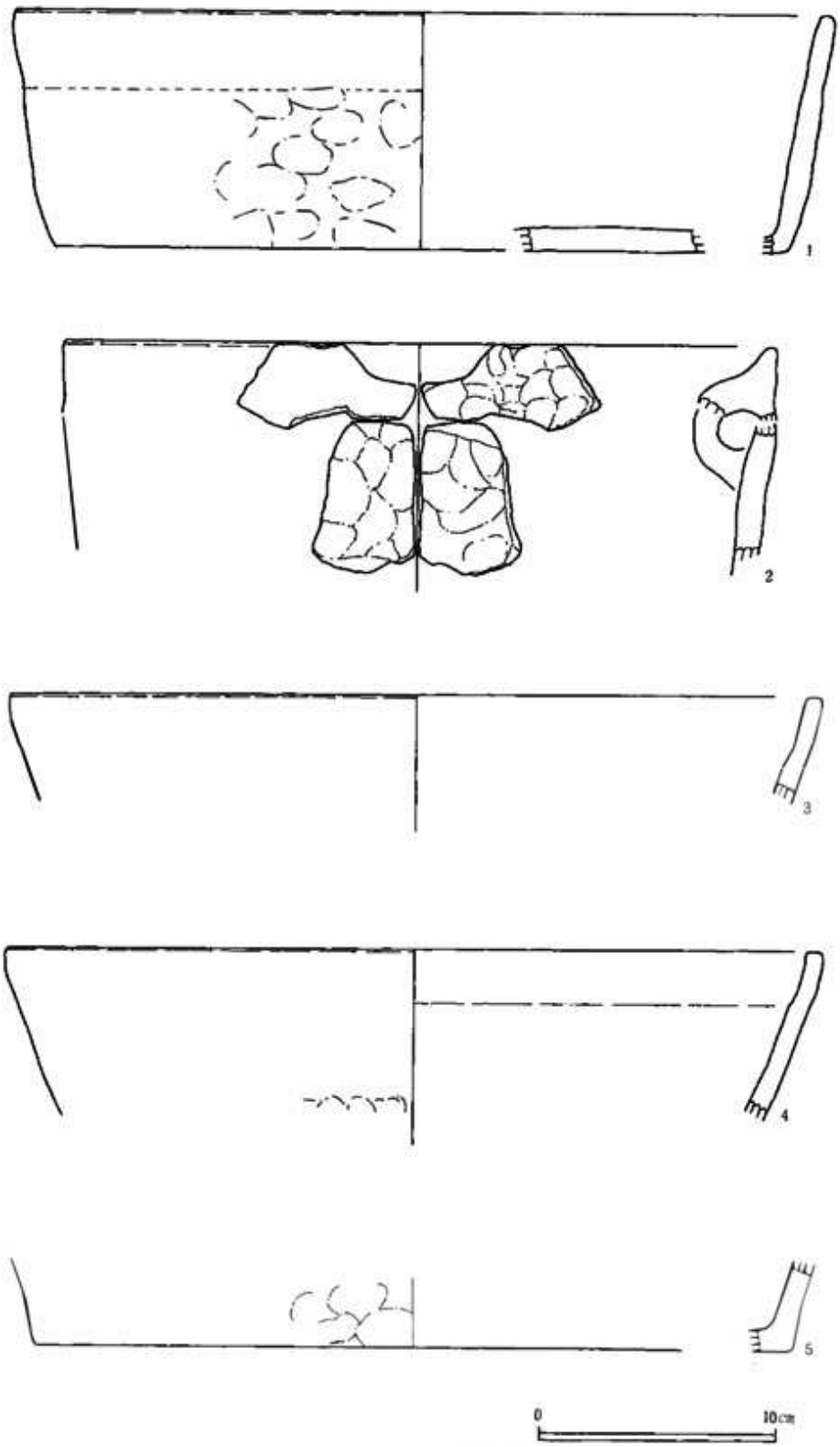
第65図　第３小ピット群（1）（水糸標高329m）



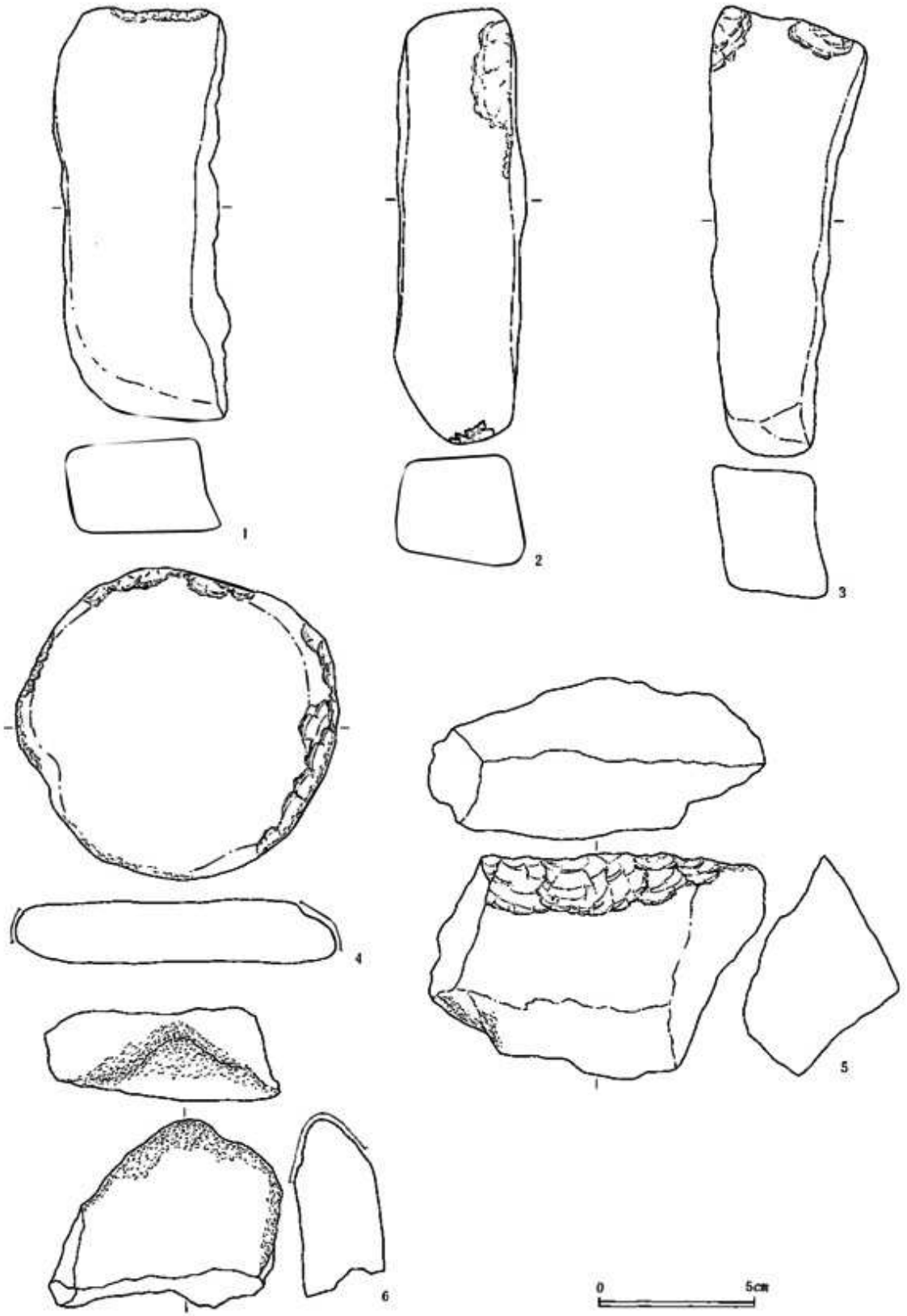
第66図　第３小ピット群 (2)（水糸標高329ｍ）



第67図　第３小ピット群出土土器　(1)



第68図　第３小ピット群出土土器　(2)



第69図　第3小ピット群出土石器

34号竪穴状遺構

形状不明。おそらく隅丸方形（第55図）。遺物は小皿片1点（第56図1）。

35号竪穴状遺構

おそらく隅丸方形で、かなり大型と思われる（第55図）。出土遺物は多い。土師質土器小皿、内耳土器、擂鉢が出土している。第56図2、3は土師質の小皿。3、4内耳土器である。

36号竪穴状遺構

残存部が非常に小範囲で形態がまったく不明（第55図）。遺物の出土もない。

37号竪穴状遺構

東・西辺の一部が確認できるのみで、形態は不明。覆土は、1～3㎝のロームブロックを多量に含む黒褐色粘質土層（第57図）。出土遺物はなかった。

38号竪穴状遺構

南北にやや長い隅丸方形。39号との関係は不明（第57図）。出土遺物は5点で、第58図1が土師質の小皿、白褐色緻密胎土で器高が低い。2は内耳土器で非常に薄く、特異な胎土。

39号竪穴状遺構

東西にやや長い隅丸方形で、西辺中央に突出部がある。突出部にロームブロックが残存。あるいは小ピットであったかもしれない（第57図）。遺物はなかった。

40号竪穴状遺構

ほぼ正方形の隅丸方形。2号に近似する。覆土は1㎝ほどのロームブロックを多量に含む暗褐色土層（第59図）。遺物は6点ある。第60図1～3は土師質小皿。3の底部に板状圧痕風なものがみられる。4、5は陶器質の鉢で、内外面に赤色塗料の塗布あり。

41号竪穴状遺構

北半がないが、隅丸方形らしい（第61図）。出土遺物は4点で、3点が溶融物の付着した土師質小皿。第62図3、4は土師質の小皿で、3が溶融物付着土器。

42号竪穴状遺構

隅丸方形だが南半は不明。第4小ピット群との関係は不明（第61図）。小皿出土（第62図2）。

43号竪穴状遺構

円形で、25号に似る（第61図）。片口の擂鉢片が出土。口縁内側は磨滅（第62図6）。

44号竪穴状遺構

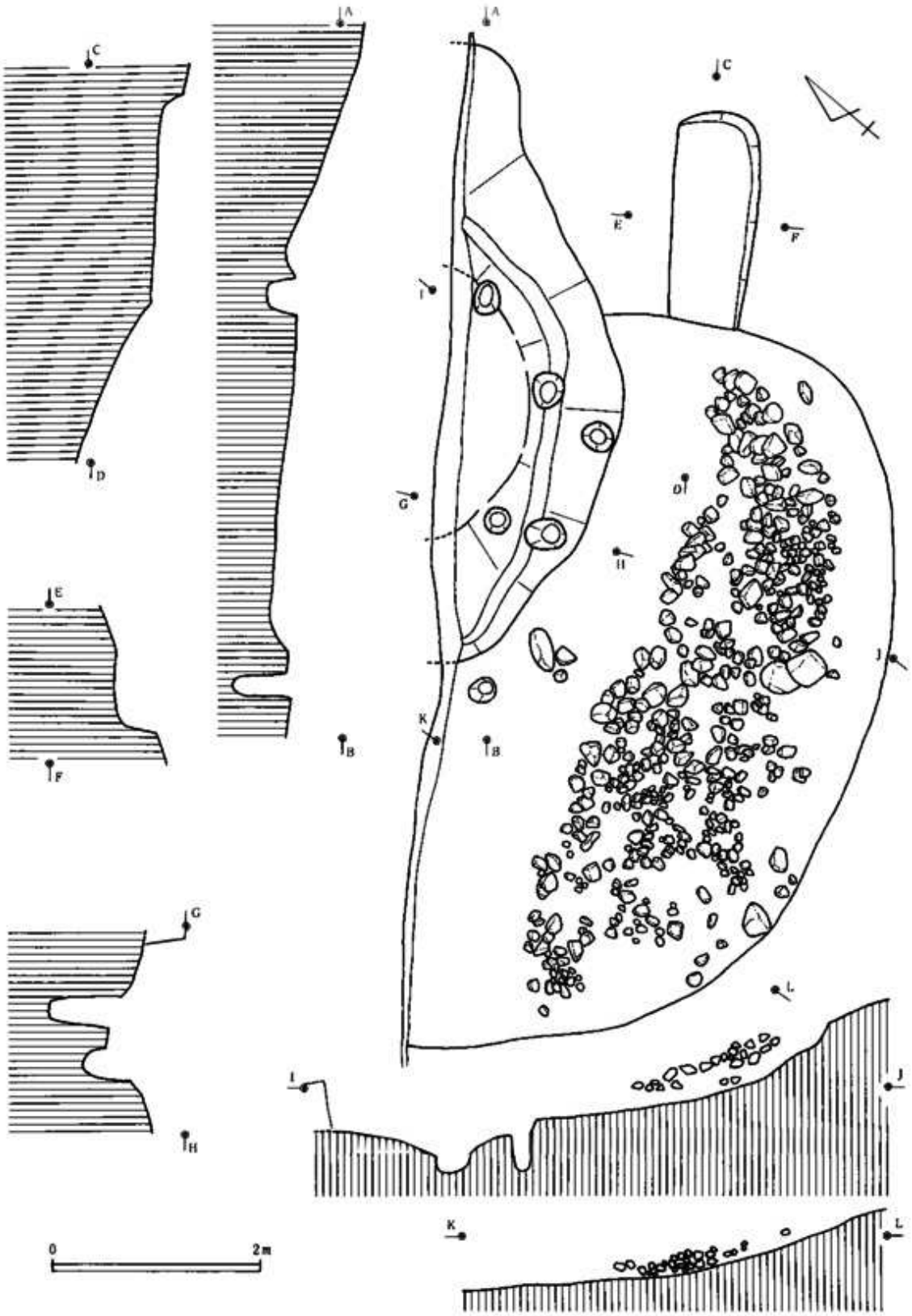
南北に長い隅丸方形（第61図）。土師質の小皿が出土（第62図1）。

第2小ピット群

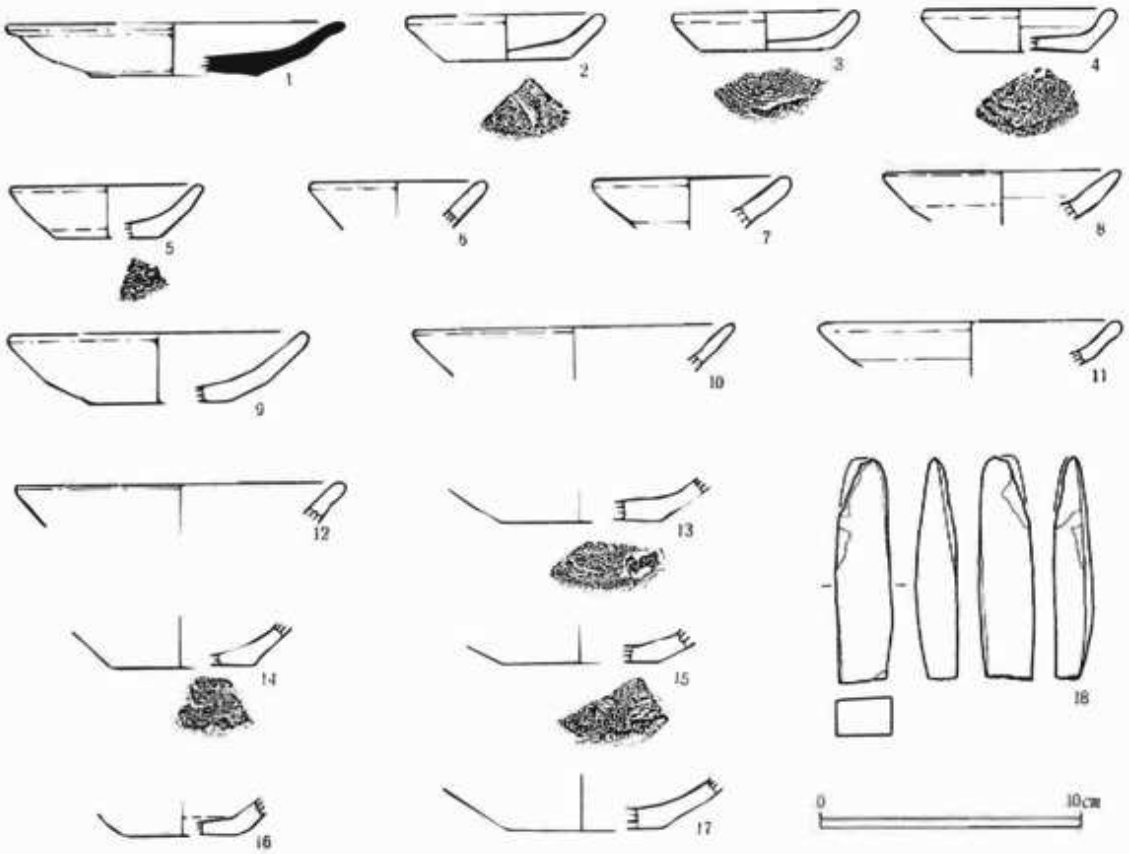
4号竪穴状遺構を囲む小ピット群。ほぼ東西方向の配列性が考えうる（第63図）。P2内から土師質の小皿2点出土。第64図1はほぼ完形。底部中央をおさえ。2も土師質小皿片。

第3小ピット群

61の小ピットよりなる。ただし、竪穴状遺構との切り合い関係からすれば、新旧のものがある。東西方向に北が低くなる段があり、これにそって配列するものが多い。また、これに直交する配列も考えうる。土層は、Ⅰ層耕作土層、Ⅱ層ロームブロックを含まない黒褐色粘質土層、



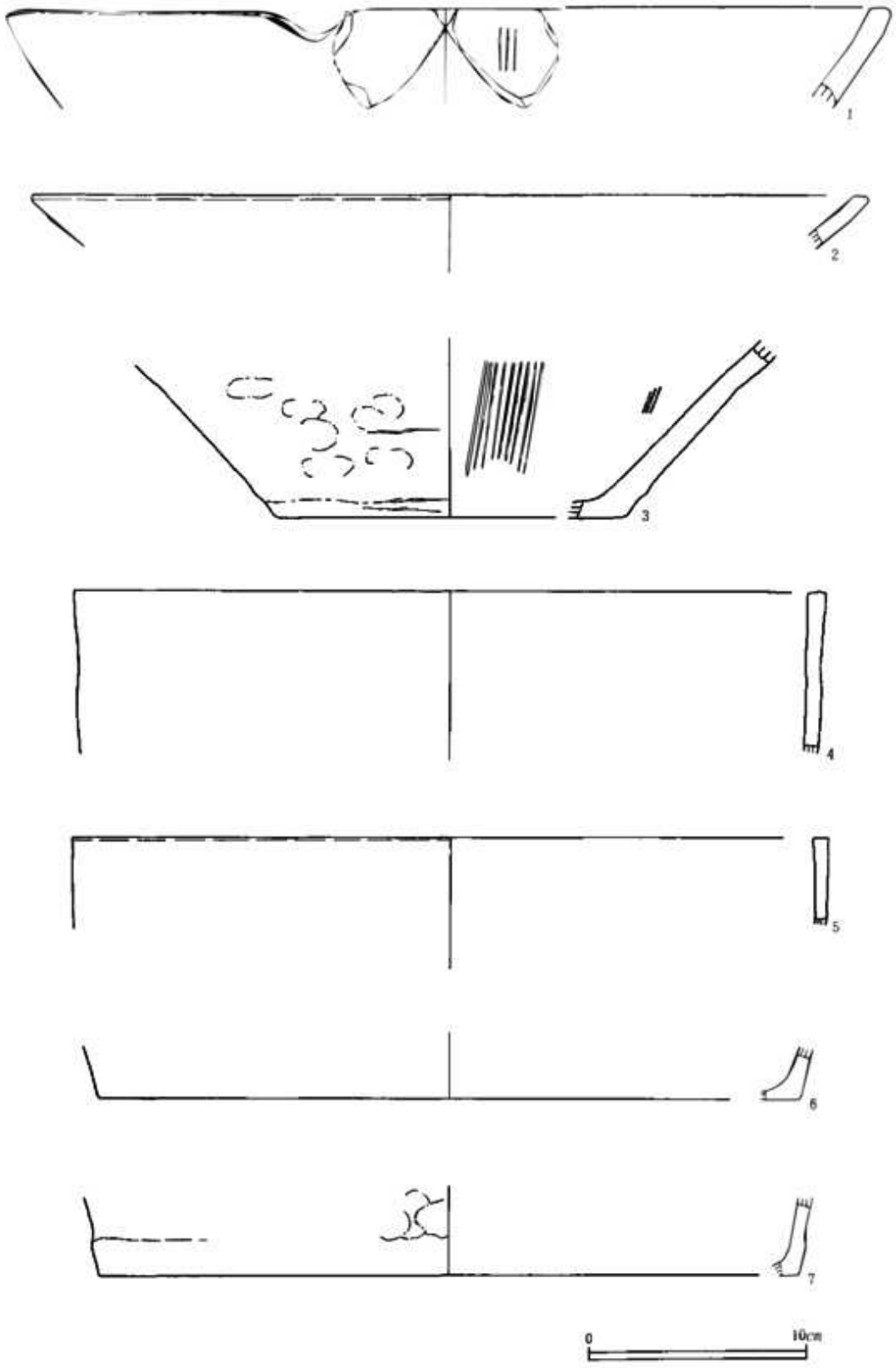
第70図　第５小ピット群（水糸標高329ｍ）



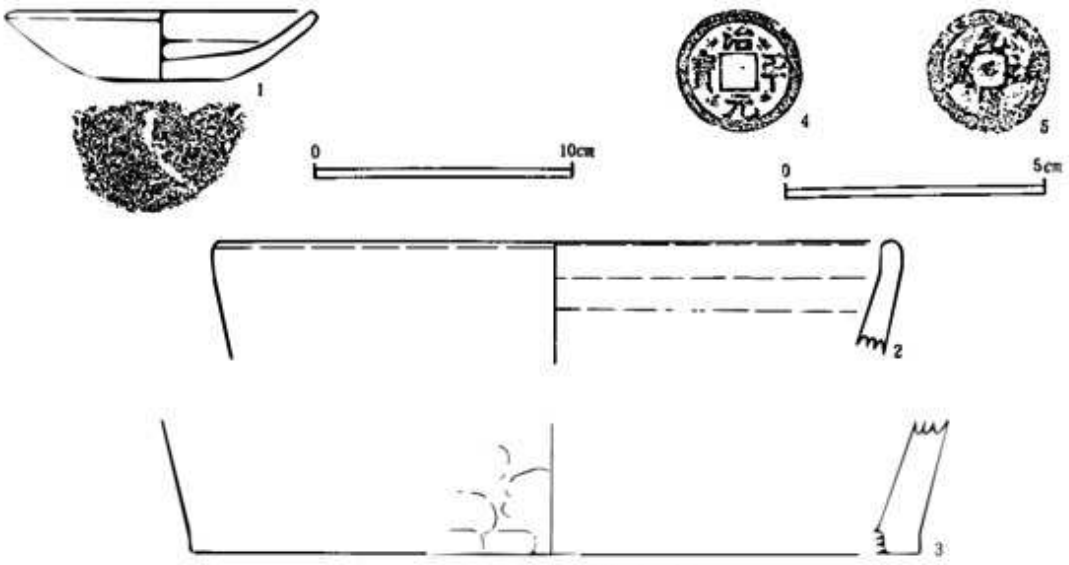
第71図　第５小ピット群出土遺物（1）

Ⅲ層３～５㎝のロームブロックを多量に含む黒褐色粘質土層、Ⅳ層Ｐ１の覆土でロームブロックを少量含む暗褐色粘質土層である。Ⅲ層は西に落ちる南北方向の段西側を埋めるようにしてあり、あるいは竪穴状遺構があったのかもしれない。東西方向の段より上は、ローム上面が平坦に踏みしめられている。Ⅱ層は多量の土器を包含しており、小ピットを覆うと思われる。セクション東側の醸はこの付近に多量に存在し、遺物分布と重なる。耕土の中に洗い出されたのだろう（第65、66図）。Ⅱ層中に含まれた遺物を中心に、第67～69図に示す。

第67図１は、Ｐ30内出土の溶融物付着土器。２は、Ｐ31内出土。他は全てⅡ層中出土。２は完形。３～７は、土師質の小皿。６は溶融物により変質したもの。７は内面にタール状黒色付着物あり。８は鉢であろう。土師質である。９、10は播鉢。９は片口で内外面ともに黒ずんでいる。11は、胎土や整形技法が内耳土器に似るが、底径が小さく、器壁が直立する。鉢か。内面にタール状物質付着。12は内耳土器。第68図は全て内耳土器である。内耳土器は一般に、口縁部が内外面ともロクロ回転によるらしいヨコナデと胴部外面の指頭痕がみられ、前者が後者の後に行われる。内面はヨコナデである。口縁部内面がややくぼみぎみである。外面は全面黒色である。本遺構のものは、底面に砂まきの技法がみられない。鍋形（１、２、５）と鉢形（３、４）とがある。第69図１～３は石錘、４は周縁部に敲打痕のある円盤形の石器、５、６が火打ち石である。１～４が凝灰岩、５、６は石英。



第72図　第５小ピット群出土遺物 (2)



第73図　中・近世遺物

第4小ピット群

4個の小ピットからなる。配列性は不明（第61図）。遺物もない。

第5小ピット群

発掘区の最西端にある。6個の小ピットが弧状のV字溝に関連するようにある。その南西側に礫の集積がみられる。集積はやや掘りくぼめられた半円形の地域にあり、底面からやや浮いて面をなしていた。集積は北面で東西方向に直線的に分布がとぎれる。そのとぎれ線と関連するかのようにその東方に長方形の掘り込みがあるが、この底面の傾斜と集積の傾斜とが一致しない。遺物は、こうした遺構群の全面に分布し、レベル的にも幅がかなりある。礫の集積部では、礫と同レベルから上方に多い。土器を含む土層は非常に硬く、各遺構の覆土も同様であった（第70図）。出土遺物が豊富で、陶器や土師質土器小皿、内耳土器、擂鉢、砥石、火打ち石などがある。第71図1は、志野焼の小皿である。非常に細片であるが、底部中央をのぞき全面に施釉がみられる。陶器では、鉄釉天目片1点がある。2～17は土師質小皿である。2、3が溶融物付着土器。18は砥石。第72図1～3は、擂鉢。4～7は内耳土器。4、5は、第3小ピット群のものと違い、胎土が硬く、器壁が薄く、口唇が平坦。底面に砂まきがみられる。他の破片も同様であり、きわだった差をみせる。火打ち石は、石英の破片である。

その他の中・近世遺物

第73図1は、土師質小皿で、A区東端部出土。2、3はB区南端部出土の内耳土器。2は、いわゆるほうろく形に近いものか。4、5は、A地区出土の北宋銭で、4が治元平宝、5が元祐通宝である。

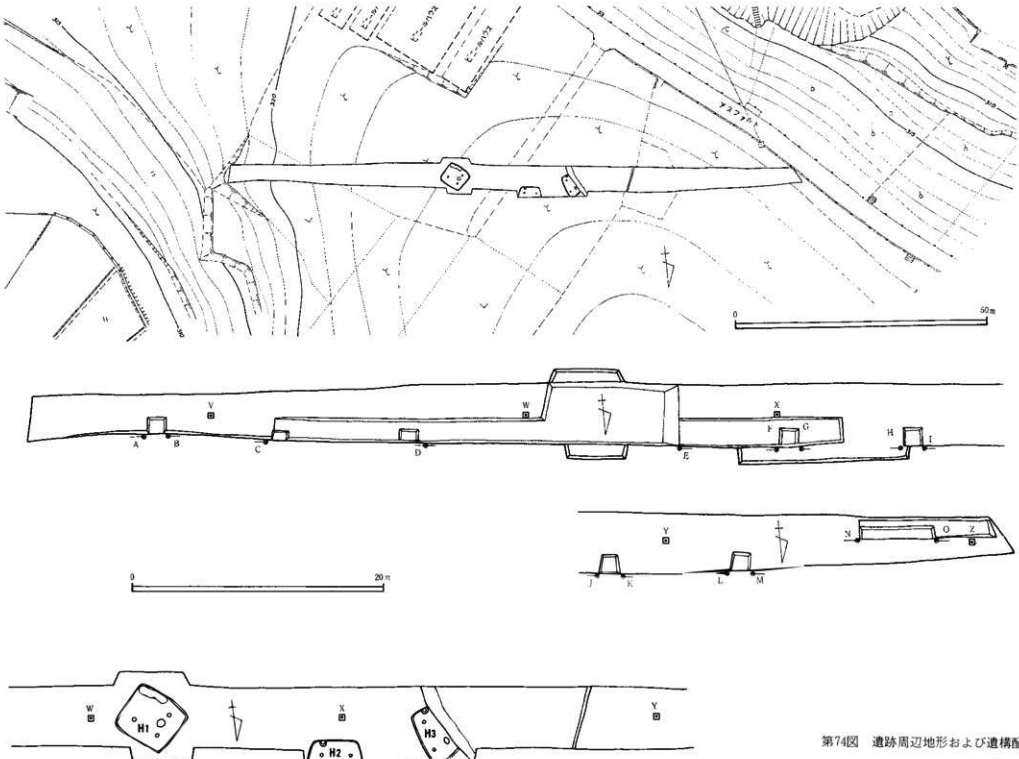
第4章　弥二郎遺跡の調査

第1節　調査の方法と経過

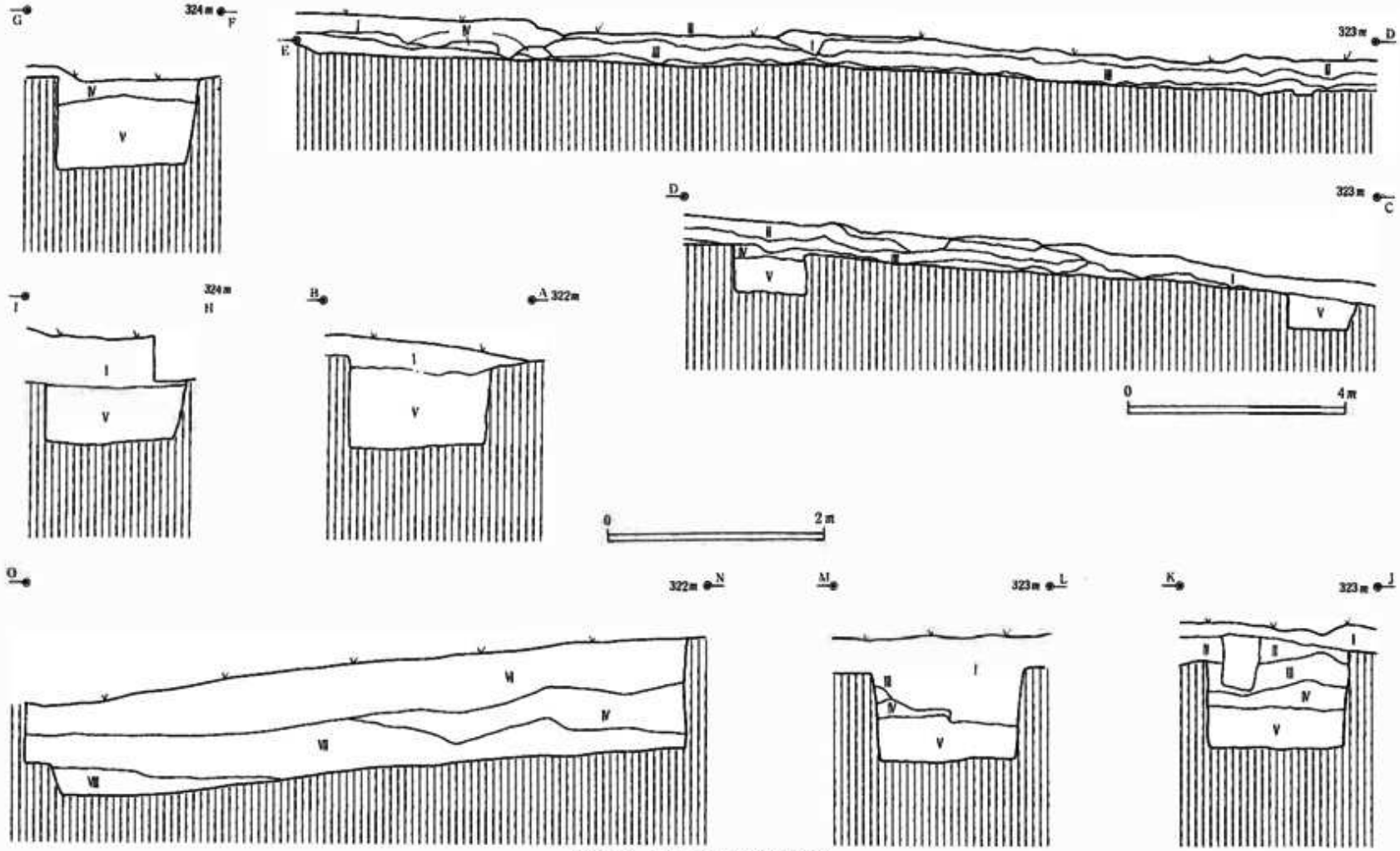
発掘調査は、水管埋設によって掘削される幅3～5mの部分ついて行った。関東農政局が設定した工事用のセンター杭を基準に、発掘区の中央に5m間隔で実測用基準杭を設定した。表土は、重機によって除去したが、非常に薄く、20～30cmであった。表土（耕作土）を除去した後に、基準杭を設定し、ジョレンによる遺構確認作業を行った。遺構は、発掘区の最も高い地域に集中しており、1回程度のジョレンによる遺構確認作業ですぐに確認することができた。発掘範囲が狭いので、遺構は、いずれかの部分が発掘区外にとび出していたが、関東農政局と協議し、工事用道路付設部分など工事に関連して借り上げた部分に限って発掘範囲を部分的に拡げ、なるべく遺構の全体を把握できるように努めた。その結果、3軒ある住居址のうち、2軒はほぼ完掘することができた。一方、3号住居址から西側の部分については、土層がかなり攪乱を受けており、ゴボウの作付によると思われる、深く細長い攪乱溝を多数確認できた。また、3号住居址のすぐ西側の部分は、かなり古い段階ではあるが、深掘されており、遺構があったとしても、完全に破壊されているものと思われる。1号住居址の覆土から先土器時代の石器を確認したので周辺を掘り下げた。黒色帯を掘りぬき、かなり広範囲に深掘したが、剥片1片だに確認できなかった（第74図）。なお、図面には示さなかったが、発掘区西端において、発掘区の南側が扇状に工事用道路で削られることになったが、調査の結果、なにもないことを確認した。出土遺物、遺構は、弥生時代後期後半と思われる住居址3軒、先土器時代石器1点の他、縄文時代前期末、中期中葉、後葉の土器や石器、弥生時代後期後半、中・近世の土器が出土している。

第2節　層　　序

土層断面は、発掘区北壁で観察し、発掘区全域をカバーできるように作図した（第75図）。セクションポイントは、第74図中に示してある。第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層は明褐色ローム層でソフトローム層にあたる。第Ⅲ層はローム層中の黒色帯、第Ⅳ層は白褐色ローム層で軟質である。黒色帯はこの層にくらべて硬質で、部分的にブロック状に分布する場合もある。Ⅴ層はハードローム層、Ⅵ層は暗褐色粘質土層で発掘区西端部のみに分布し、ハードローム層の上にあって縄文土器を含み、非常に硬質である。Ⅶ層も発掘区西端部のみにみられる土層で、黒褐色粘質土層で、非常に粘土質で硬質である。ハードローム層下位の自然土層である。発掘区西端部では、その下位にⅧ層くされ礫層を確認した。くされ礫層の層理面は、非常に平坦であった。東端部では確認できなかったが、くされ礫層が西端から東端へ平坦に続くとしても、発掘範囲より下位に露出するはずである。しかし、東側では全面にローム層が覆い、地形の傾斜に

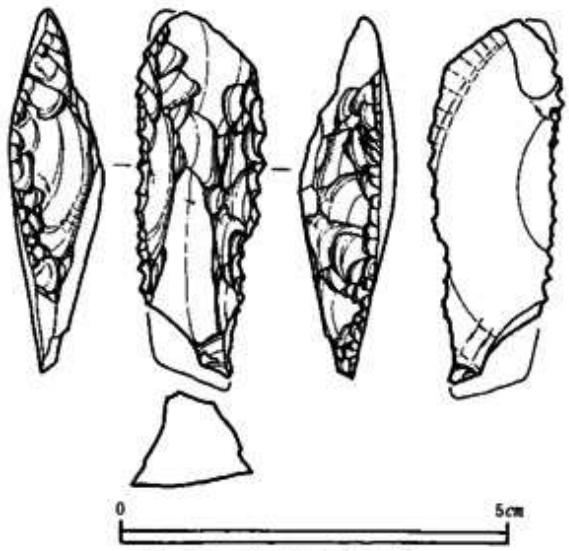


第74図　遺跡周辺地形および遺構配置図



第75図　弥二郎遺跡土層図

て黒色帯の傾斜がみられる。したがって、本台地西側では、ローム層を含めた台地の開析が、東側では開析の後のローム層の堆積が考えられる。西側斜面の形成時期が西側のそれにくらべて格段に新しく、その段階には台地西側のみに選択的に開析作用が働いたことになる。これは、西側斜面が急で、東側がゆるやかである点に対応する。こうしたありかたは、横畑遺跡のありかたと近似している。



第76図　先土器時代石器

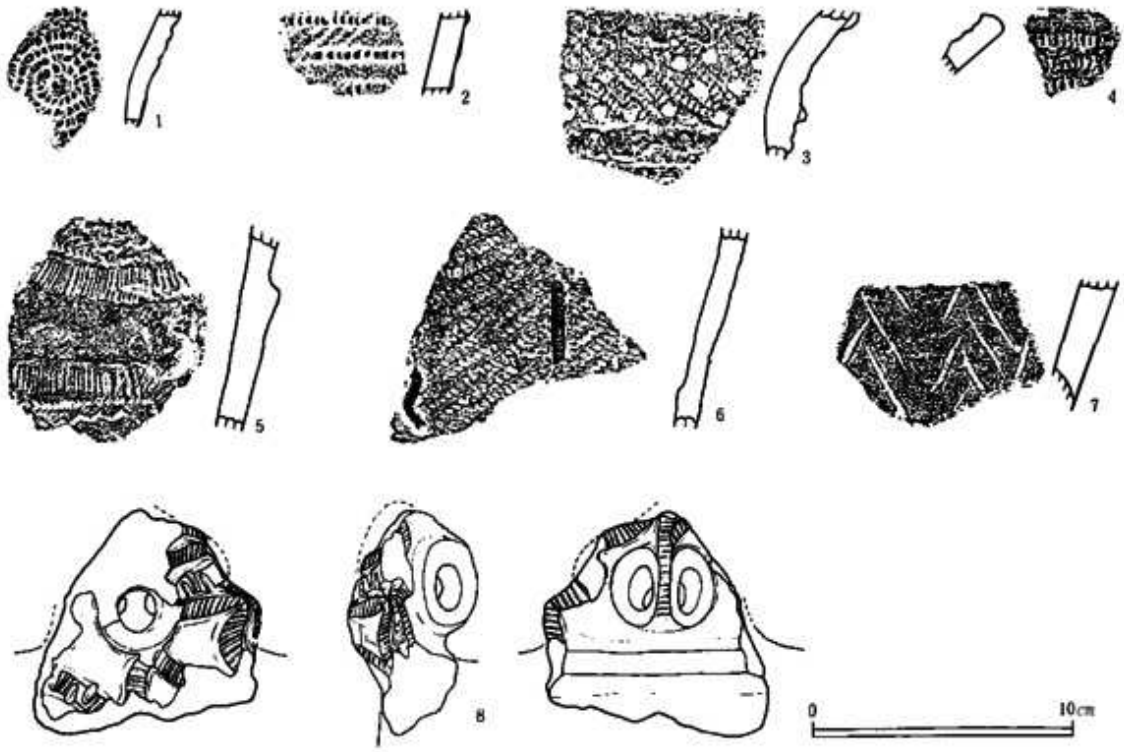
第3節　遺構と遺物

1．先土器時代の遺物

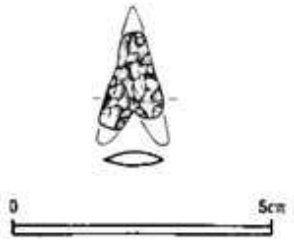
先土器時代の遺物としては、1号住居址覆土から出土した、ナイフ形石器1点のみである。いわゆる切出形をしたものである。横剝ぎの部厚い剝片を素材にしている。素材正面には、主剝離面と同方向、逆方向の大規模な剝離がみられる。ブランティングは、素材の剝離方向と直交する方向に行われている。裏面のみからなされるが、非常に大規模で深いものと、その剝離の後にその剝離にそってなされた小規模なものとがある。後者は鋸歯状の縁部を形成している。ところで、石器中央の最も高い部分から先端側に、両縁部から中心にむかって平坦な小規模剝離が何枚かみられる。これらは、ブランティングに切られており、素材時のものか、整形時のものか不明である。その部位が先端側にかぎられる点からして、整形時の可能性の方が高いかもしれない。先端と末端を欠損している。黒曜石製。

2．縄文時代の遺物

第77図1～3は、前期末の土器である。1は、口縁部がラッパ状に開く深鉢の胴部破片で、細い隆帯の上に半截竹管による押し引き文をほどこし、同心円状の文様を構成している。2は、縄文地文の上に細い隆帯を3本貼付し、半截竹管による押し引き文を施している。3は、縄文地文を太い隆帯で上下を画し、円形の竹管を押しつけた列点文を縄文帯の中にほどこしている。頸部に沈線がめぐる。4、5は、中期中葉の土器である。4は浅鉢の口縁部で、細く先端の丸い工具で押し引きの沈線文を内面にほどこしている。5は、いわゆる「キャタピラ文」のほどこされたもので、その上下を先端三角形の細い工具による押し引き文で画している。さらにその外側に、波状沈線が並行する。キャタピラ文の間はややもりあがる。6、7は中期後葉の土器である。6は、縄文地文に直線状、波状の貼付文を付している。7は、いわゆる「ハの字文」をほどこしたものである。8は、中期中葉の把手である。



第77図　縄文時代土器



第78図　縄文時代石器（1）

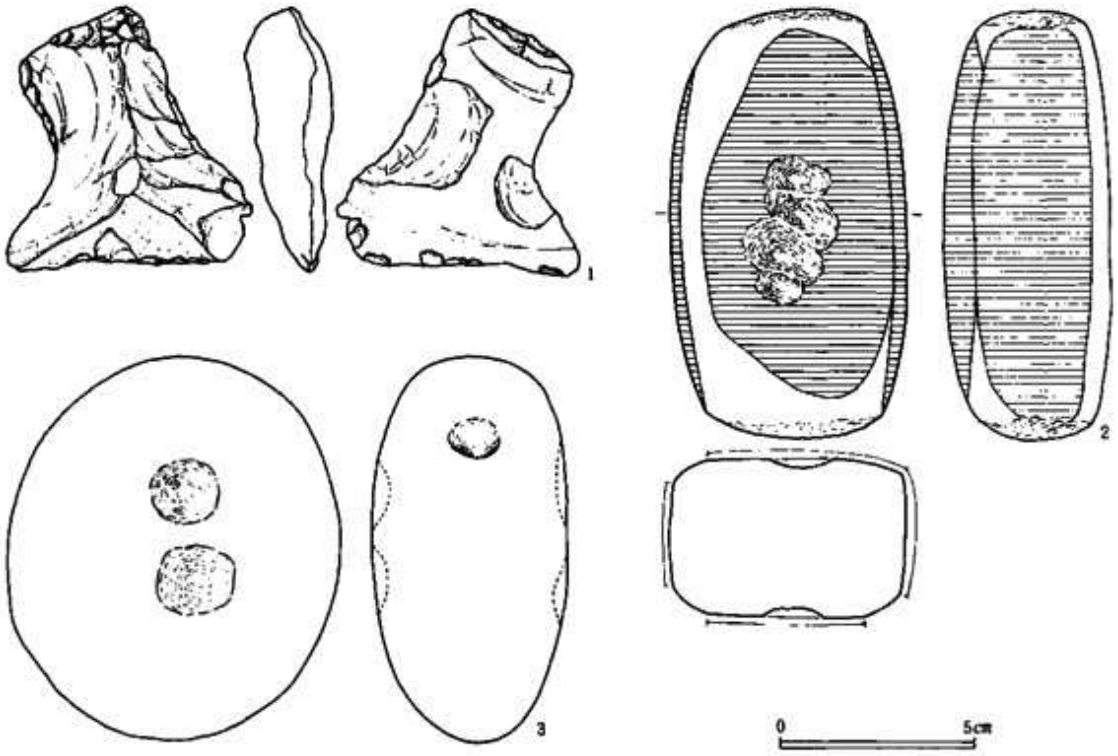
第78図は、縄文時代の凹基無茎鏃である。黒曜石製。第79図1は、石匙である。頁岩製。3は、クボミ石。表裏にそれぞれ2孔、側面に1孔がある。4は、クボミ石とスリ石、タタキ石の合体したもの。表裏に4孔ずつがみられる。またスリ面は4面みられる。タタキ面は上下にみられる。いずれも安山岩製。

3．弥生時代の遺構と遺物

1号住居址

発掘区の最も高い地域にまとまる住居址群のうち最東端のもの。やや北西－南東方向に長い隅丸方形のプラン。ほとんど耕作で削られており、壁の立ち上りは5～10cm程度であった。柱穴3本と炉址を確認。柱穴のもう1本は、動物生活痕と思われるトンネル状の穴によって破壊されている。炉は、北西よりの2本の柱穴の間に設置されている。20cmほどボール状に掘り、その中に壺胴部の大型破片を埋設している。土器片は床面と同一面から3cmほどが出るように、また上端が水平にそろうように埋設されている。床面より出る部分は二次焼成を受け、黒くなっていた。床面は炉の周辺に若干残るのみであった。出土遺物は覆土中にはなく、動物生活痕の中に落ち込んでいるものがほとんどであった（第80図）。

第81図は壺形土器口縁部。口唇に付文を3個つけている。内面に細かな縄文がほどこされて



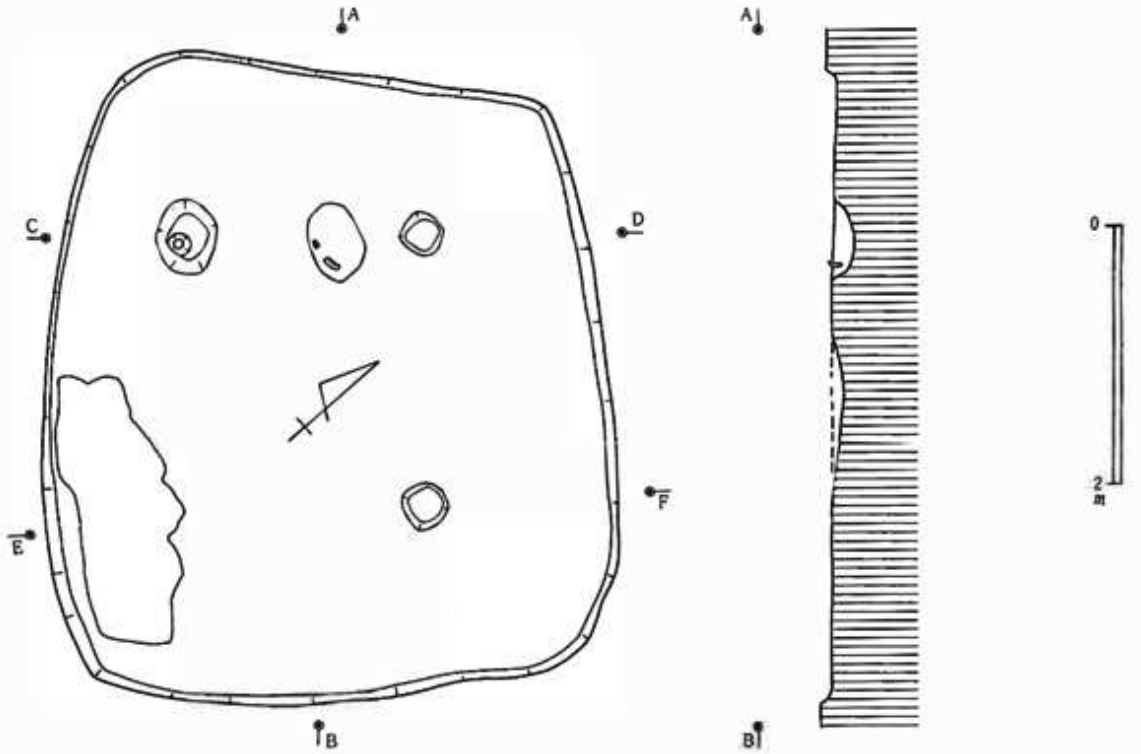
第79図　縄文時代石器 (2)

いる。2はその拓本。3は小型の壺形土器である。内外面ともハケ目がみられ、底部外面に木葉痕がある。4は台付甕形土器の台部。5は土錘と思われる。

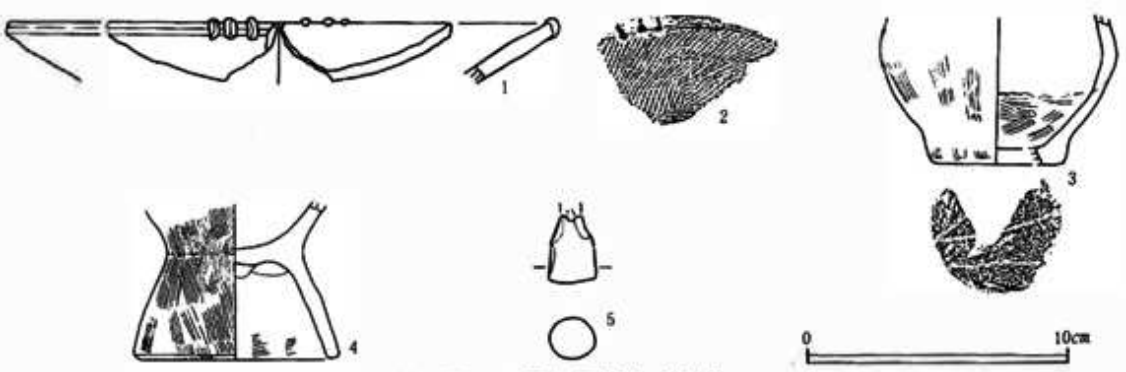
2号住居址

北側半分が発掘区外にある。この部分に柱穴2本と炉址があるものと思われる。東・西辺が弓状にふくらみ隅丸方形のプランらしい。南東隅近くにピットがある。土層は、Ⅰ層耕作土層、Ⅱ層暗褐色粘質土層、Ⅲ層木炭片を少量含む黒褐色粘質土層、Ⅳ層木炭片・焼土塊を多量に含む黒色粘質土層である。Ⅳ層のありかたからして、火災住居である可能性が強い。出土遺物は、三軒の住居址の中で最も豊富である。南東隅にほとんどが分布し、ピット内に落ち込んだ状態で出土したもの（第83図2）もあった。ピット内にも焼土がレンズ状に分布していた（第82図）。

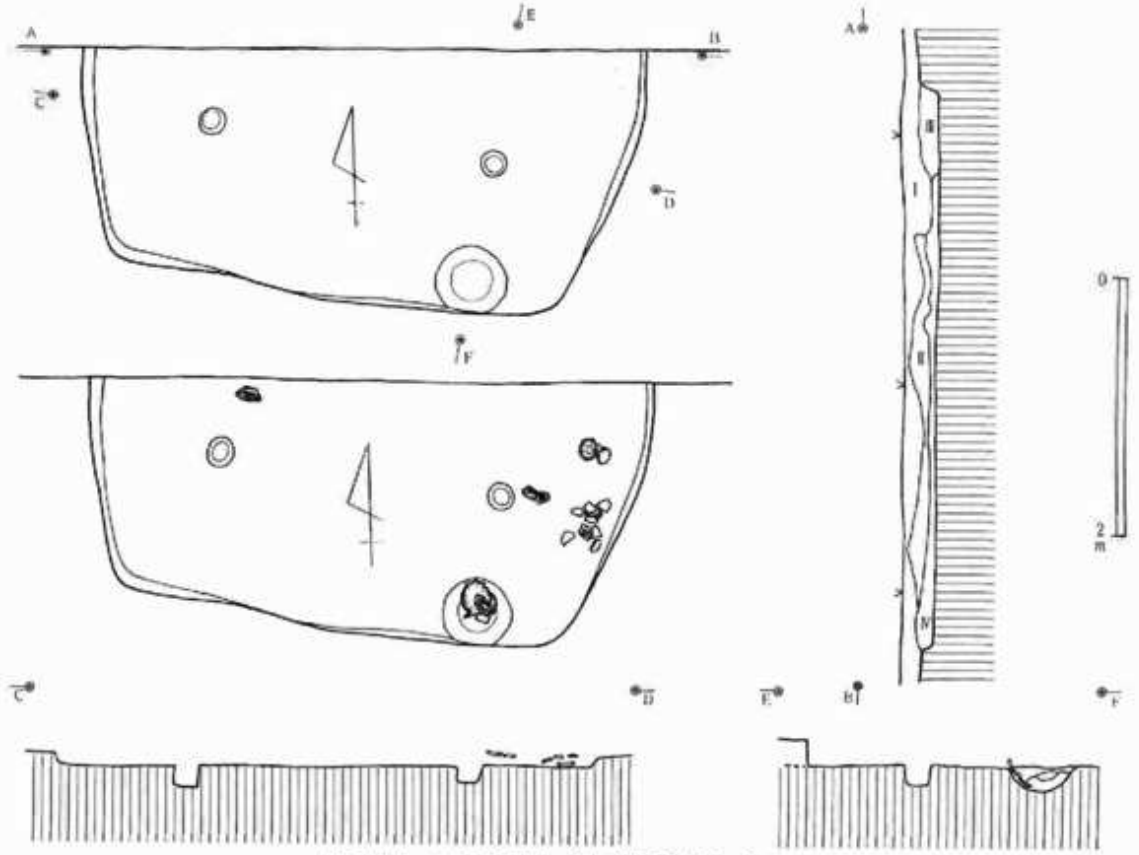
出土遺物は、壺形土器と台付甕形土器である。第83図1は、壺形土器である。胴部を欠くが、底および肩部以上の残りはよい。内外面ともハケ目調整。折り返し口縁で、断面形は四角である。胎土が粗い。2は、台付甕形土器である。外面ハケ目調整。内面はハケ目調整の後、横方向の細いヘラ状工具による調整がなされ、器面が非常になめらかである。胎土が非常に硬質で緻密。3～5は、台付甕形土器の台部である。3は、外面ハケめ調整の後ナデ調整。内面はナデ調整。4、5は内外面ともハケ目調整。3がピット内出土、4、5は底面を上にむけてよりそうようにして出土した。6は甕形土器である。外面ハケ目調整。内面ヘラ調整で、2同様内面が非常になめらかである。胎土も硬質で緻密。



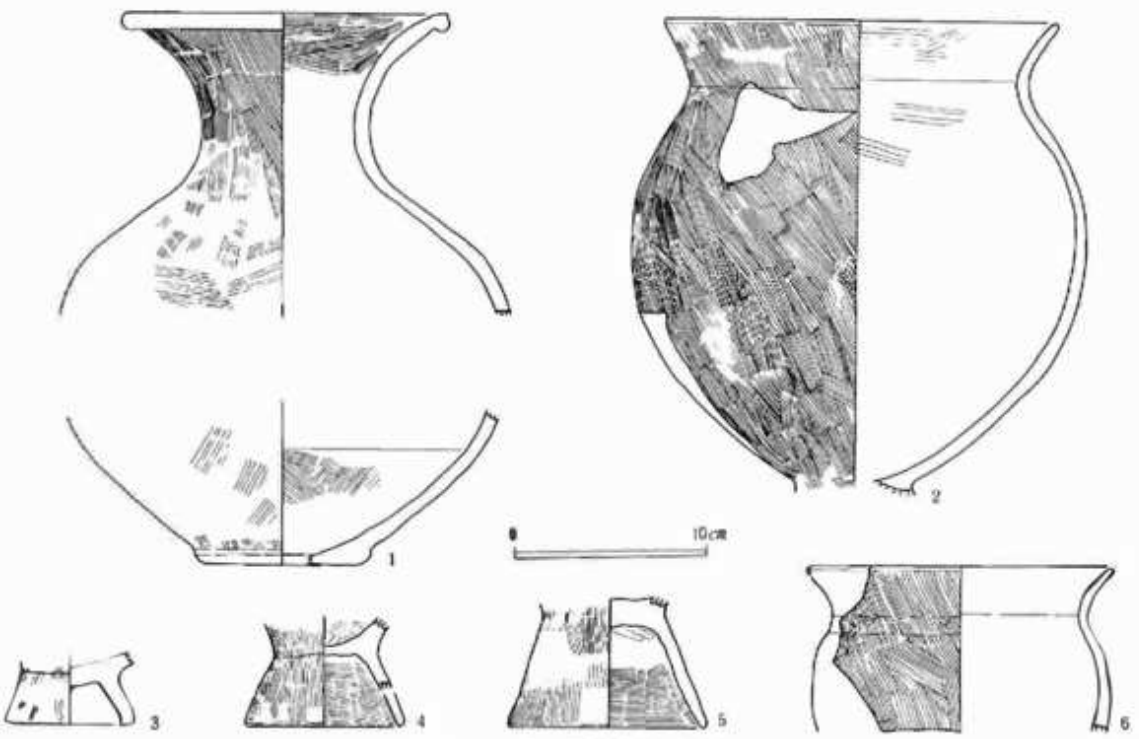
第80図　1号住居址（水糸標高323.5m）



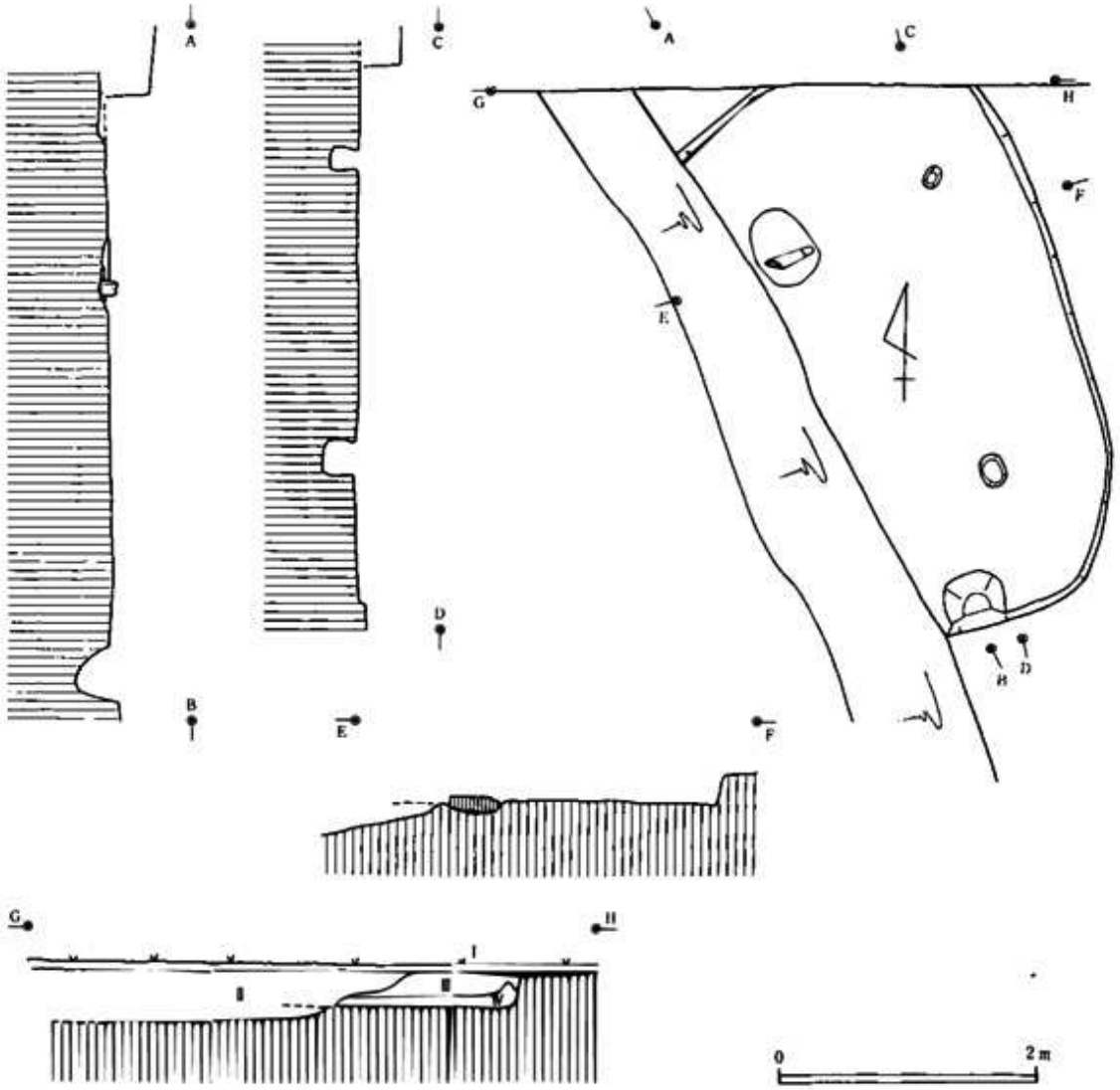
第81図　1号住居址出土遺物



第82図　2号住居址（水糸標高324m）



第83図　2号住居址出土土器



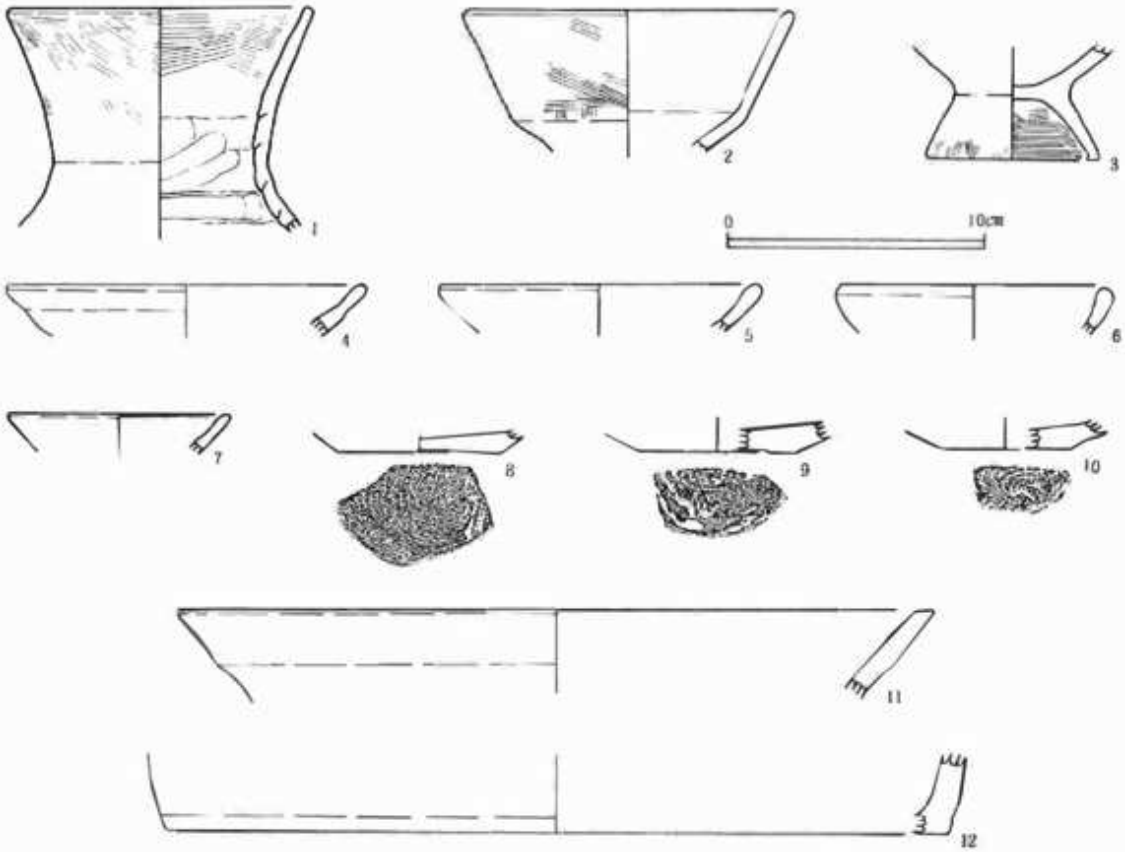
第84図　3号住居址（水糸標高324m）

3号住居址

北部および西部を攪乱によって破壊されている。径の小さい柱穴2本、炉址、ピットがある。炉址は、四角柱の棒状の石を横にして埋設し、まくら石としているものである。浅い皿状に掘りくぼめた部分の南側に、住居址東辺と直交する方向で設置している。まくら石北側、くぼみの底部に焼土がみられた。ピットは、2号住居址とほぼ同じ、南東隅よりにある。半円形のプランである。住居址のプランは、隅丸方形であろう。土層は、Ⅰ層耕作土層、Ⅱ層木炭片を少量含む暗褐色粘質土層、Ⅲ層木炭片、焼土塊を多量に含む黒色粘質土層である。Ⅲ層のありかたからして、火災住居址である可能性がある（第54図）。出土遺物は、ピット内より、台付甕形土器の細片が少量出土したのみであった。

その他の弥生時代の遺物

第85図1は、弥生時代後期の壺形土器である。内外面ともハケ目調整の後、ヘラミガキ。内



第85図　弥生時代および中・近世遺物

面の頸部以下に輪積みの痕跡が明瞭。胎土は非常に硬質で緻密。2は、弥生時代後期の台付甕形土器台部。台部内外面ともハケ目調整。台部内面以外は全てヘラミガキのうえ赤色塗料を塗布している。

4．中・近世の遺物

第85図3～12は、中・近世の土器である。1～10は土師質土器の小皿である。4～7が口縁部で、4、7の口縁が口唇にむかってやや薄くなるかほぼ同じ厚さなのに対し、5、6はかなり口唇部付近で肥厚する。肥厚は、内面にむかってなされ、口縁内側に浅い段ができるような状況になる。しかし、いずれも口縁部は厚く作られている。5、7の胎土は、白褐色で緻密。4、6は黄褐色でやや粗い。8～10は土師質土器の小皿の底部である。いずれもかなり厚い。胎土はいずれも粗く、8が黄褐色、9が白褐色、10が黒褐色を呈する。11は擂鉢の口縁部破片である。外面ロクロ整形の後、底部側を指頭によるおさえがみられる。内面は、非常に平滑な面がアバタ状に剝落して、非常に荒れた状態になっている。口唇には、浅い一条の沈線がめぐるらしい。口唇端は、外側は鋭く尖る。胎土は、赤みの強い黄褐色で、赤色粒子を含みかなり緻密。12は、内耳土器である。外面はロクロ整形のままで、指頭痕がみられない。内面はやや荒れている。底面に砂まきはない。赤褐色の胎土で、やや粗い。

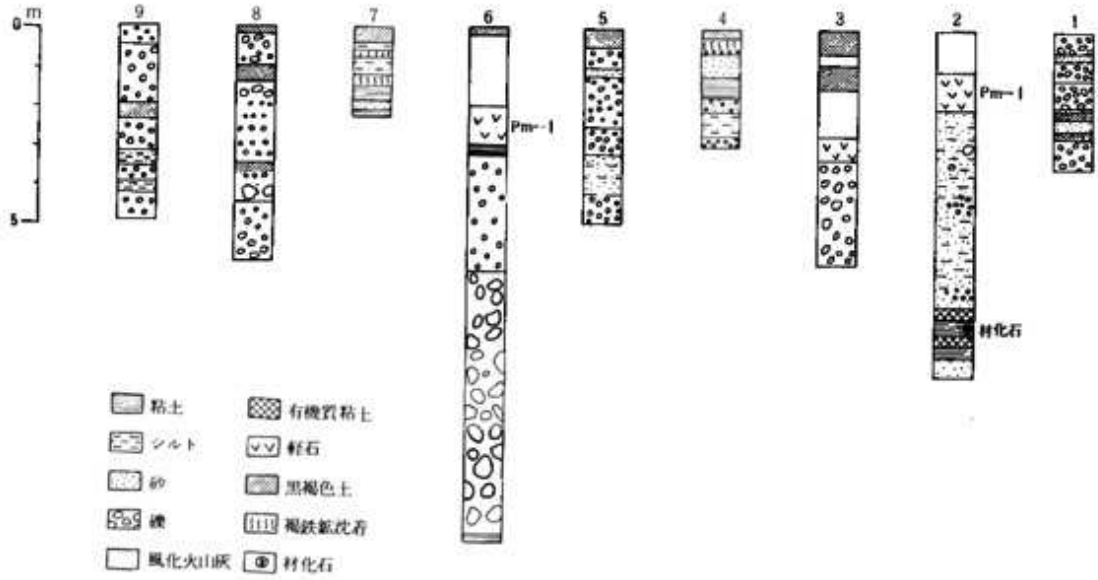
第５章　横畑遺跡周辺の地形と地質

１．概　要

本遺跡は甲府盆地南東、御坂山地前縁の曽根丘陵上の山地寄りに位置する。曽根丘陵は、その北部で北東－南西方向の断層をともなった撓曲崖をもって甲府盆地の沖積低地と接し、笛吹川はこの崖線と平行して西流する。曽根丘陵を開析する笛吹川の支流は、西から浅利川・七覚川・滝戸川・間門川・芋沢川・境川などで、それぞれ北西－南東方向の樹枝状水系を呈する。これら小河川は、御坂山地の第三系から流れ出し、丘陵上を開析して低位段丘を形成し、沖積低地への出口には小規模の扇状地を形成して笛吹川に合流する。

第86図　土層柱状図作成地点位置図
（国土地理院１／25000地形図、市川大門図幅使用）

曽根丘陵では、第三系御坂層群を不整合におおって更新統の曽根層群が堆積する。曽根層群は主として礫層からなり、黒富士火砕流（三村，1967）・韮崎岩屑流（三村ほか，1982）を挟在し、黒富士火砕流の直上にはシルト層・珪藻土層が堆積する。曽根層群を不整合にお



第87図　土層柱状図

おって御岳火山第一軽石層（Pm－Ⅰ：小林ほか，1967）を最下部にもつ褐色風化火山が約３ｍの厚さで堆積する。

２．遺跡周辺の微地形と地質

本遺跡は、標高320～330ｍの台地上に位置する。この付近の台地は開析が複雑に進んでおり、あまり広い平坦面は存在しない。最も高い面は遺跡北方の御崎神社の位置する標高約330ｍの平坦面である。Ａ区の北限の道路から北側に広がる畑地は一段低い平坦面である。本遺跡Ａ区はこの平坦面と御坂山地との間の南北性尾根状斜面の下部に位置している。Ｂ区は平坦面から東側の小河川にゆるやかに傾斜する斜面上に位置している。遺跡西方の法乗寺は本遺跡と同じ面上にあり、この間に存在する40ｍ幅の谷地形は仲川の旧流路であったと考えられる。大鳥居地域の大部分は仲川の開析面から構成される。伝竜院が位置する面は本遺跡と同一面である。

遺跡周辺では曽根層群の礫層の発達が良好である。Ａ区の西方では中～大礫の赤褐色くされ礫層が配管溝にそって厚さ約10ｍ以上観察される。Ｂ区東方では礫層中に材化石を含む青灰色粘土層がレンズ状に挟在される。礫層の一部は粘土化が進んで“くされ礫”となっている。礫層の上にPm－Ⅰが不整合に分布する。Ａ区からＢ区東方にかけてのPm－Ⅰは厚さ約１ｍの黄褐色の粘土化した軽石層であり、ゆるやかに東傾斜する。Pm－Ⅰは、本遺跡の位置する段丘面以上の面には分布するが、より低位の段丘面では分布しない。Pm－Ⅰより上位には約２ｍの風化火山灰層が堆積し、下位から褐色風化火山灰層、暗色帯、暗褐色風化火山層、暗褐色～黒褐色土層に大別される。中道町上野原遺跡では、2.2～2.1万年前に降灰した姶良Tn火山灰（ＡＴ：町田・新井，1976）の火山ガラスが暗色帯最上部からその上位の暗褐色風化火山灰層下部にかけて濃集している（河西，1987）。しかし曽根丘陵では、縄文時代以降の遺構が暗色帯より下位の火山灰層まで掘り込んでいる事例がある。本遺跡でも同様に縄文時代の住居址が褐色硬質火山灰層を掘り込んでいる。

現河床下の谷埋め堆積物は、中礫を主体とする粗粒堆積物が多い。礫は、御坂山地の第三系に由来すると考えられる緑灰色の凝灰岩・火山岩類から主として構成される。粘土～砂質粘土などの細粒堆積物は、第４・７地点などで観察される。両者とも上流域の面積が狭少である。これら以外の御坂山地内に広い流域面積をもつ河川の谷埋め堆積物は粗粒である。

以下に遺跡周辺の地形発達について若干述べる。

曽根層群堆積初期は河川堆積の場で氾濫原的環境にあったと考えられる。Brunhes正磁極期のある時期黒富士火山の大噴火によって約15～30ｍの厚さの黒富士火砕流堆積物が流下し甲府盆地を瞬時に埋めた。火砕流の分布の周縁部には局所的な湖沼的堆積環境が形成され珪藻土を含む細粒堆積物が堆積した。湖沼は堆積物の蓄積とともに一時的な泥炭地的環境を経て浅化していった。さらに御坂山地から大量に供給される礫によって再び扇状地が形成されていったと考えられる。韮崎岩屑流が八ケ岳の大規模噴火によって瞬時に曽根丘陵をおおった（放射年代2.5～3.8×10^5年前、Kaneoka et al，1980）が、扇状地的環境はそのまま継続していった。その後の構造運動により当地域は変形し、曽根層群は断層を伴った撓曲崖を盆地側に形成し、同時に崖線と御坂山地との間には凹部が形成された。しかし山地側から供給される大量の礫の堆積作

用によって凹部は埋積されて曽根丘陵の平坦面ができたものと考えられる。約８万年前のPm－Ⅰ降下時には既に離水した平坦面として安定していたであろう。また約8万年前頃から活動を開始した富士火山のテフラも頻繁に降灰し、台地上に火山灰層を堆積していった。河川の浸食は８万年前以降ますます活発になり曽根丘陵を開析していった。遺跡西側の大鳥居地区には、現在仲川と大門川とが流れている。仲川は流路の変更がしばしばあり、その浸食・堆積作用で大鳥居集落の存在する複雑な平坦面が形成されたものと考えられる。現河川にそって沖積面が形成され現在に至る。

なお、地上の遺跡と谷埋め堆積物の関係については、谷埋め堆積物に関する資料・研究が不足しているため不明であり、今後の課題である。

引用文献

KANEOKA, I., MEHNERT, H., ZASHU, S. and KAWACHI S. (1980) Pleistocene volcanic activities in the Fossa Magna region, central Japan. K－Ar age studies of the Yatsugatake volcanic chain. Geochem. Jour., 14, 249－257.

河西学（1987） 上野原遺跡の火山灰層. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第19集, 上野原遺跡・智光寺遺跡・切附遺跡, 95－98.

小林国夫・清水英樹・北沢和男・小林武彦（1967） 御嶽火山第一浮石層－御嶽火山第一浮石層の研究 その1－地質学雑誌, 73, 291－308.

町田洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－. 科学, 46, 339－347.

三村弘二（1967） 黒富士火山の火山層序学的研究. 地球科学, 21, 1－10.

ま と め

横畑遺跡には、先土器時代の武蔵野Ⅱb期と思われるナイフ形石器、縄文時代前期末、中期中葉、中期後葉、後期初頭の土器、中期後葉の住居址と小ピット、弥生時代中期後半、後期後半の土器、後期後半の住居址群（２～４号住居址）、古墳時代前・後期の土器、奈良時代の土器、平安時代の９～10世紀代の土器、10世紀末の住居址（５号住居址）、12世紀代と思われる住居址（６・７号住居址）、中・近世の竪穴状遺構、小ピット群がある。弥二郎遺跡には、先土器時代の武蔵野Ⅱα期だと思われるナイフ形石器、縄文時代前期末、中期中葉、中期後葉の土器、弥生時代後期後半の住居址群、中・近世の土器がある。

今回の調査の中で、横畑遺跡の中・近世遺構、遺物群が注目される。44基の方形を主体とする大・小の竪穴状遺構群で、大型のものは東側に、小型のものは西に多く、それぞれ群を成して切り合っている。また、東西、南北方向に配列性の窺える小ピット群がある。遺跡南限にある小山の北東部をＬ字状に切り取ったような現地形と、小ピット群の配列性や竪穴状遺構各辺の指向性との一致やその残存する深さのバラエティーから、地形の改変、掘削と遺構群形成の

同時性が考えられる。竪穴状遺構覆土は、黒色土に多量のロームブロックが混入したもので、軟質な点や掘削工具痕がみられる点から、掘削後短期間で埋めもどされと考えられる。第3ピット群を覆うプライマリーな土層と遺物群の存在からして、地形改変は遺構掘削以前であろう。そして、改変後も改変面に豊かな黒色土があったことになる。この黒色土は改変後入れられたと考えるより、耕作等の深耕によるより深部のローム層の耕土化（黒色土化）とともに漸次地形が改変されたとみた方が妥当であり、深さのバラエティも説明できる。遺構群と地形は、耕作と遺構の掘削をくりかえしながら、年々歳々形成されていったのであろう。

遺構に伴う遺物群は、土師質土器の小皿や内耳土器、擂鉢などで、年代の決め手となる陶磁器はほとんどない。小皿は多種他様で、各遺構から少量ずつ出土しており、組成などを問えない。そのなかで、内耳土器に明瞭な違いがある。器壁が薄く硬く胎土に多量の砂を含み断面色調が暗褐色で口唇が平坦なものと、器壁が厚く軟質で胎土に多少砂を含み断面色調が黄褐色で口唇が丸いものである。いずれも口縁が直立し鍋形である。前者のみを出土する遺構は、第5小ピット群、10・11・38号竪穴状遺構。後者のみは、第3小ピット群、18・26・27・31号竪穴状遺構。14・23・35号竪穴状遺構で両者が混在する。第3小ピット群周辺に後者が分布し、その周辺にいくにしたがって前者が多く分布する。分布が違う点から、両者の違いは時期差であると考えうる。しかし、新旧については決め手を欠く。ただし、年代の上限については次のように考えられる。長野県御社宮司遺跡での内耳土器分類のうち、AⅢ型に後者が近似する点、ほうろく型がない点、土師質小皿の類例が15世紀代に位置づけられている岩崎館跡になく、16世紀代の武田氏館跡にはある点、陶器が16世紀以後のものばかりである点などから、16世紀以後であろう。また、近世に入ってもそう新しいものではないであろう。また、溶融物付着土器が8号竪穴状遺構や第5小ピット群に多くある。羽口もあり、銅またはその合金を溶かして何かに使う作業が近辺でなされたらしい。特異な鍛冶集団の存在を考えうる。

本書の引用・参考文献

磯貝正義・飯田文弥　1973　『山梨県の歴史』　山川出版社

坂本美夫・末木健・堀内真　1983　『奈良・平安時代土器の諸問題－甲斐地域－』（『神奈川考古』第14号）

坂本美夫　1986　『甲斐国に於ける古代末期の土器様相』（『神奈川考古』第21号）

坂本美夫　1983　『山梨県における15世紀以降の土師質土器編年』（『甲斐考古』20の1）

山本寿々夫・山崎金夫・坂本美夫　1977　『（伝）岩崎館跡発掘調査報告書』

信藤祐仁・畑大介・伊藤正幸　1985　『武田氏館跡』Ⅰ

勝沼氏館跡調査団考古班　1975　『勝沼氏館跡調査概報』、1977　『勝沼氏館跡調査概報』Ⅱ、1978　『勝沼氏館跡調査概報』Ⅲ

長沢宏昌　1985　『笠木地蔵遺跡』

小林秀夫　1982　『長野県における内耳土器の編年と問題』（『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市　その5－昭和52・53年度』）

安田龍太郎　1981　『中世土師器と内耳土器－野州の中世遺跡出土品を中心として－』（『野州史学』5）

図　　版

横畑遺跡航空写真　（下が北）

横畑遺跡遠景　（弥二郎遺跡から）

A区遺構配置状況　（東から）

A区中央ローム層掘削状況

1号住居址

1号住居址埋甕

横畑遺跡

図版2

2号住居址

2号住居址炉址断面

3号住居址

3号住居址遺物出土状態

4号住居址

5号住居址

横畑遺跡

6号住居址

6号住居址カマド

7号住居址

7号住居址カマド

1号竪穴状遺構

2号竪穴状遺構

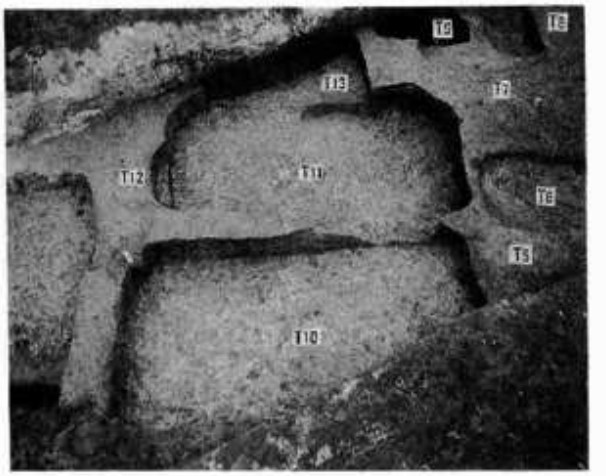
横畑遺跡

図版4

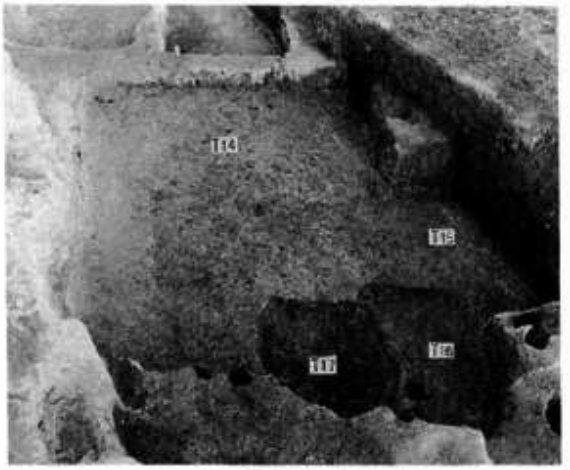
3号竪穴状遺構

4号竪穴状遺構

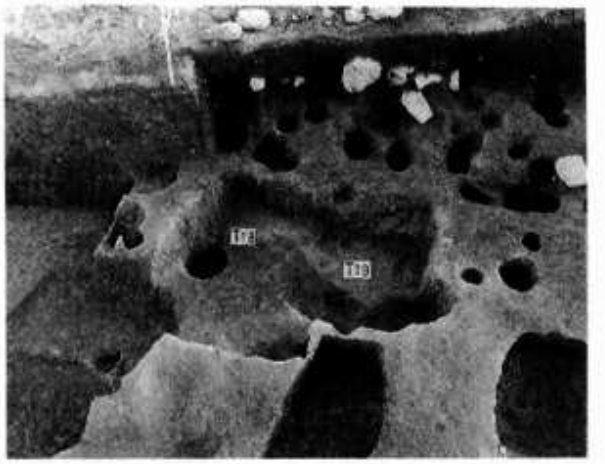
9号竪穴状遺構



5～13号竪穴状遺構

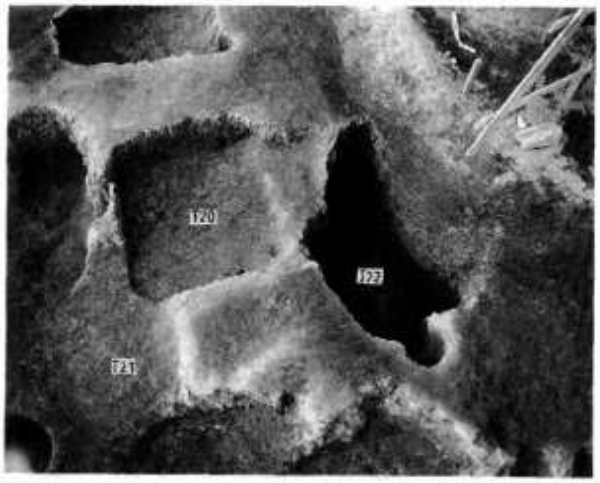


14～17号竪穴状遺構

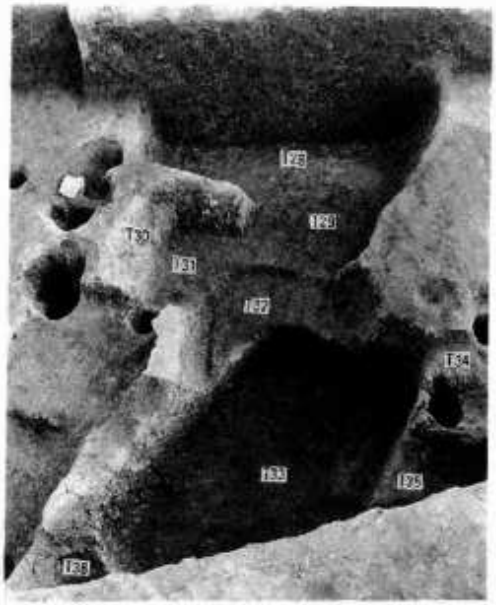


18・19号穴状遺構

横畑遺跡



20～22号竪穴状遺構



28～36号竪穴状遺構

23号竪穴状遺構硬い覆土の分布状態

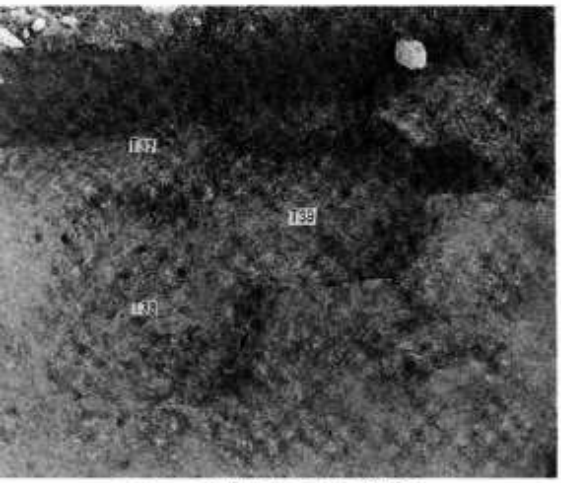
ロームブロックを含む竪穴状遺構覆土と切り合い状況

23号竪穴状遺構掘り上げ状況

掘削工具痕　（33号竪穴状遺構南西隅）

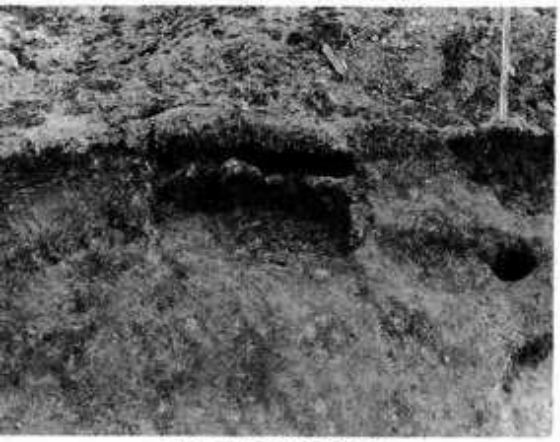
横畑遺跡

図版6



37～39号竪穴状遺構

40号竪穴状遺構



41号竪穴状遺構

42～44号竪穴状遺構

第3小ピット群

第5小ピット群と礫の分布

横畑遺跡

弥二郎遺跡遠景（横畑遺跡より）

遺構配置状況（東から）

遺構配置状況（西から）

完掘状況（東から）

完掘状況（西から）

弥二郎遺跡

図版 8

1 号住居址

1 号住居址炉址

2 号住居址

2号住居址台付甕形土器出土状態

3号住居址

3 号住居址炉址

弥二郎遺跡

1 号住居址埋甕　(1)

1 号住居址埋甕　(2)

( ) 内は第 6 図中の番号

図版10

壺形土器　（3）

台付甕形土器　(1)

壺形土器　（2）

壺形土器　（4）

坏形土器　（7）　（6）　（5）

( ) 内は
第14図中の番号

3号住居址出土遺物

甕形土器　（1）
4号住居址出土遺物

横畑遺跡

坏　(2)　(4)　(1)

坏　(3)　(5)　(6)

( ) 内は第22図中の番号　高台付坏 (7)　6号住居址出土遺物

中・近世小皿

第3小ピット群P31　第2小ピット群P2　14号竪穴状遺構　27号竪穴状遺構

横畑遺跡

図版12

内耳土器
（第３小ピット群）

擂鉢
（第５小ピット群）

火打ち石

石錘

第３小
ピット群
出土石器

羽口

溶融物付着土器（18号竪穴状遺構）
横畑遺跡

２号住居址出土土器
弥二郎遺跡

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第20集

横　畑　遺　跡
弥二郎　遺　跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

印刷日　昭和62年３月25日
発行日　昭和62年３月31日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
発行所　山梨県教育委員会
印刷所　㈱　峡南堂印刷所